
円堂女体化計画。

チャッピー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

円堂女体化計画。

【Nコード】

N3106V

【作者名】

チャッピー

【あらすじ】

円堂がもし女子だったら、どうなるのかな、てお話。
いろんな人と絡ませたい(^^)(^)

説明

この作品は、捏造、女体化、BL、その他諸々のヤツを含みます。

やばかったらダッシュで逃げてね

（説明）

田堂が女体化したら、みんなとどーゆー恋をするか、っていう妄想から。

なんか、シリアスかギャグかわからん。

キャラ崩壊・文めちゃめちゃ

ハッピーエンドとバッドエンドの作品があります。

キャラは……

豪炎寺・鬼道・風丸・吹雪・一之瀬・染岡・立向居・綱海・佐久
間・源田・不動

アフロディ・ヒロト・レーゼ・バーン・ガゼル・虎丸・飛鷹
フィディオ・ロココ

ぐらいですかねw

円堂は、えんどうまもり円堂守つていいいます

・雷門サッカー部キャプテン GK

・世間的に男

・男女ともに人気

・女と知っている人は、風丸とわずかな先生たち

・性格は男っぽい、デリカシーがなく、マネに注意される

・実は料理が上手

説明（後書き）

てゆーか、によまたはB.L.でしようか？

あらすじ……？

雷門中にいるキャプテン、円堂守。

彼にはある噂がある。

「円堂女説」

そんな噂を持つ円堂は、……女でしたあ。

しかし、男に負けない熱さは、女とは思えないほど。

彼女の熱さは、部員になかなか伝わらず……

そんな彼女の前に現れたのが、豪炎寺。

豪炎寺は、実力ありのFAだが、妹の事故でサッカーと距離を置いていた。

だが、サッカーから離れたはずの彼が、円堂への興味でサッカーに戻ってくる。

豪炎寺の入部、風丸の仮入部、帝国との練習試合。

そして、円堂の秘密。

すべてが絡み合ったとき。

物語が、色づく。

あらすじ……？（後書き）

最初は豪炎寺編だよ

出会い

夕日がきれいに見える河原だ。

そう思っ、俺は眺める。

夕日ではなく、河原のところでサッカーをしている奴らを、だ。

「おい！ボールそっちいったぞ！」

「うわーまてー！」

「そうそう！ うまいぞドリブルー！」

俺は、サッカーが好きだ。

好きであるとともに、憎んでいる。

簡単にいうと、俺の応援に来ようとした妹が、事故で意識不明となった。

俺がサッカーをしなければ妹、夕香は、事故に遭わなかった。

その日の、決勝戦、俺は出場しなかった。

夕香の笑顔が見れない以上、俺はサッカーをしない。

……いや、できない。

少し考えすぎたようだ。

目を戻すと、異常に気づいた。

男二人組が、サッカーをしていた奴らに突っかかっている。

いや、二人組から、小さい子たちを一人の少年が守っている。

「やめろよ！ 謝ったじゃないか！」

「うるせえ、たかがお遊びで俺に家がケガさせやがって。」

「サッカーはお遊びなんかじゃない!!」

「けっ! こんなもん、俺だって蹴れるわ!」

「!!」

男が、少年に向かって、ボールを蹴る。

俺は、反射的に体が動いて、男が蹴ったボールを、蹴り返した。

「ぐああああ!!」

「クソッ、ガキが!」

顔に当たったらしく、うめきながら逃げていった。

……隣の少年の笑顔が、キラキラ（本当に）輝いていた。

「すげえなお前! サッカーやってたんだろ?」

「いや、もうしてない……」

「嘘だろ! サッカー好きなんだろ!」

少年の瞳を、俺は食い入るように見つめていた。

汚れていない、本当に真っ白な目。

ていうか、こいつは男なのか?

彼の体は、男と比べると丸みを帯びている。

顔も、カッコイイというか、かわいいに近い気がする。

見れば見るほど。

かわいいぞ、こいつ……

???????

何を言っているんだ？

「お前、女か？」

「はあ？ なにいつてんだ！ 俺は男だぞ！」

……だよな。

とりあえず、帰ることにする。

「あ、待てよ！ 一緒にサッカーやろっぜ！」

無理だ。

それは、俺にはできない。

無視する。

「悪いが、俺はサッカーはできない」

少年は、何か言っていたが、耳には、はいらなかった。

~~~~~

その日は、少年の、サッカーやろっぜ、という声が、頭を回った。

サッカーはできない。

しかし、ボールを蹴ったとき、俺は間違いなく、興奮した。

あの気持ちが一番好きだ。

でも、サッカーはできない。

もう一度、あの少年に会ってみたい。

## 出会い（後書き）

もう、完璧なる駄文。

今日の格言

「一緒にサッカーやろうぜ！」

## 転入

「あゝ、君が、豪炎寺修也くんかな？」

「はい、そうです」

おそらく、この人は校長か理事長だろう。

ここは校長室で、なぜかこの人と面談みたいなことをしている。

こういうのは苦手だ。

誰かが入ってきた。

「おはようございます。豪炎寺君ね？」

「……はい」

なんだ、このいかにも、お嬢様気取ってます、的な女は。

「私は雷門夏美。雷門中学校、理事長の娘です。」

一つ言っておきましょう。私の言葉は理事長の言葉と思って貰って結構です」

「……わかりました」

「では、豪炎寺君。私たちの雷門中学校に来てくれてありがとうございます。歓迎するわ」

「……ありがとうございます」

「今からクラスに案内します。ついてきて」

……こいつみたいなお嬢様気取りはあまり好きじゃない。

あ、昨日のあいつの顔が見たくなってきた。

教室の前には、俺を待っていたのか、担任の先生らしき人が立っ

ていた。

俺を見るなり、よく来たね〜、さあ、入って、だもんな。  
先生って世話焼きだよな。

「え〜転入生の豪炎寺修「あー！ー！ー！」「うるさいぞ円堂！」

「す、すみません……………」

「え〜〜、豪炎寺修也君です。仲良くしてやれよ」

「……………お願いします」

びっくりした。

あいつと同じクラスだなんて。

先生との会話を聞いていると円堂というらしい。

授業の時は、適当にノートを取って終わった。

で、休み時間。

あいつが真っ先に来た。

「お前、豪炎寺って言うんだな！俺は円堂守えんどうまもり。よろしくなっ！」

握手を求めてくる。

その笑顔が、まぶしい……………。

「あ、ああ、よろしく……………」

握手はさすがにできなかった。

なんであいつの太陽みたいに明るいんだらう。

ていうか、本当に男なのか。

円堂の話を適当に流して隣のヤツに聞いてみる。

「あー、お前も思うか？」

「ああ」

「そーだなー、『円堂女説』があるしな」

「なんだそれ？」

「なんか、円堂、体育で着替えるとき、いつつもないんだ。だれかが、男子トイレで着替えるのを見たらしいし。」

水泳も体調不良とかで休み。身体測定の日はいつつも休み。

なにより、入学前、円堂が何回も何回も雷門中に入るところを見て不審がつてるヤツがいる。

でも、フツーにサッカー部でキャプテンやってるし、普通の男子より運動神経いいし。

しゃべり方とか男っぽいいし。自分のこと『俺』だし。不器用だし。ちよつとわかんねーよな」

気になるのは、まんざらでもなさそうだ。

なにかぶつぶつ言っている。

円堂、か。

少し、興味がわく。

明日でも、話しかけてやろうか。  
そう思った。



## 転入（後書き）

### 今日の格言

「なんだ、このいかにも、お嬢様気取ってます、的な女は」  
「私の言葉は理事長の言葉と思って貰って結構です」

## サッカーと妹と

中学校への行きがけ、俺は夕香の病室に寄った。

少し、夕香と話がしたかったからだ。（まあ、話せないのだが）

病院というのは無駄に広く、タイル床のため音が反響する。

松葉杖の音とか、咳の音とか、人のしゃべり声や、足音。

だから……………

後ろから、円堂がつけているのはまるわかりだった。

角を曲がって、そこで構えてやる。

予想通り、円堂は俺にぶつかって、尻餅をついた。

……………ばれてないと思ったのか。

「あ、ごごごメンな！」

なんか、お前がサッカーしないの、ケガかなんかかと思って

心配で、それで……………」

「……………はあ。別に怒ってなんかない」

「ホントか！ ふう……………」

胸をなで下ろす円堂。

怒鳴られると思っていたらしいな。

そんなことなら、始めからするなよ。

俺は、円堂はこのままでは帰らないと思い、夕香に会わせてやった。

円堂は、何なのかよくわかっておらず、ぼかんとしていた。

「俺の妹だ。去年の事故で意識が戻らない。

ずっとここで眠ってるんだ」

「去年から？」

「ああ」

「何があつたんだ？」

「俺が、サッカーの決勝戦に出て、夕香は見に来ようとしていた。

その時、事故にあつたんだ」

「でも、妹さんがこんな風になつたのは……」

「俺のせいなんだよ」

自然と言葉が出てきた。

他のヤツに、こんな風にいったことはない。

円堂だけだ。このことを言ったのは。

なにか、違う気がして。

サッカーを思うところだけでも、通じる気がして。

それよりなにより。

「お前に、聞いてほしかったんだ」

円堂は、少し優しげな、母親の様な表情で夕香を見つめていた。そして、夕香のそばによって「お前の兄ちゃん優しいな」と、呟いた。

その時の円堂の表情が、美しくて、見とれてしまった。夕香の頭を優しくなで、立ち上がった。

「もうそろそろ学校に行かないと遅刻だな」

「ああ、夕香のこと、誰にも言わないでくれ」

「わかってるって」

いつもの、ニカッと笑う笑顔で円堂は頷いた。

流れるに二人で行くことになるのだろう。

それでもいいか。

サッカーはできないけど、サッカー好きなこいつのことは好きになれそうな気がする。

~~~~~

部屋を出るとき、夕香の顔を見た。

母親に頭をなでられて喜ぶ、幼い子供の顔。

円堂を夕香を会わせて正解だったらしい。

サッカーと妹と（後書き）

今日の格言

「お前に、聞いてほしかったんだ」

練習試合

雷門中と帝国学園との練習試合があった。

この試合は、サッカー部存続の大切な試合らしく、たくさんの奴らが見に来ていた。

始めの方は流れはよかったが、途中から、帝国が牙を向いた。

ジャツジスルー、デスゾーン、皇帝ペンギン2号。

様々な必殺技は、雷門にダメージを与え、ほとんどが倒れていた。

しかもFAのヤツは、10番を投げ捨て逃げていった。

10番を握りしめる。

こんなものか、と思い始めた矢先。

「……まだ、終わってねーぞ……」

円堂が立ち上がる。

帝国のキャプテン、鬼道きどうは見てて楽しいのか、謎の笑みを浮かべる。

そして、ボールを蹴る。

「このシュートを止めて見ろー!!」

「うおおおおおおっっっ!!……!!……!!」

円堂の雄叫びとともに、足下から、激しいオーラがあふれ出る。

「ゴット・ハンド!!」

止めた。

しっかり、あの小さい手で止めた。

あの、力強いシュートを、止めた。

これが、円堂の力か。

俺は、夕香に謝る。

「夕香、お兄ちゃんを許してくれ」

10番を着て、グラウンドへ走る。

円堂が俺に気づく。

「豪炎寺いいい!!!!」

ボールがこちらに投げられ、俺は走る。

ドリブルを使ってボールを操り、一気にゴールへ駆け抜ける。

ああ、俺はサッカーが好きなんだ。

やっぱり、気持ちには嘘はつけないんだ。

このボールを蹴る感覚。

土と汗のにおい。

風が横を通る瞬間。

すべてをサッカーで感じられる。

幸せだ。

「ファイアトルネード!!!!」

歓声が沸き上がり、円堂がこちらに駆け寄ってくる。

「へへっ！ やったな豪炎寺！」

「ああ！」

円堂は、俺と肩を組みたかったらしく、腕を上げる。が、疲労のため、バランスを崩し、倒れる。

俺は円堂の体を支えてやった。

……体が、柔らかい。

男にはない、ほのかな甘ったるい香り。

円堂から感じる、男とは違う何か。
直感する。

こいつ女だ

その時、終了のホイッスルが鳴る。

帝国が、棄権したらしい。

10で雷門の勝ちだ。

円堂たちは1点がうれしいのかみんなで肩を寄せ合い、喜んで
いた。

俺は、役目が終わったと思い、10番を脱いでその場を去る。

「豪炎寺、サッカー部は」

「入らない。今日だけだ」

すまない夕香。お兄ちゃん、約束破った。

妹に貰ったペンダントを握りしめ、グラウンドを出た。

練習試合（後書き）

なんか、違う気がする……

今日の格言

「……まだ、終わってねーぞ……」

入部

俺が「10番」を背負ってから数日。
毎日円堂が勧誘に来ていた。

「だから、俺はサッカーはしないといたただろう」
「でも、この前はしてくれただじゃないか！」
「あれは……」

お前に心を動かされたから、
とはいえないな。

こいつはいつでも熱くて本気だ。
本当は、入ってやりたい、でも夕香は……

「あーーーーー!!! もーいい!!!」

怒っていつてしまった。

ドスン、と不機嫌そうに座る。

女のくせに……と言ってやりたいが、男となっているらしいので
黙っておく。

~~~~~

数学の授業はどうも好きではない。  
つらつらと数字が並ぶ黒板を見ているふりをして、円堂を見ている。

一生懸命、数字と格闘しているらしい。

円堂は何で男のふりをしているんだろう。

サッカーは男のスポーツを思っているんだろうか。

女がするのがおかしいから？

それはあり得るかもしれない。

あれくらのサッカー馬鹿なら、「男になってもサッカーする！」  
とか言いそうだ。

そこまでサッカーが好きなのか。

少しうらやましい気がする。

俺だって、サッカーはしたい。

でも、夕香の事を思えば、我慢できる。

しかし、それが正しいのだろうか？

最近そう思うようになった。

サッカーを素直に愛するあいつを見てから。

「妹を理由に逃げてるだけだ」

そう思えてきた。

自分自身がよくわからなくなって、ノートを閉じた。

~~~~~

帰り、円堂と出会った河原の近くを通った。

そこで、円堂と、今のサッカー部のFAのヤツ（ピンクはげ）が話していた。

「俺、全然いいシュートができねえ……………」

「やっぱ、だめなのかよ……………」

「そんなことないさ！」

円堂がヤツ（ピンクはげ）の肩を叩く。

「染岡は十分がんばってるじゃないか！　がんばった分、絶対強くなる！」

「お前は豪炎寺じゃない。染岡竜吾だろ？　染岡には、

『染岡竜吾の必殺技』があるから！

信じて練習だ！　いこうぜ、染岡！　付き合ってやるぜ！！」

「……………円堂。……………へへっ、やってやるうじゃんか！」

二人は、河原の練習場に立ち、ひたすらゴールに打ち込んでいた。

俺は、間違いなく嫉妬していた。

「竜吾」と、ピンクはげ（染岡というらしい）を名前で呼んだこと。染岡をあんな風に励ましたこと。

で、付き合ってる（本当は別の意味）と言ったこと。

ものすごくむかついた。

染岡がうらやましかった。

入部すれば、俺も円堂に、あんな風に話しかけてもらえるだろうか。

夕香に謝ろうか？

俺は、やっぱりサッカーをするべきかもしれない。

わからない、自分自身が。

「円堂君に惚れたの？」

雷門、とかいうやつだ。

「彼に惚れた人は男女問わずいるわ、あの人か男か女かわからないものね」

「あんたも、惚れてるのか」

「まさか。ただ……………気になってるだけよ」

それを世で言う『惚れてる』ってやつじゃないのでは？

「あなたがサッカー部に入ってるのを悩むのなら、はいっただらどう？」

「あんたに言われても……………」

「妹さんは、あなたがサッカーする姿が好きじゃないのかしら？」

「！ それは……………」

「私が言うべき事ではないけれど、きつとそうだと思うわ。

あなたには、サッカーが一番似合うもの。

円堂君も、喜ぶわよ」

入るか。

この女の言うことは正しい。

俺は、やっぱり、逃げていたんだ。

夕香を理由に、大好きなサッカーから、逃げた。

それが恥ずかしくて、悔しくて、サッカーに顔向けできなかったんだ。

今、ここで俺は、道を正す。

「行ってあげなさい」

「すまない」

「別にあなたのためじゃないわ、ただ、サッカー部が強くなればって思っただけよ」

円堂たちのもとに行く。

「豪炎寺!!」

「円堂、俺、入るよ。サッカー、する」

その時、円堂が抱きついて、染岡が顔を真っ赤にして俺たちを引き剥がした。

……………余計なお世話だ。ピンクはげ。

入部（後書き）

ここで夏美のツンデレ疑惑発生。

今日の格言

「サッカー部のFAのヤツ」ピンクはげ」

染固ごめんなさい。

ライブル

「今日から入部する豪炎寺だ！ みんな仲良くやろうな！」

「わあ！」「豪炎寺さんだ！」「シユート教えてくださいっす！」

「あー俺も！」

一年には結構受けがいいのだが。

なぜか二年から黒いオーラが……。

「……………」

特に昨日のはげと、髪の毛長い男（元陸上部だった様な気が）が異常ににらんでくる。

何なんだ、こいつら……………。

「円堂、ちょっと……………」

「ん？ 何だ風丸？」

風丸（髪が長いヤツ）が円堂と何か話している。

円堂はびっくりしたような顔をして、わかった、と行って一年と一緒に出ていった。

イヤな予感がする……………。

~~~~~

で、部室に残ったのは、風丸、染岡、松野、半田、影野の五人で、俺を取り囲んでいた。

「なぜ、円堂に近づいた？」

風丸が、まるで詰問かのように俺に聞く。

「サッカーがしたかっただけだ」

「円堂にやましい気持ちがあったからだろ?!」

「染岡！ 落ち着け！」

半田が制止する。

……中途半端な役割だな。

「まあ、円堂が気になったのはお互い様じゃない？」

「マックス……！」

「そうだが、俺は、こいつから漂ういかかわしい匂いがきにくわん」

風丸ってこんなキヤラなのか。

あれか、円堂の事になると過保護なのか？

でもなぜ過保護？

「お前ら、よってたかって円堂に優しすぎじゃないか？」

「お前は知らないだろう、円堂が何度、変な男に絡まれたか……」

……

「風丸……」

「俺はそれをよく知っている。」



シーン

「こりゃ重傷だねえ……………」（豪炎寺が）

ぼそつと呟いたマックスの言葉に、全員が頷いた。

とりあえず、入部は認められた。

こいつらなんか円堂はわたさん。

俺が、円堂の一番になってやるっ！！

## ライバル（後書き）

今日の格言

「こりゃ重傷だねえ……………」  
（豪炎寺が）

## 女のサッカー

今日は、あの円堂がサッカーを休んでベンチに座っていた。  
マネージャー（木野というらしい）がつきつきりで看病している。  
お腹を押さえて、呻いている。

「サッカーしたいよお……………」

「ダメ！！ちゃんと休んでなさい！」

「だってよお…………、あきいい……………」

「もう、いっつも無理してるんだから今日はおとなしくしてなさいよ」

見るところによると、結構重傷らしい。

サッカー馬鹿といえる円堂がサッカーをしないのだ。

部員も、キャプテンがいないと気が引き締まらないらしく、風丸が仕切っていた。

「こらお前ら！ちゃんと練習しろ！」

確かに円堂がいなくてやる気がないのはわかる！

俺だって、本当は隣にいつて、木野と一緒に看病してやり、

「風丸、もう黙れ」

「俺の話をじやまするな！ハゲ！」

「なっ！！この！お前だってロン毛のくせに！」

「痛いたい！髪引っ張るなっつっつ！！！！！」

見てると悲しくなってくる。

とりあえず、止めてみる事にした。

「お前ら、もうやめないか！」

「うるせえ！ チューリップみたいな頭しやがって！」

ピキーン

「いったなコノヤロオオオオオオ！……！……！……！」

結局、俺ももみ合いに参加して、練習はまともに出来なかった。

~~~~~

練習が終わって帰り道、部室に夕香に貰ったネックレスを忘れたの思い出した。

明日でもよかったが、夕香がくれたもの、と言うことで、部室へ急いだ。

夕香、ゴメンな………………。

心の中で謝りながら、暗い道を歩いた。

部室には、電灯がついている。

影がある。あの髪型は、円堂だろうか？（何という幸運！）
とりあえず、用件を済ませようと、ドアを開ける。

「……………豪、炎、寺？」

「円堂なの、か？」

そこには、円堂がいた。

ユニフォームは脱いであり、上半身は下着だ。

下着、というか、晒さらというヤツを胸に巻まいている。

巻いても、隠れきれない膨らみが、はっきりわかる。

服を着ていない分、体のラインがはっきりわかる。

くつきりと細い体。

わかる。

こいつ、やっぱり……………

「わあああああああ！……！」

「あちよ、」

「なんでいるんだよっ！！ はやくはや、むぐ」

「静かにしろ、誰かがいるかもしれないだろう」

俺は、円堂の口をふさいで、落ち着く様に諭した。
収まった様だ。

「後ろ向いてるから服を着ろ」

「うん……………」

その返事は、ひどく弱々しかった。

~~~~~



「やっぱり、お前は女なんだな」

「ふえ？ 気づいてたのか？」

「ああ。ていうか、みんな気づいていると思うぞ」

口には出さないがな。

円堂は、頬に手を当て、うわああ、と残念そうに声を上げた。

「何で男として振る舞っているんだ？」

「……………女がサッカーするのが、おかしいから……………」

それを口にするのは、苦しそうだった。

円堂は、嫌々ながらも、話してくれた。

女がサッカーなんて、似合わないと罵られた。

好きなサッカーを、するなと言われた。

言葉遣いは女らしくしろ、と命令された。

お前は女じゃないと言われた。

そして、サッカーボールを取られた。

何度も何度も、同じ事を言われ、風丸にかばって貰った。

そのたびに、苦しかった。

挙げ句の果てに、母親は、娘を女らしくするために、女子中学に入れようとした。

その時は、もう激しかった。

自分は女ではないといけないのか、と叫んだ。

じゃあ、男になりなさいと言われた。

その時、自分の中の女に、ひびが入って、一つの考えに至った。

「それが、男として生きる、という事なのか」

「ああ。サッカーはホントに好きなんだ。

おかしいだろ？ 女がサッカーしたい、なんてさ」

自嘲、といった笑い方、だった。  
目に、涙がたまっていた。

「俺は、ただサッカーがしたいだけなんだよ。

ただ、お前らが男に生まれて。

俺が、女に生まれただけだろ？

俺からサッカーを奪う理由にはならないはずだ。

なのに、なんでなんだよおお……………」

円堂は、声を殺して泣いた。

苦しそうだった。

俺は、何か出来ることはないかと思って、円堂を抱きしめてやった。

円堂は、俺を拒むこともなく、抱きしめられたまま泣いていた。

その体は、とても小さくて、儂くて。

なのに、どこか暖かい。

この体で、あのゴールの前で、たくさんのシュートを止めたとは考えられなかった。

今の一瞬だけは、円堂が女でいらねえればいいと思った。

## 女のサッカー（後書き）

円堂はホントに苦しかったと思います。

### 今日の格言

「俺は、ただサッカーがしたいだけなんだよ」

## 「守」の意味

円堂は、泣きやんだら、俺から自然に離れていった。

「豪炎寺は、俺のこと、おかしいと思わないのか？」

「女、ということか？」

「ああ」

どうだろう。

俺はおかしいとは思わない。

むしろ、俺は円堂より下だ。

俺は、サッカーが好きなのに、変な理由をつけて、サッカーから逃げた。

人の目は怖かった。

お前は逃げた、と物語る、あの目が。

怖かったから、逃げた。

でも、円堂だって同じだったはずだ。

自分に向けられる、批判の目。

しかし、円堂は逃げなかった。

サッカーが本当に好きだから。

だから、サッカーを出来るように、いっぱい考えて。結果はどうであれ、サッカーから逃げなかった。

俺には、田堂に何かを言う資格はない。

「お前はすごいよ」

自然と出た言葉。

田堂はなぜそんなことを言ったのか、わからないようだった。

「お前は逃げなかった。

好きなものから逃げなかった。

そのためにした行動がどうであれ、お前はサッカーを愛し抜いた。すごいよ。お前は本当に。

逆にお前がうらやましいよ。」

きつと、そんなまっすぐな君だから。

みんな、君に惹かれていくんだろう。

太陽みたいに、きれいで、美しくて。

そんな君に、俺も……………

「そ、そんなにほめられると……………」

顔を真っ赤にしてうつむく。  
つくづく可愛いヤツだ。

……………

「なあ、お前の名前って、『まもる』って言うんだろっ?」

「あ、それは表向き。」

ホントは『まもり』って読むんだ。

なんか、名前も男っぽいよなあ……………」

はははっ、と笑う。

まもり……………。

口の中で、何度も反芻する。

「いい名前だな」

「へ？」

「ゴールキーパーのお前にぴったりじゃないか。

『守』<sup>まも</sup>りなんて。

きつと、お前は、サッカーに愛されてるんだな」

言っつて、少し恥ずかしくなってしまった。

「うん……………。ありがとな。」

お前もいい名前だと思うぞ！ 修也！」

ドキン、と胸がなる。

こいつは、相当鈍感らしい。

「言ってくれるな、円堂……………」

「？」

円堂にぐぐつと近づき、床に押し倒した様な体勢になった。さすがに異常事態に気づいたのか、ばたばたともがくが、がっちり押さえているので、無駄な抵抗となった。

「お前、サッカー以外じゃ女なんだからな。」

「一ついいことを聞いたぞ」

「え！ それってどういう……………」

言い終わるのを待たないまま、円堂の頬に唇を落とす。

柔らかい頬だ。



円堂は、かあっと熱くなって、わたわたしている。

「な、なななな!」

「口止め料だ。」

まだ暴れるなら、今度は口に行こうか?」

そう聞くと、抵抗をやめおとなしくなる。

「そうだ、いい子だ……………」

少し、もったいない気もするが、円堂を解放してやる。何が起きたのかよくわからない、といった表情だった。

そして、立って後ずさりする。

「なんで、俺にそんなことを……………!」

俺はまた円堂に近づく。

円堂はまた押し倒されると思ったのか、また後ずさりする。その結果、壁に押しつけた体勢になった。

「一回しか言わないぞ?」

円堂の耳に口を近づける。  
いい香りが鼻をくすぐる。

「お前が、好きだからだよ」

俺の人生初の告白だった。

「守」の意味（後書き）

いけない話になりましたあ（泣）

今日の格言

「きつと、お前は、サッカーに愛されてるんだな」

敵がたくさん

昨日の事があつてか、円堂は俺と目を合わせようとはしなかった。

「風丸は壁山たちとディフェンスの特訓をしてくれ。

半田たちは、基本からじっくり。ドリブルとかな！

で、フォワード……………つつつ！！！！！！」

「え、円堂！？」

「あ、わり、わりい。」

染岡と豪……………はシュート練！！ 以上！！」

練習の指示を出し終わって、円堂は神とも呼べる早さでゴール前に戻っていった。

顔を真っ赤に染めて。

……………やり過ぎだったか。

「おい、豪炎寺」

染岡が俺の肩を叩く。

「何だ、ピンクハゲ」

「さらつと変なことを言うな。」

お前、円堂になんかしたんじゃないか？」

した。

でも、これを言ったら間違いなく殺される……………！！

とりあえず、嘘ついておこう。

「何もしていない」

「はああ！？ あの円堂見たら絶対なんかしてるだろ！  
顔真っ赤だったし！」

円堂の顔ばかりみてたのか。このむっつりが。

「心の声、聞こえてるからなああ！！」

「！ 聞き間違いだろう！」

「誰がむっつりだあああ！！！！！！」

「くそっ！」

「ファイアトルネード！！！！！！！」

「お返ししてやる！」

「ドラゴンクラッシュ！！！！！！！」

その後は、染岡とボールの蹴り合いとなり、お互い、にらみ合う  
ままだった。

（シュート練にはなったと思う）

しかし……染岡も、あんな強面の顔して、円堂にむっつりだった  
とは。

実に好かれるヤツだな。

ていうか、（一年以外）みんな円堂の事好きなんじゃ？

円堂の魅力は底知れない。

~~~~~

練習は終わり、部室で着替えている最中、風丸が隣に来た。俺は、知らないふりをして、ユニフォームを脱いでいた。

「お前。円堂にキスしたとは。やっってくれるな」(笑)

なぜ知っている？

しかも、顔は全く笑っていないだと！

「うん。俺、円堂に夜、相談されたんだ。

『俺、豪炎寺にキスされちゃった！』ってね。

ホント、お前は……………」

「くっ……………」

「やっってくれるじゃないか」

気づいたら、風丸は俺の手首をぎちぎちと握っていた。

こいつ、握力半端ねえ……………！！

「ふふふ……………次は首へ行こうか？」

「くそっ！」

「っ！！」

俺は反撃と言わんばかりに、風丸の首をつかんだ。

風丸は、変な声で呻き声をあげ、俺の首をつかんで力を入れる。

それは、傍から見れば、すごい光景だろうと思う。

「え、どうの、きつをうぁうとあ……………」(円堂のキスを奪うとは)

「はあく、はあしえ……………っ」（はやく離せっ）

もう、何を言っているのかわからなかった。

両方が限界だったのか、手を離し、ドスンと床に倒れる。
全員の視線が俺たちに向けられる。

そして、息を整えると風丸が飛びかかってくる。

俺は、まだ息が荒く、苦しいため、風丸が一方的にしゃべっていた。
た。

「お前の様な男が円堂を汚したなど許せん……………。」

なぜ手を出した？

「これは大変なことだぞ？」

「ふん、お前らが円堂に手を出さないから、俺がやったまでだ」

「豪炎寺！ お前、」

「いい加減にしろっ！！！！！！」

円堂が真っ赤な顔で部屋に入ってくる。

そして風丸を引き離し、俺に手を差し伸べる。

俺は起きあがって、げぼつと咳込む。

「別に俺はあれがイヤだった訳じゃない。

ただ……………ちよつと困っただけだ。いきなり、だったから。

豪炎寺も悪気があってやったんじゃないんだろ？

なら、もう風丸は怒らなくていいから。

ゴメンな、心配かけて」

「……………すまない、円堂。俺、お前が心配で……………」

「ありがとう。」

風丸はいっつも俺の事、気にかけてくれるよな」

「当たり前じゃないか。」

俺たち、昔からのつきあいだろう?」

風丸と円堂が、なぜかいい雰囲気になって、俺は何も言えなかった。

なんか、ひじょーにむかつく。

でも、円堂の顔を見ると、罪悪感が出てきた。

「すまなかった、円堂」

「いって! 豪炎寺。気にすんな!

風丸がちよつと早とちりしただけだ!」

にこつと笑う円堂。

それを見ると、いろんなもやもやが吹き飛んでいく。

最後には、和やかな空気が、残っていた。

敵がたくさん（後書き）

風丸さんは円堂に過保護。

今日の格言

「……………すまない、円堂。俺、お前が心配で……………」

二度目の帝国

あの風丸ともみ合った日から、円堂は俺と普通に接してくれた。なんだか、申し訳なかったが、あの後もいろいろあった。

土門が実はスパイだったり、鬼道が雷門の練習を見に来たり。監督を捜したり、その他いろいろ。それは全部円堂が処理した。

正直、土門をチームにもう一回入れたのはすごいと思う。それほど、円堂の器が大きいということだろう。なんだか、憧れてしまう。

鬼道と話せる機会があり、「円堂の事が好きなのか？」と聞いた。そしたら、「かもな」だった。意味深すぎて読めない、が、おそらくヤツも円堂に惹かれているに違いない。

そんな帝国と戦う日が近づいていた。

~~~~~

「うっわ、すっげえ!!」

円堂のいった通り、グラウンドはすごかった。

まるで、何かの基地か城か、というくらい学校は大きい。

その中のグラウンドは、芝生がひかれ、ちゃんとしたサッカーのグラウンドだ。

こんなところでサッカーが出来るのか、と思った。

その後、控え室に行った。

誰かが部屋から出てきた。

鬼道だ。

「お前、どうしてここに……………」

「円堂。この部屋には何も無い」

「? あ、待ってっ!!」

鬼道は、俺たちの脇を抜け、去っていった。

文脈からすると、この部屋には仕掛けはない、ということだろう。しかし、他の奴らは信じていないみたいだ。

「だから! 鬼道がないっていつたらないんだって!」

「でも、信じられるか? 帝国の奴らは、」

「鬼道は違うんだ。」

あいつは、信じてやってほしい」

なんだか、鬼道を一目置いてる様で、俺にとってはおもしろくなかった。

鬼道からは、俺に似たものを感じる。

もし雷門に来たら、間違いなくライバルだな、なんて……。

本当に、控え室にはなにもなかった。

その後、グラウンドに行つて準備体操をする。

しかし、円堂はいなかった。

「キャプテン、どうしたんでやんすかねえ……………」

栗松が不安そうに言う。

俺だつて気になる。

すぐ、円堂は帰ってきたが、顔色が悪かった。

「大丈夫か？ 円堂？」

「あ、ああ！ 何でもないさ！

よーし、みんなー！ ガンガンせめてくぞー！」

「おおつつつ！！！！！！！」

試合開始のホイッスル。

しかし、不安は的中。円堂はシュートを止められなくなっていた。

自信をなくした円堂。

それを見るのはつらかった。

お前がそんなんじゃない、このチームは……………。

俺は、様々な想いを込め、円堂に、ファイアトルネードを当てた。

……すまん、円堂。でも……

「お前に何が合ったか、俺は知らない。  
だがな！」

試合が始まったら、今の試合に集中しろ……！」

そういつて背を向ける。

本当は顔を見たいが、見る必要はない。

円堂は、スイッチを入れてやれば、どこまでも行く……っ！

そして、円堂は復活し、しっかりとあの手でゴールを止めた。  
その光景は、とてもすばらしいもので。  
俺たちは逆転を果たした。

「やった……、  
優勝だああ……！！！！！！！！！！」

わき起こる拍手喝采。

俺たちは、本当に優勝したんだ……！！

ありがとう、夕香。

ありがとう。

田原。

## 二度目の帝国（後書き）

今日の格言

「試合が始まったら、今の試合に集中しろ!!」

お礼？

「豪炎寺。ありがとな」

円堂は、確かにそういった。

少し前、帝国に勝って、帰るとき、円堂から、河川敷に寄らないか？ と誘われた。

何という幸せ！ とか言いながら、河川敷の芝生に座っている。

「礼なら、俺もだ。

俺は、お前のおかげでサッカーをすることが出来た。

サッカーが出来て、幸せだ。

すごく、幸せなんだ……………」

「豪炎寺……………」

お前は、俺たちを優勝に導いてくれた。

俺は、お前に会ってすっげえ幸せだよ」

少し、照れくさいのか、円堂が笑う。

そんな円堂を見ると、どうしても愛おしくなって、抱きしめたい衝動が起こる。

俺も、お前に会えて幸せだよ……………。

「あの、さ、円堂」

「ん？ なんだ？」

「この前の告白の返事がまだないんだが？」

「えっ！……………」



顔を真っ赤にして円堂が驚く。  
可愛らしいやつ。

俺は優しい笑みを浮かべて、ゆっくり円堂との間を詰めていく。

じりじりよっていき、円堂の顔が近い。

ホントに、綺麗な目をしているよなあ…………。

びっくりしたのか、すっごく目を開いて、ぽかんと口を開けている。

「なあ、今、ドキドキしてるだろ？」

「っ！ し、してる……………、すっごく、して、る……………」

「それが、好きっていうことなんだぞ？」

「え、えっ！！」

俺は、円堂の手を取って、手を、円堂の胸に押し当てる。  
すっごい、鼓動が速い。

…………… どんだけ緊張してるんだ、こいつは……………。

「心臓、聞こえるだろ？」

「うん、聞こえる……………」

「速いだろ。速いっていうことは、ドキドキしてるんだ」

「え、うう……………」

なんていえばいいのかわからず黙っている……………といった様子だ。

「さあ、聞こうか？」

俺のこと、好き？ 嫌い？」

「っ！ 意地悪っ！……！」

嫌いなんて言えないだろっ！……！」



「アツ、アツ、アツ」

バカッ、といわれた。

お礼？（後書き）

今日の格言

「さあ、聞こうか？

俺のこと、好き？ 嫌い？」

なんか、ただの変態ですね（私）

また敵なのか……（もう疲れる）

俺たちの次の大会は全国大会だった。

円堂は、強いヤツがいっぱいいるなっ、て喜んでたな。

そこで、すごい事を耳にした。

「帝国が……試合続行不可能で……敗北？」

音無の情報だった。

さすがに嘘かと疑おうと思ったが、音無は鬼道の妹と聞いたので、それはない。

本当なのか？

「相手は、世宇子<sup>ゼウス</sup>中学校です……」

世宇子といたら、開会式の時、出席しなかったチームだ。

あの中学校が……一体何を？

不安に包まれる。

~~~~~

それから数日後。

円堂と登校中（一応付き合っているのに、円堂が誰かから背を叩かれた。

俺と円堂を邪魔しやがって……、といらいら全開で振り返ると、意外な人物だった。

「きつ、鬼道！？」

「よお。久しぶりだな、円堂」

鬼道は、雷門中の制服を着ていた。

それが意味する事は、一つ。

「お前、雷門に転入するのかあ！！！！」

「ああ。サッカー部に入るぞ」

「すっげええ！ 鬼道をサッカーできんだなあ！

やったな、豪炎寺！！！」

「ん、あ、ああ……………」

俺は、はしゃぐ円堂を見ても、素直に喜べなかった。

サッカー部に入る、それだけで、心の中で、何かがはじけた。

鬼道は、なぜわざわざ俺たちに話しかけたのだろう。

二人で歩いているのだから、普通は空気を呼んで話しかけないのだが……

（実際、風丸は話しかけなかった。後ろをつけてきたが）

わざと空気を読まなかった？

俺たちの邪魔をしに、わざわざ報告に？

まさか、考えすぎ……………。

「……………」

鬼道が、まっすぐこちらを見ている。
そのゴーグルから、瞳が見えた。

赤いのはもともとらしいが、その瞳からあふれる感情。
妬み。嫉妬。

鬼道の口元には、うつすらの笑み。
それは、よく見ないとわからないくらいの、僅かなもので。
邪魔してやったぞ、といていた……………。

「じゃ！ 鬼道も一緒に学校いこうぜ！！
で、休み時間に学校案内してやる！ 部室も見せるからなっ！！」

あのとびきりのスマイルを鬼道に見せて、円堂は歩く。

「じゃ、円堂の案内ということ、よろしく頼むぞ」
「ああ！ 雷門中はすげーんだぞ！！ あ、帝国もすごかったけど
なっ！！」

俺は、取り残されたように、二人の後ろを付いていった。
鬼道の目的は、俺と円堂を引き離す事、らしい。
くっっ！ 負けてたまるかっ！

「円堂、俺の前で男といちゃつくな」

俺は円堂を自分の元へ引き寄せせる。

「お前は俺のものだろう？」

「つつつつつつつ！！！！！！！」

バカッ！ 鬼道の前でなんてやめるよっ！！」

「お前が悪い」

「おい、彼女がいやがつてるぞ？」

話してやれよ」

「鬼道くくくく」

しかし、俺は離さなかった。

離れたら、円堂は、鬼道の元へ行ってしまっ。

そんな円堂は見たくなかった。

そっぽを向いた俺に、円堂はこう囁いた。

「豪炎寺、ヤキモチやいたのか？」

少し、恥ずかしかったが、何となくうれしかった。

また敵なのか……（もう疲れる）（後書き）

豪炎寺、ヤキモチをやく、の巻き。

今日の格言

「ああ。サッカー部に入るぞ」

鬼道さんとお話しよう

「おい、鬼道」

俺は鬼道を『弁当と一緒に食べる』という口実で、校舎裏に呼び出した。

お互いにぴりぴりした空気がぶつかり合い、居心地が悪かった。

「……なんの様だ？」

「わかっているだろう。」

なぜ、朝円堂に話しかけた？」

「知っているやつに朝の挨拶は基本だろう」

あくまでしらを切るつもりか？

くそ、別の質問……………。

「俺と円堂がどうい関係か、知っているか？」

「付き合っているんだろう？」

「なぜ知っている!？」

「ふっ、やはりな」

しまった、はめられてしまった!!

これは（知られれば危険なので）極秘だったのに。
カマかけか…………。

「なら、なおさら邪魔せねばならんな」

「なぜ？ なんで円堂にこだわるんだ？」

「そりゃ、好きだからだろうな。」

それ以外に、いい言い方が見つからない」

好きだから。

好きだからこそ、みんな円堂と俺を引き離したがる。

でも、円堂は大丈夫だ。

俺は、円堂の『好き』をはっきり聞いた。

きつと、あの『好き』は、恋のはずなんだ。

「あつ！！ いたいたー！」

豪炎寺く！！ お弁当食べようぜ！！！」

円堂が俺を探していたらしい。

俺は円堂のもとへ行こうと歩き出した。

が、鬼道が先に話しかけていた。

また、心の中で、何かがはじけた。

ぱちん、って鳴ったんだ。

「円堂、俺も一緒にいいか？ 転入したばかりで食べるヤツがない」

「あ、うん。いいよな！ 豪炎寺！」

「ああ」

あんな笑顔で言われては、否定なんか出来ない。

鬼道め、本当に俺たちの間に入るつもりなのか……？

これは、まずいかもしれないな。

次、変なことをしたら、あの髪を引っ張ってやる……………！！

鬼道さんとお話しましょう (後書き)

今日の格言

「そりゃ、好きだからだろうな」

アメリカの死に損ない（笑）

全国大会も順調に勝ち進み、今日も練習練習。

そんな俺たちをじっと見ていた男がいた。

身なりから見ても、雷門のヤツではない。私服だ。

あんな顔は見たことないしなあ。

サッカーに興味深そうな顔で見ている限り、サッカーをしているヤツか。

何か、円堂をみているような……………？

そんなとき、ナイスタイミング（？）で半田がキックを失敗し、その男に飛んでいく。

さあ、どうする？

「……………つと！」

な、なに！？

いきなり来たボールを胸でトラップだと？

しかも、何だ、あの軽々とした身のこなしは？

「おーい！ そのお前ー！！」

ボールこつちに投げてくれー！！」

男は、円堂に微笑みかけたと思うと、俺たちの間をドリブルで駆け抜けていった。

しかも、すげードリブルがうまい。

みるみる抜かれ、あの鬼道をも抜かしてしまった。

すばやい！

「よーし！ こいー！」

円堂相手じゃ、止められないはずはない！！

男は、逆立ちをし、すさまじい回転で回り、ボールを巻き込む。
あんな早さでボールを蹴るなんて、すごい威力だぞ！！

「スピニングシュート！！！」

「ゴットハンド！！！」

円堂は、がちり止めて見せた。

(どうだ、俺の彼女はすごいだろう。)

「すつげえな！ お前のシュート！！」

ペナルティエリアからだったら、ゴールに入れられてたよ！！」

「俺も、久々にこんなキーパーと会ったよ！

なんだかわくわくしてきちゃった！！」

その後の自己紹介でわかったが、一之瀬というらしい。

アメリカから、わざわざ友人に会いに来て、そのついでで俺たちを見物していた。

一之瀬は、円堂の名前を聞いた後、全身を見るなりこっぴつた。

「円堂は、女の子なんだねえ！！ うんうん。かわいいよ！！」

とかいって、抱きつきやがった…………… (怒)

円堂は、俺は女じゃない！ と暴れたが、そこが問題じゃない！！
俺は、染岡と鬼道と協力し、この変態を引き離した。

しかし、こりていないのか、てへっ　といった顔だった。
無性に腹が立つな、こいつ……。

「俺は女じゃないぞ!!　ちゃんと男だ!!」

「いんや、俺はわかる。」

円堂から香るそのふんわりした匂い、体つき、顔、その他もろも、
ぶっ!!」

俺は、そいつの顔を、手加減なしでぶん殴ってやった。

一之瀬は、倒れて、なおニコニコしていた。

正直怖い……………。

「あれ、い、一之瀬君!？」

「やあ、秋。ただいま」

どうやら、マネージャーと土門がその友人らしい。

って、一之瀬復活はえええええ!!!!

さっき、横になっていたのに、けるつとして立って挨拶している。

一之瀬と土門と木野は、幼なじみらしい。

アメリカで一緒にサッカーをしていたが、一之瀬が事故にあった。
で、一之瀬は治ったので挨拶しに来た。

じゃあ、こいつは死に損ないかあ（笑）

「そうだ!　秋、円堂は女の子なのかい!？」

「え!　円堂君は……………」

「やっぱり女の子なんだね!!」

俺、本気で惚れちゃったみたいだよ（にっこり）

「ま、マジか、一之瀬……………!!」

「円堂！ 俺と会った記念に一緒に必殺技完成させようぜ！..」

「おー！ いいなあ！..」

くそ、円堂は鈍感だし.....。

「なあ、鬼道」

「一之瀬殺すか」

「だよな」

あとでぶっ潰してやる.....！！..

~~~~~

次の日までかかって、必殺技『トライペガサス』を完成させた。

その時、裏でやっとあの死に損ないが帰る、と囁いていたものの.....。

「やっぱり、君とサッカーしたいなあっておもって！..！」

飛行機の手ケットを破る。

ああ、むかつく。

また、ライバルが増えた。

「よろしくな！ 一之瀬！」

「よろしく！」

あとさ、円堂に彼氏っているの？」

「え、えつとお……………」

「いるんだね（にっこり）」

その作り笑いが、怖い……………。

アメリカの死に損ない（笑）（後書き）

今日の格言

「やっぱり女の子なんだね！」

俺、本気で惚れちゃったみたいだよ（にっこり）「

## 会議

あの死に損ない（笑）が入部してから数日。

彼氏ポジションの俺すら近づけない程に、一之瀬は円堂にべったりだった。

ホントは、殴りたい（ていうか殴った）のだが、

「一応、俺たちは大会出場者だ。

迂闊に手を出して、事件になってみる。

出場権を剥奪されるかもしれない」

と、鬼道にいわれ、手を出せない。

しかも、一之瀬はそれをわかっていて、うまく利用している。

一度、俺が一之瀬を裏へ呼んだとき、

「君たちは俺を殴れないはず何だけどなあ（にっこり）」

そういわれた。

どうやら、一之瀬というヤツは、鬼道と互角、いやそれ以上に狡猾らしい。

簡単にいうと「腹黒」といふべきだろう。

で、その腹黒を何とかしようと、円堂と一之瀬、一年生抜きの部屋で会議だ。

~~~~~

「……………では、あの死に損ないをどうしようか、話し合おうか」

風丸は、いつもこういうとき、仕切り役に回る。

今日もそうだった。

「有罪だ!!」

「あいつには、練習だ、とかいって俺のドラゴンクラッシュを、めいっばいぶつけてやる!!!!」

「ピンクハゲ!

だから、そうしたら大会に出られるかわかんねえだろ!!」

「なにげに変なあだ名を使うなっていつてんだろーが!!!!」

俺と染岡が至近距離まで顔を近づけ、にらみ合いをする。

すると、鬼道が呆れた様のため息をつく。

「円堂はあいつの本性に気づいてないからなあ……………」

「じゃあ、なにか手はないのか?」

「円堂に言ってるのは?」

「あの鈍感はずいぶんかと思っぞ」

「もっといい手はないのか」

「中途半端な回答しか出せないのか。」

お前どーせ、自分の文で書きなさいとか言うテスト問あったら、

中途半端で ばっかだろ」

「ひ、ひでえ!!!」

ちよつとは あるぞ! ほんのちよつとだけど!!!」

「それってフォロージャじゃないじゃん」

半田は、返り討ちに合い、騒ぎ始めた。

その後も、何度か意見は出たが、いいものはなかった。

「はあく、円堂の鈍感さは呆れちゃうねえ」

「マックスの意見には同感する。」

あいつは、もっと人の好意に気づくべきだな」

風丸が意味深な事を言う。

部室の窓からグラウンドを見る。

円堂と一之瀬は、一年を巻き込んだのシュート練だった。

……悔しいが、楽しそうだ。

「よし。俺が一日中円堂に付きつきりになるう」

俺は、自信を持って述べた。

しかし、全員が、変態だ、こいつ……、といった目をしていた。

「悪い訳ではないが、お前が付きつきりと言うと、どうもいやらしい……」

「なっ!!! 失礼な!!!」

俺は別に一日中とは言ってないぞ!」

「やっぱり家まで行くつもりだったのか!!!」

くっ！ 俺の計画があっさりばれてしまった。
鬼道が飛びかかって来て、お前に円堂はわたさん！！ と行って来た。

そして、俺も上等だ！ とまたもみあいになった。

「いたたたっ！！」

髪を引っ張るな！！

鬼道家特製のドレッドヘアーだぞ！！」

「しらんわ！！」

ただの髪じゃないか！！」

「お前だってチューリップみたいな頭しやがって！！」

「きっ、キサマアアア！！！！！！」

結局、一之瀬を倒す手段は見つからなかった。

よし、明日は円堂に付きつきりでいてやる！！

会議（後書き）

今日の格言

「ひ、ひでえ!!」

ちよっとは あるぞ! ほんのちよっただけど!...!」

じゃあ、付きっきりはどうだろう？

朝、円堂を待っていると、なななんと、一之瀬までひつついてきた。

「どっついうことなの……」

「あ、豪炎寺！」

一之瀬も一緒に行きたいって……！
いいだろ？」

ああ、そんな上目遣いをやめてくれ、断れないじゃないか……

でも、彼氏として、やっぱり別の男とはいってほしくない。
俺は円堂に言ってやった。

「ダメ」

円堂はほつぺたをぶつくり膨らませ「ケチ」と言った。
それに胸を打たれ、オツケーを出してしまう。
我ながら、こいつにはまだ弱い。

「ありがとう、豪炎寺」

そういったのは、円堂ではない。
一之瀬だった。

ああ、こいつ、すげえ。
殴りてえ……。

一之瀬は、円堂と腕を組んで、いちゃいちゃしながら歩いた。時折、俺の方を向いて、勝った、と言う表情を見せた。その表情が怖いのだ。

笑っているのだが、何かを企む様に、深い笑みを見せる。

俺は、ついにいらだって、円堂の腕を取って俺の方に引き寄せた。

「っ!!」

「こいつは俺の、よ、彼女だ!!」

「今、嫁って言おうとした？」

「だまれっ!!」

お前に円堂は

びしっ

円堂が、俺の頬を、叩いた。

「ご、豪炎寺の、ばかああああっ!!!!!!!!」

「え、円堂!!!!」

円堂は、俺が彼女宣言したのに怒ったのか、走って行ってしまった。

円堂があんな風に怒ったのは、初めてだった。

一之瀬は、俺に円堂を追いかけな、といった。

「お前……」

「円堂が君を見ていたのはわかった。

君のこと、じつとみてたからね」

「じゃあ、なんで」

「君がなかなか来てくれなかったから、俺と一緒にいるところを見せて、

ヤキモチをやかせたかったみたいだよ」

一之瀬、お前………

「すまん!!」

死に損ないとかいってすまんっ!!」

「え!

そんなこといってたの!!」

「じゃあ、俺はこれで!!」

俺は、彼氏失格だ……。

走っている間、俺は、円堂の事ばかり考えた。
あいつの笑顔を思い出すと、余計足が急いだ。

じゃあ、付きっきりはどっだろっ。(後書き)

今日の格言

「こいつは俺の、よ、彼女だ!!」

仲直り

円堂は、河原の坂に座って、川を眺めていた。時俺、石を投げたり、目をこすっていた。

俺に気づくと、一瞬はつとしたが、もとに戻っていた。俺は、円堂の隣に座る。

なんの反応もしなかった。

少し、寂しかった。

「ごめん」

「なんで、謝るんだよ」

「……俺、お前の気持ちにちゃんと気づいてなかった」
「……………」

「円堂に、もっと構ってやればよかった、なのに、」

「うるさい」

「え？」

「豪炎寺は俺のことホントに好きなのかよ!!」

俺が一之瀬としゃべってる時、何にも言ってくれなかったじゃないか!!

鬼道と一緒に時は、いつつ俺に構ってくれたのに……

俺、豪炎寺が、一之瀬といるとき『俺のものだ』って言うの待ってたんだぜ？

なのに、全然気づいてくれなくて……………つく、うう」

円堂、俺……………

俺は、円堂を抱き寄せてやった。

そして、耳元に囁いてやった。

「大丈夫。

俺はお前を愛してるぞ」

「豪炎寺い……………」

「円堂、いや。

守、好きだからな、お前の事」

「おっ、俺も修也の事、好きだっ!!」

「なっ!!!!」

こいつ、いつからこんなに積極的になりやがった!?

言われっぱなしはきついで、俺は、円堂を押し倒して、キスしてやった。

初めて、口にしてやった。

リップ音が立って、守は、真っ赤になった。

そして、恥ずかしそうに目を細めて、優しそうに笑うのだった。

「そっか、お前は女だったな……………」

「わ、わすれんなよ!!」

だから、俺にこんなに積極的なんだな。

次に、俺は円堂をまた抱きしめてやった。

幸せなひとときだった。

~~~~~

「え、なぜ二人そろって遅刻を？」

俺と円堂は、遅れて学校に入り、教室の前で立たされていた。円堂は、あれが終わっても顔が真っ赤なままだった。

「さ、」

「さ？」

「サッカーボールが川に落ちちゃって！！」

それで、二人で取りに行ったら服がびしょびしょで！！着替えてから来ましたっ！！」

円堂は真っ赤な顔を伏せて、先生に言った。

サッカーボールの話題が出せるのは、部長ならではだろう。先生は納得して、俺たちを戻してくれた。

俺は、円堂の後ろから囁いてやった。

「今度、また、かわいがってやるぞ」

『円堂が、豪炎寺と顔を真っ赤にして登校』

円堂女説に新たな説が刻まれた瞬間でもあった。

仲直り(後書き)

今日の格言

「おっ、俺も修也の事、好きだっ!!」



## 優勝

「ゴット ハンド……!!」

円堂は、本当に奇跡を見せてくれた。  
あの世宇子をうち破ってくれた。

お前がいなかったら、きっと俺はここにいないだろう。  
サッカーを愛していなかっただろう。

円堂、ありがとう。

誰もが、そう思っているに違いない。

~~~~~

「じゃ、優勝記念でー!!」

「~~~~キャンパイ!!!!!!」~~~~」

円堂がグラスを持ち上げると、部員の声が重なった。

俺たちは、優勝記念のお祝いパーティーをしていた。

パーティーといえど、部室でする小さなものだったが、練習ばかりのあの日々、そして、昨日の試合の疲れをとるのに十分なものだった。

学校に許可を取り、机をくっつけ、ごちそうを並べる。以外と、たくさんそろって、綺麗だった。

キュウリとトマト、レタスの盛りつけられた唐揚げ、エビフライ。人参とキュウリの色が綺麗なポテトサラダ。

ミートソーススパゲティ。

おにぎりは、様々な味がそろっている。

ジュースはなんと、ミキサーで絞ったらしく、天然のあじは格別。おまけに、ケーキまで。これも手作りだという。

壁山が、ものすごく喜んで「まるで三ツ星レストランス!!!」と言ったのを思い出した。

俺はてっきりマネージャーが作ったと思っていたが、

「豪炎寺君は誰が作ったと思う?」

と聞かれ、考えていると、予想も付かない答えが返ってきた。

「実は、円堂君が全部作ったの!!!」

「ぶっ!!!」

俺は、かんでいたおにぎりを驚いて飲み込んで、のどを詰まらせてしまった。

何とか飲み込んだが、円堂の手作り、と聞き、食べるのがもったいなくなってしまう。

こんなごちそう、あいつが作れるのか……………

円堂を見つめる。

普通に、鬼道をしゃべっていた。

こっそり聞いてみようか。

「おい、円堂」

「んー？ 何だ？」

いちいちかわいらしいやつめ。

「これ、お前が作ったのか？」

「あ、そうだけど」

本人が認めてしまった！！

勉強は出来ないが、料理、料理が出来る。

これは、もう……………

「円堂！ 俺の嫁にいい！！」

「はあああ?????」

鬼道、風丸、一之瀬がものすごい顔でこちらへ来る。

くっ！ 捕まってたまるか！！

俺は円堂の肩と腰に手を当てると、お姫様だっこの様な形で部屋のドアへ急ぐ。

「ぐぐぐぐぐーえんじっ！！！！」

「栗松！！ ドアを開ける！！」

「わわわかりました、でやんす！！」

俺はそのまま外に出て、しばし追いかけてっこをしていた。

奴らを撒いた後、円堂から、またバカつと言われた。

しかし、もう嫁スキルがあるとは思わなかった。

これで、新婚生活は大丈夫そうだ。

優勝（後書き）

守は料理得意だよん。

今日の格言

「円堂！ 俺の嫁にこい！..!」

初デートで邪魔者ってどうよ？

世宇子の試合から、一週間ほど休みが取れ、選手それぞれ疲れをとる、ということだった。

しかし、この休みを有効に使わずにはられない。

俺は、円堂の携帯に電話をかける。

積極的に行こうと思いついて、デートに誘おうと思ったのだ。

がちやつ

「はい、豪炎寺か？」

「おう、円堂、今日空いてるか？」

「あー悪い、今日用事が入ってる。

かあちゃんの手伝いでちよつと行かなきゃならないんだ」

「そうか……………、せつかくデートしようと思ったのにな……………」

「ま、マジか！ 豪炎寺！

なら、明日大丈夫だぞ！」

「ん、なら、明日でいいか」

よし、デートの約束成功。

今日出来ないのが惜しいが、お楽しみに取っておくとしてよう。

「じゃあ、待ち合わせするか？」

「いや、円堂の家に行くよ」

「おう！」

「じゃあ、どこに行くんだ？」

「少し遠くに行こう。」

「電車で、少し町中にも行こうか」
「いいなあ！」

「たくさんお店回ろうなっ！！」

円堂の弾んだ声が聞けて嬉しかった。
その後、適当に話して電話を切った。

ふふふ……明日が楽しみだ……。
さて、俺は何を着ていこう？

そういつて、俺は、普段あまり見ないタンスを覗いて、何時間も使うのだった……。

~~~~~

結局いい服が決まらなかったため、俺はいつものパーカーを着る事にした。

で、小さなポイントとして銀のイヤリング。  
我ながら、いい出来だ。

円堂はどんな服だろう。

………はっ！

あんな性格だから、きつとボーイッシュな服装かつ！？  
彼氏としては可愛らしい服が好みなのだが。

円堂に限って着るはずがないと思いつつ、ちょっと期待してる俺がいる。

服装の事を言っておけばよかった。

少し失敗だったようだ。

円堂の家のインターホンを鳴らす。

すると、どたどたとあわただしく、ヤツが出てきた。

さあ、どうなっている？

ドアが開けられる。

そこにいたのは……………

「よう、豪炎寺」

「おはよー、チューリップ」

「な！！！！ 鬼堂、一之瀬！？」

「何でお前らがいるんだって顔してるな」

「それはね、円堂の服を選ぶお手伝いしてたんだよ。

円堂って何でも似合っちゃうからびっくりしたよ」

「くっ、着替えで一緒にいただと！？」

「よからぬ事はしていない。

お前と一緒にしないでくれ」

やばい、円堂との初デートが何で邪魔者（二人も）に阻まれる…

…！

ていうかなんで知っているんだ？

！

円堂の事だ、どの服着ればいいかわからず、鬼道どれがいい、



とかいってたんだろう。

聞くのが悪いわけではないが、聞くなら半田みたいな中途半端なヤツにしる。

じゃなくて、マネージャーの発想はないのか？

「お前ら、もう帰れ！」

俺と田堂のデートのじゃ、」

「ごっ、豪炎寺っ！！！」

「え、田堂、だと……………」

そこにいた、俺の彼女は、とても可愛かった。

初デートで邪魔者ってどうよ？（後書き）

初デートって大切なのに、邪魔されちゃうかわいそうな豪さん。

今日の格言

「それはね、田堂の服を選ぶお手伝いをしてたんだよ。

田堂って何でも似合っちゃうからびっくりしたよ。」

## 豪炎寺×円堂＋一之瀬と鬼道

円堂は、珍しくスカートだった。

薄ピンクのタンクトップに上からデニム生地の手袖の上着を羽織り、

下はふんわりとしたフリルのスカート。

純白、といえば伝わるだろうが、円堂のスカートは真っ白だった。

少しおしゃれに、靴はヒールが付いた、茶色のサンダル。

そして、バンダナはつけておらず、代わりに、右側のところにオレンジの花の飾りがある。

バンダナなしの髪型は初めてだったが、とても似合って、いつもより幼く見えた。

まつげは、いつもより長く見える。

首には、銀のネックレスがしてある。

少し頬を染めた円堂を見ると、俺も、顔が熱くなった。

「これぞ、鬼道家の力。」

デート用の衣装を何百も取りそろえた甲斐があった」

「それで、センス抜群の俺が円堂のために選んだってわけさ（しゃきーん）」

まあ、最後は円堂が自分で決めただけ。

やっぱりセンスはよかったね」

なんだか、この衣装をこいつらが選んだと思うと無性に腹が立つてくる。

「豪炎寺、どうだ……………?」

「ああ、似合う。可愛いぞ」

「あ、ありがとう……………」

円堂はうつむいてぶつぶついつている。

可愛らしくてたまらん。

あの男と間違えてもいい円堂がこんなにイメチェンするからなあ……………。  
びっくりだぞ。

「円堂ー!!!」

似合うぞ！ かわいいかわいっ!!!」

「わ、い、一之瀬っ！ 抱きつくっなっつ」

鬼道もなんかやらしい目で見ている。

くっ、こいつらには速く退散して貰おう。

「おい、おまえらな」

「俺はかえらんぞ。」

彼女のために可愛い衣装を用意した恩人を簡単に追い返すとは、人間がなっつてないな、豪炎寺」

「お、お前……………!!!」

「円堂、鬼道家が車を用意している。

ここを曲がったらすぐにあるから、それに乗っていけ」

「わぁ!!!」

ありがとう鬼道!!!」

「よし、円堂、いっ、」

「さて、豪炎寺は電車で行け」

「いや、そりゃないだろ（泣）」

「冗談だ（ちっ）」

「くそ……………むかつく」

鬼道の言葉に甘えたとしたが……………。

これでは円堂を手もつなげないじゃないか。

なんで初デートなのにこんなにたくさんさんの奴らに邪魔されるんだ。

それほど、円堂が好きなのか？

「よし、隣町まで頼む」

「有人様、お降りになる場所はあそこでいいですか」

「かまわん」

車は静かなエンジン音を立て、進む。

さすが、金持ち、といっってはなんだが、車はすごい。

中は広いし、涼しいし、車の音はうるさくないし、何より、快適だ。

円堂は、珍しいのか、目をきらめかせて喜んでいる。

一之瀬は慣れているのか表情を変えない。

小さい頃にアメリカに住んでいるから、お金には困っていないの  
だろう。

「おい、鬼道、さっき運転手がいったあそこって、どこだ？」

「……………もうそろそろ付くぞ」

「……………」

俺たちは降りて、運転手に挨拶を済ませ、前の店を見る。

「……………」

「すっげえ！！！！」

来たかったんだ！　「ここ！！」

質の高い、スポーツ用品店だった。

豪炎寺×円堂＋一之瀬と鬼道（後書き）

鬼道さんは、円堂のためならお金も愛しくない。

今日の格言

「これぞ、鬼道家の力。

デート用の衣装を何百も取りそろえた甲斐があった」

「円堂が、グローブが古くなったと言っていたのを思い出してな。たぶん喜ぶだろうと思って来たんだが」

「すっげー!!」

来たかったんだ、ここ!!」

円堂はぴよんぴよんとはね回り、うれしさを体で表現していた。

「豪炎寺いこうぜ!!」

「わ、わかったからひっぱるな!!」

円堂は、思いっきり力を入れて俺の手を引く。

俺は、鬼道が選んだ店を喜んで回る、というのはなんだか嬉しくない。

実は、俺もここにくるつもりだったのだ。

しかし、鬼道に邪魔されてしまった。

「円堂、こっちにサッカーコーナーあるよ」

「あ、ホントだ。はやくー! 豪炎寺!」

一之瀬もなにげに絡んでくるし。

しかもその屈託のないさわやか加減がむかつく……。

円堂はどつやらいグローブを見つけたらしいが、考えこむよう  
にうつなる。



「どうしたんだ？」

「いや、ほしいんだけど……」

「1万か……高いな」

「俺、まだ4千しか持ってないから。」

困ったなあ………」

うーん、と考え込む円堂。

何とかしてやりたいが、俺は6千しか持ってない。

一緒に買えばいいが、一銭もなくなるのはきつい。

しかし、このままほったらかすのは気分が悪かった。

「じゃあ、今度またここに来よう。」

その時は、お金ちゃんと持ってきて、二人で5千つつ出すって言うのはどうだ？」

「え、いいの？」

豪炎寺、無理しなくても………」

「お前がほしいなら何とかするよ。」

半分ずつなら、問題ないだろ？」

「ありがとう！ また、一緒にこような……！」

円堂はにっこり笑って小指を出した。

俺は、最初、なんのことかわからなかったが、円堂が「約束！」と言ったので、

指切りげんまんとわかった。

「指切りげんまん」

「嘘付いたら針千本のます。指切った」

気持ち良さそうだが、俺は、歌っていて少し恥ずかしくなった。

指切りなんて、夕香とだいぶ前にしたときだけだ。  
なんだか、幼いころに戻ったみたいだ。  
小指が触れる。

それだけの事で、心臓の鼓動が速くなるのがわかる。  
円堂は、嬉しそうだった。

「あー、お腹すいたー!!」

「もうそろそろお昼か」

携帯の画面を見る。

もう1時になるころだった。  
確かにお腹がすいた。

「きどー!! うちのせー!!」

「お昼食べいこうぜー!!」

二人は、俺たちに構わなかったのが幸運だが、店内を見て回って  
いたらしい。

まあ、見ていて飽きなかった。

「マックいこーマック!!」

「一応デートだろ、ファーストフードは似合わないだろう」

「えーじゃあ、どこ行くんだ?」

俺たちは店をいったん出て、きよろきよろとあたりを見回す。  
そこに小さな喫茶店があった。  
スパゲティがウリの店らしい。  
コーヒーを飲んだのんびり、というのもいいかもしれない。

「あっここに喫茶店があるぞ」

「んー、じゃあ、あそこでいいかあ」  
「よし、行くか」

歩き出すと、鬼道と一之瀬が反対方向に歩き出した。

「あれ、二人とも？」

「もう帰る。」

「円堂、楽しかったぞ」

「じゃあね。」

「チューリップ君と幸せに（真顔）」

「おう、ありがとなー！」

大きく手を振ってお別れ。

内心、めっちゃくちやガッツポーズだった。

豪炎寺×円堂+一之瀬と鬼道 2 (後書き)

今日の格言

「指切りげんまん」

「嘘付いたら針千本のます。指切った」

ついにふたりつきり

邪魔者は消えた。

やっと二人だけになった。

俺たちは、テーブル席に座り、お互い向かい合う形になった。

「決まったか？」

「ええつとおゝ……」

ランチセットもつまそうだし、スパゲティも良さそう……。

カレーも好きだし……」

「悩みすぎだ」

ちなみに俺はカレーを選んだ。

何となく食べたくなったただけだな。

「よし！」

「ミートソーススパゲティにきめたっ！」

「じゃ、店員さんよぶぞ」

店員の女性の人は、てきぱきと用件を聞き、さっさと料理を運んできた。

飲み物は？ と聞かれ、俺はコーヒーを選んだ。

もちろんホット+ブラックで。

「豪炎寺、大人だなゝ」

「円堂、コーヒー飲めないのか？（か、可愛い……）」

「うん、苦いのがてゝ」。

じゃ、アイスココアください」

かしこまりました、と深々を礼をして厨房に戻る店員さん。

円堂はよほどスパゲティが好きなのか、ぱくぱくと平らげた。もっと落ち着いて食べてほしいものだ。

「うまいか？」

「うまい！ 俺、スパゲティ好きだからなあ」

にこつと笑う顔がまぶしい。

いつも学校でも思うのだが、円堂は本当においしそうに食べる。なんだか、幸せそうで、こっちも幸せになれる。

さっき、置いてくれたコーヒーで口直しする。

ずずず

うまい。

「う、うまいのか、ブラック……」

「？ 飲むか？」

「遠慮する……」

「ココアはどうだ？」

「おいしいぞ」

ずずず

豪炎寺は間接キスに成功！

「ココア甘いな」

「砂糖きいてるよな」

「たぶんお前の味だな」

「っ！！ お前っ！！」

顔を真っ赤にして怒る円堂、ああ、可愛いよ。  
喫茶店には、客は俺たち以外にいなかった。

ふと気づいた。

円堂の頬にミートソースが付いていることを。

これはチャンスと思った。

「円堂、ちょっとこい」

「え、なんだ？」

円堂は椅子を立って、俺の横に立つ。

俺は座ったまま、円堂の肩を持って顔を近づけて、  
頬のミートソースをぺろり、となめ取ってやった。  
柔らかい。

顔を真っ赤にした彼女は、可愛かった。

全く、スキだらけだな。

「っっっっ！！ もあゝっ、お前は……」

「ふっ、可愛いぞ、守」

その日のデートは、おそらく成功だったと思う。





ついにふたりっきり(後書き)

初デート話、書けた!!

今日の格言

「円堂、コーヒー飲めないのか?(か、可愛い……)(」

なにかが変わっていく

今日は久々に練習だったが、夕香の目が覚めたのだ。  
俺が、花瓶の花を入れ替えようと、後ろを向いた瞬間だった。

「……おにい、ちゃん………」

空耳かと思った。

でも、それは夢とも聞き間違いとも信じられず、振り向いた。

夕香は、真っ白なシーツの中で、黒い瞳をあげ、こちらを向いていた。

俺はそばに寄って、頭をなでた。

すると、何年前かのように、目を細めて、笑う。

それが、ひどく美しくて、愛おしくて。

円堂に早く会わせてやりたい。

お前のお姉ちゃんだぞって。

「夕香、お兄ちゃん、サッカーで、日本一になったよ………」

「うん、聞こえてたよ……………、全部、全部……………」

「夕香……………」

医者が、これは奇跡的だ、といった。  
奇跡が起きた。

それで、夕香が目を覚ましたなら、奇跡でも、何でも嬉しい。

本当によかった……………。

すると、すさまじ揺れが起こった。

地震とは少し違う、地球に何かがたたきつけられたような……………。

「！ 夕香！ 大丈夫か！」

「うん、大丈夫」

俺は、不安がどうしても拭えず、医者に夕香を頼んで、病室を出ていった。

病院の一階で、木野に会った。

何か、あったみたいで、息をもたすごく切らしている。

「木野？ 何が……………」

「か、傘見野、ちゅっ、中で、円堂く、たちが、うっ、宇宙人と、  
試合してる……………」

「傘見野中だな！ わかった！」

宇宙人、というのが気になったが、円堂たちが危機なのはわかった。

隣町だったから、走った方が早いだろう。

待ってる、円堂！！

~~~~~

宇宙人は、俺の実力を遙かに上回った。

俺のファイアトルネードは簡単に止められ、ほかの奴らも次々に倒れていった。

最後に見えたのは、宇宙人から、ボールを様々な箇所につつけられる円堂の姿。

痛いはず、苦しいはずなのに、何度も立ち上がって……

俺の意識は、そこで切れた

~~~~~

目が覚めた。  
気づいたら、自分の部屋だった。

「修也さん！！ 大丈夫ですか……？」

うちの家政婦のフクさんが、駆け寄ってくる。  
手には、包帯とガーゼと消毒液。  
傷の手当に来たみたいだ。

「大丈夫です。自分で出来ますよ」

「はい……………」

朝ご飯、持ってきます……………」

少し暗い顔だった。

俺はとりあえず、かすり傷の消毒をした。  
たくさんあって、ひどく痛んだ。

でも、円堂のなんども立ち上がる姿を思い出し、我慢できた。  
ひどい傷は、包帯を巻いて、テープで止める。  
おそらく大丈夫だろう。

フクさんの朝ご飯を食べ（品数が多かった。たぶん元気になって  
欲しかったんだろう）

俺は、円堂に電話をすることにした。

「……………」

「はい……………」

悲しそうな声。

あの円堂の笑顔は、どこに行ったのだろうか。

「豪炎寺だ。今どこだ？」

「んと、もうすぐ学校。」

部室が気になって……………」

「もうつぶされているだろう。無理に行かなくても……………」

「いいんだ」

それは、何かの決意に似た響きだった。

それは、田堂の強さを物語っていた。

それは、田堂の涙を物語っていた。

「俺も、今から学校に行くから」

「うん……………待ってるから」

電話が切れる。

俺は、痛む足を無視して、歩いた。

なにかが変わっていく(後書き)

今日の格言

「いいんだ」

## 不安の渦

部室は、見事にぼろぼろだった。

「円堂……………」

「っ、くそおっ……………」

俺は、円堂を抱きしめた。

それが合図のように、大量の涙が、あの綺麗な瞳からあふれ出した。

「俺、く、悔しかったのに…………、っ、なんにも、でっ、出来なくて

……………」

「お前は、十分がんばったよ。だから……………」

「でもでもおっ!！」

結局、お、俺、弱いからあ…………ぶ、っ、部室があ…………学校があ…………

…。

サッカーがあ……………」

なんにも言っつてやれなかった。

それが、すごく悔しかった。

ただ、今の弱い俺にしてやれることは。

抱きしめて、涙を隠してやることくらいだろう。

~~~~~


その後、ケガをしたサッカー部以外、全員が来て、響監督から話を聞いた。

俺たちは、あの宇宙人を倒すために、イナズマキヤラバンに乗り、日本全国を回って選手を集め、最強のチームになる事を……………。

それで、新しい監督が就任し、早速、俺たちは出て行くらしい。荷物をまとめるため、各自解散後、荷物を持って集合、となった。

俺は、夕香に会って思い、病院へ急いだ。

「夕香、お兄ちゃん、しばらくこれないから。

せっかく起きたのに、ごめんな」

「いいよ、なんだか知らないけど、がんばってね」

「ありがとう……………」

頭をなでる。

夕香は、本当に嬉しそうだった。

本当はいつまでも居たいが、無理そうだ。

病室を出ると、ゴーストをした、謎の男が俺を待っていたように立っていた。

「君が、豪炎寺修也君、だね」
「……………はい」

イヤな予感がして、夕香の部屋のドアを閉める。

「話がある」

「なんでしよう」

「……………」

「エイリア学園に、入学して貰いたい。

君の実力を見込んでお願いしている。どうだろう」

ふ、ふざけるな!!

なんなんだ、こいつら、俺が何で円堂たちの敵にならないといけないのだ？

「はいらないか？」

「当たり前だろう!!」

「そうしたら、妹さんがどうなるか、わかっているか」

「!!」

「夕香さんは、こちらで人質として預からせて貰う。

君が入学しないならそれでいいが、ジェミニストームとの試合で点を入れて見る。」

夕香さんにどうなるか……………」

「……………失礼します」

俺は、迷っていた。

イナズマキャラバンに乗って、宇宙人に勝ったら、夕香が何をされる？

この前起きたばかりの夕香に、何をするというんだ……………。

不安の渦（後書き）

今日の格言

「俺、く、悔しかったのに……、っ、なんにも、でっ、出来なくて
……………」

別れのキス

イナズマキャラバンは、総理が誘拐された奈良に止まり、搜索をしていた。

そこで、SPフィクサーズという、SPのサッカーチームと対戦した。

大人相手だったが、以外とこちらのチームも負けておらず、勝利した。

SPフィクサーズのキャプテン、塔子、というヤツが、イレブンに入る事になった。

「円堂！ よろしくな！」

「おう！ よろしく、塔子！」

腹は立ったが、一応女同士なので心配はしない。

(マネージャーは円堂に惚れている様子なので、心配はしている)

その後、またジェミニストームとの試合が、奈良テレビのグラウンドであった。

……俺は、シュートは結局打てなかった。

「ファイアトルネード!!」

ボールを蹴る瞬間、あいつらが見えた。

夕香さんにどうなるか……

その声を思い出すと、キックの力が弱まって、点が入らなくなる。
その日の試合も、勝てなかった。

~~~~~

「豪炎寺君には、チームをはずれて貰います」

瞳子監督が言った。

俺は賛成だった。

もう、シュートに迷いのあるフォワードはいらないだろう。

荷物をまとめて、俺はみんなからはずれてシカ公園の銅像の下で座っていた。

予想通り、すぐに円堂が来た。

「お前、ホントにチームから抜けるのかよ」

「ああ、今の雷門に俺はいらない」

「不調の時だつてあるさ！！」

今日は調子が悪かったただけだろ！！

それに……………」

円堂は、下を向いてぐつと唇を噛んでいる。

ああ、そういうことか。

「俺がチームを抜けても、お前の事はずっと好きだ」

「ご、豪炎寺……………」

泣きそうな顔をして、こちらを見る円堂。

やっぱり、可愛い。

こいつを手放したくない。

いつその事、ここで二人とも抜けてしまおうか？

「俺は……………キャプテン、だから」

「……………そうだったな」

円堂は、みんなの後ろで、ゴールを守って、勇気づける仕事があるんだった。

それが、円堂守だったな。

きつと、このまま居れば、俺は間違いなく円堂の足を引っ張る。

それはイヤだ。

俺は、もう行くことと思い、後ろを向いた。

円堂は、俺の腰に手を回して、後ろから抱きついた。

泣いている。

「絶対、戻ってきてよね……………」

「ああ、それまで、浮気するなよ」

「しない。」

約束するよ、俺は、修也だけが好きだから」

いつになく、積極的だ。

ますます手放したくなくなってきた。

俺は、円堂の手を離し、後ろを向いて、口にキスをしてやった。

お互い、悲しいのか、いい味はしない。

何度も何度も、角度を変えて、肩を持って、キスをする。

相手の存在を確かめるように、忘れられないように。

背中に手を回して、次は、舌を口に入れる程、激しく、強く。

俺の存在をこの口に植え付けてやるから。

だから、忘れないでくれ。

それを表現するなら、たぶん。

『涙のキス』

さあ、歩こう。

振り向いたら、ダメだ。

ゴメン、守。

必ず、帰ってくるから、待っていてくれ……………。





別れのキス（後書き）

今日の格言

「しない。」

約束するよ、俺は、修也だけが好きだから「

再会っていつかなんか違う

あの別れから、一月ほどだろうか。

沖繩に身を潜めていた俺に、かくまって貰っている土方から、よ  
い知らせが来た。

「雷門中が、炎のストライカーを捜しに来ている？」

「ああ、実際俺会ったぜ！」

キャプテンの円堂ってやつ、お前の言ったとおり、かわいかった  
な」

「だろ？」

俺の自慢の彼女だ」

土方は呆れた顔をしていたが、俺は誇らしい気持ちだった。

久しぶりだな、円堂。

早く会いたいな。

気持ちは高ぶるばかりで、サッカーボールをいじって遊んでいた。

~~~~~

沖縄のグラウンドで、イプシロン改とかいうのと、雷門の試合があった。

円堂は、まだゴールキーパーをしていて、それを見ると、愛おしさがかみ上げた。

と、同時にメンバーの変化に気づいた。

風丸と栗松、ピンクハゲがいない。

かわりに、荒々しい雰囲気のマフラー男と、

ギャルのフォワードと、

栗色の髪をした、初々しい男と、

ピンクの目立つ髪と黒肌の男が居た。

俺が居ない間にずいぶんかわつたらしい。

それを見れなかったのは、残念とも言える感情があった。

しばらくしてだった。

マフラーをした男が、何かの拍子に崩れ、ベンチへ戻った。

それを見て、俺の中で何か、はじけた気がした。

グラウンドに立ちたい

また、円堂とサッカーがしたい

あいつらと、ボールを蹴りたい

俺は、行くことにした。

あとは、土方が何とかしてくれるので、安心して任せられる。
控え室の通路を通って、グラウンドへ出る。

グラウンドの真ん中に立って、パーカーのフードを取る。

「待たせたな、円堂!!」

ぱあっと、目が見開かれる。

それを見るのが、楽しみでしようがなかった。

「豪炎寺い!!」

俺は、10番のユニフォームを着る。

これを着ると、気持ちが落ち着く。

やっぱり俺は、円堂の居る、雷門でなくてはサッカーを出来ない。
そう思った。

「爆熱ストーム!!!!」

俺の必殺技。

円堂たちにあえる日を心待ちにして、完成させた、新しい必殺技だ。

イプシロンにも、サッカーの楽しさが伝わったようだ。

俺たちは、勝てた。

~~~~~

「豪炎寺なんだよな!？」

「そうだ」

「おかえりっ!!!」

円堂は、みんなの前で俺に抱きついてきた。

でも、俺と絡んだとき、みんなの痛い視線は、全く変わってない

.....。

特に、あの栗色の髪の毛のやつが異常ににらんでくる。

目があう。

にっこりしている。

しかし、裏の感情が読めた。

『オマエ、トリアエズシネ』(にっこり)

とてつもない奴らが増えたらしい.....。

再会っていつかなんか違う(後書き)

再会ですの

今日の格言

「待たせたな、円堂!」

## 新メンバーとの交流

あの変なテレパシー（？）を送ったヤツは立向居と言っらしく、GKという。

俺のシュートを受けてみたかったらしく、ファイアトルネードをぶつけたら、倒れた。

一心心配して駆け寄ったら、なんだろう、少し違う。

「あなたが……円堂さんの………想い人、なんですね」

「は、はあ？」

「ゆるせない………俺が円堂さんを狙おうとしたら、あなたみたいな人がいるなんて。」

遠く離れていて、愛も何もあげられない人が愛されて、深く愛している俺が、円堂さんに愛されないなんて理不尽じゃないですか」

お前の考えの方が理不尽と思うがな。

「円堂さんは渡さない。」

円堂さんの心は、俺が奪って見せます。

俺が、あなたを、チューリップを壊して見せるっ!!」

「どういう意味なんだ」

「円堂さんを愛する気持ちは俺の方が強い!!」

「（ムカツ）俺の方が上だ!!」

「俺です!!」

「俺だ!!」

「だいたい、愛しているなら離れちゃいけないでしょう？」

もう姿を消した時点で豪炎寺さんは負けています」

「愛には距離も関係ない。

お前が思っている程、円堂は軽いヤツじゃない」

「円堂さんが軽いとは言つてません。

でも、あんまりじゃないですか。

好きな人がそばに居ないってとれだけつらいと思います？

……俺は、何が合つても円堂さんのそばを離れない。

だから。

円堂さんを俺にくださああああいいいい！！！！！！！！！！」

「断る！！！！」

この変態があああああ！！！！」

な、なに者なんだ、この円堂への愛があふれている異質な生き物は！

なんだか、円堂の周りって、変態が集まっているのか？

悩んでいると、ピンクの髪をした男が、握手を求めてきた。

「お前が豪炎寺だな！

俺は、綱海条介。よろしくな！」

「ああ、よろしく」

よかった。

こいつはまともなヤツらしい。

俺も、普通に手を握る。

………！！

いたたたっ！！

手が、手がいたいっ！！

こいつ、どんな握力してるんだ！？



「お前が円堂のなんだろうと、俺は円堂が好きだからな。いつか奪ってやるからな!!」  
よろしくっ!!!!」

そういつて、手を離して、嬉しそうに笑う。

歓迎の仕方が荒くないか？

ていうか、ライバルが増えすぎだろ……………。

離してくれたが、まだ手にびりびりとした痛みが残っている。  
悔しい。

取り合えず、メンツを把握して、円堂をどう守るか計画を立てないとな……………。



浜辺って一番ロマンチックと俺は思う

再会した夜、俺は円堂に呼び出されて、沖縄の浜辺を歩いている。

沖縄の海は綺麗だ。

宝石みたいにキラキラ輝いて、星が海に映って、暗い分もっと綺麗に見られる。

沖縄に身を潜めていた時、円堂に早く海を見せたいな、と土方に話していたっけ。

こうして二人で歩いて居られるのは、本当に嬉しい。

俺は、円堂を正面から抱きしめてやった。

真剣に、ぎゅっと力を入れると、円堂もそれに答えてくれる。

「……………ただいま、守」

「……………うん。おかえり、修也」

二人で、笑い合いながら、また抱きしめた。

海ってロマンチックだよなあ……………。

で、次の話題に移ろう。

その時、邪魔者が来たんだ。

「ま、守……………！！」

俺以外の男と何をやってるんだい！？」

そこに来たのは、赤い髪をした、肌の白い男だった。  
円堂の事を『まもる』を呼んでいる限り、男と思っているらしい。  
だが、俺以外の男、というのが気になる。

「あ、ヒロトじゃん」

「知り合いか？」

「うん。友達だよ」

「守、それが君のごう、なんとか君なのかい？」  
「豪炎寺だ。」

ちなみに、円堂の彼氏だ」

「そんな……………本当にいたのか？」

「だから、ずーっと言ったじゃないか？」

俺は好きな人がいるから、ヒロトとは付き合えないよって！」

ま、まさか……………

ホモ、なのか、こいつは……………。

ま、円堂自身、自分が女とわかっているから、そついつのは問題  
ないのだが、

このヒロトという男は、円堂の事を、「男として」「(二)重要」  
好きなのが気に入くない……………。

ヒロトは、悔しそうに後ろへ後ずさって、膝を地面についでがっ  
くりとうなだれる。

正直、やった、と思っていた黒い自分が居た。

「俺はあきらめないよ……………」

「？」

「守まもる！……………」

「な、貴様つつつつつ……………」

なんと、怒ったヒロトが円堂につかみかかって押し倒している。  
俺は、ヒロトがつかみかかった瞬間、腹を強く殴られ、倒れて身動きが取れなかった。

あいつは、円堂のジャージのファスナーを下げ、円堂によからぬ事をするつもりなのは、

わかった。

くっ、体が動かない……。

「やつ、ひ、ヒロ、」

「ま、守まもりに好きな人なんて許せない……、俺が俺が、ぶっ!!」

その時。

ヒロトの顔に、サッカーボールが当たり、勢いで海に落ちてしまった。

腹の痛みを忘れ、急いで駆け寄ると、円堂は、晒がいくらか巻き取られていた。

円堂は泣いて、俺の胸に泣きついた。

俺は、ジャージの砂をはらって、円堂の肩にかけた。

………あの変態やろうがああ!!……!!

「お前、俺の彼女にこんな事をして、許されると思っているのか…

………?」

「か、彼女、だって?」

「! まずい!」

「どうも体つきがイヤらしいと思っていたら………」

「お前、そんなところ見てたのか(見下した視線で)」

「くっ、今日はもう帰るけど、また来るよ。」

またね。おやすみ！！ 守まもる！！」

そういつて、消えてしまった。

円堂の方を振り返ると、鬼道が円堂に寄り添っていた。さっきのボールは鬼道だったのか。

「円堂、どっか触られたか？」

「む、胸が……………ぐすっ」

「大丈夫か？」

ていうか、普通にそこに居るな、鬼道」

「俺も心配で来たんだが、まさかあんな事が起こるなど……………」

円堂には、今度鬼道家からボディーガードを持ってこよう」

「そ、そんな事しなくていいよお……………」

ありがとう、っ、ありがとう……………」

とりあえず、円堂が無事で何よりだった。

俺は、ライバルが増えたことに、頭を悩ませた。

浜辺って一番ロマンチックと俺は思う(後書き)

ヒロトはとりあえず変な方向に持っていくキャラです。

今日の格言

「ま、守まもり……………!!」

俺以外の男と何をやってるんだい!？」

## まさかのピキニ

次の日、円堂は普通通りに戻っていた。

休んでもいい、と言ったのだが、大丈夫と笑って見せた。

普通の女子ならトラウマ物だろう、と思ったが、今の円堂はそんな余裕はないらしい。

今日は、綱海とサーフィンの特訓らしい。

そこで、一つの結論に着いた。

サーフィン 海でする 着替える

円堂の水着

が見られる!!!

……………これはサッカーの特訓の場合じゃない。

俺は、一足先に着替えて、円堂を待っていることにした。

~~~~~


綱海が持っていた水着は、オレンジでひまわりの柄のビキニだった。

見た瞬間、俺は綱海とがちり手を握った。

「綱海、お前、イイ趣味をしているな」

「だろ？」

「円堂、これを着ろ！！」

「……………ご、豪炎寺が言うなら……………」

これってデレなのか？と疑問に思いつつ、更衣室を出ていく。

数分待つと、顔を赤らめた円堂が出てきた。

似合っている。

オレンジがよく似合っている。

バンドナをはずして、幼い印象が与えられる。

しかも、意外に巨乳だと……………？

体のラインがくつきりして、女性らしく、通る人がイヤらしい視線を向ける。

それに反応して、立向居が視線を向けた人を睨み返していた。

パシヤッ キラリーン

一之瀬が写メりやがった(怒)

「うん！！」

可愛い円堂がこれでいつでもみれるや！！

ま、いっぱい入ってるんだけど、これは最高傑作だよ！！」

「ちょっと待て、いっぱいとはどういう意味だ」

「あ、こういう意味さあ」

一之瀬は、ピクチャーを開いて、写真を見せた。
円堂の写真ばかりだった。

「この死に損ないがああああ……！！！！！！！！！！」
「ははははっ」

俺は一之瀬を追いかけて回した。

「円堂、よく似合ってるぞ」
「き、きど………」
「キャプテン最高だよ……！！」
「円堂さん……！！ 俺のよ、ぶ……」
「よっしや、円堂……！！」
「サーフィンいこうぜ……！！」
「あ、ああ…… 行るか……！！」

円堂は、気持ちよさそうにサーフィンを楽しんでいた。
吹雪も写メろうとして、携帯を奪ってやると、どこから取ったかわからないような、

アングルの写真があった（どんな写真かは、恐ろしくて言えない）
立向居なんかすごい。

同じ寝顔の写真が、30枚近くあった。

しかも、サーフィンの様子をムービーで取っているし、携帯を没収すると、

ボイスレコーダーのようなもので、円堂の声を録音していた。

「立向居……！！」

そういつ、ノイズ混じりの録音。

俺は、むかついで削除してやるつとしたら、立向居がナイフを持
つていて、

さすがにやばかった。

恐ろしすぎる……………！

その後、その海では、幻の美少女が居る、と噂が立っていたら
しい。

まさかのピキニ(後書き)

今日の格言

「綱海、お前、イイ趣味をしているな」

雷門へ帰ろう

俺が雷門に復帰してから数日後。

東京へ帰り、チーム強化の特訓をするらしい。

イナズマキャラバンに乗った俺たちは、母校の懐かしみや、憧れを語っていた。

一つ問題がある。

円堂の隣に、あの立向居が居るのだ。

「おい、そこは俺に譲るべきじゃないのか」

「いやあ、同じGKとして話しているだけですよ。」

それに、ここを譲るつもりはさらさらありませんし（にやり）「

くっ、むかつく。

俺はとりあえず、吹雪の隣に座る事にした。

吹雪は、円堂に聞いたが多重人格らしく、今の吹雪はディフェンス。

もう1人の吹雪はフォワードらしい。

それで、ジエネシスと戦ったときは、バランスが悪くなり、シュートをもろに受け、

イプシロン戦でも、戦闘不能となったようだ。

見た感じ、弱そうな顔をしている。

吹雪とは、一回も話す事はなかった。

ああ、円堂と喋りたい……。

~~~~~

雷門中はもう少しで完璧に治るようで、安心した。  
で、早速特訓開始らしい。

円堂は、監督と鬼道の考えでDFリ×ロとなった。  
おかげで近くで円堂の顔が見える。

立向居は、キーパー技の特訓らしく、円堂と鬼道とで話し込んでいた。

おもしろそうなので、俺も顔を出してみる。

「何をやるんだ？」

「あ、豪炎寺。立向居に、この技をして欲しいって思ってた」

「これは……………（読めん）」

「ムゲン・ザ・ハンド、っていうやつなんだ。極意を読むと、

『したたたたん どばばばーん』って言うんだけど」

「え、円堂さん、言い方すごいかわい、」

「「黙れ」」

「（ちっ）ともかく、『したたたたん どばばばーん』って練習するんですね！

わかりました！ 俺、がんばります！-！」

「その意気だ！ 立向居！」

「はい！-！-」

気を抜いたらすぐ訳の分からない事を言い出すやつめ……………。  
(まあ、たしかに言い方は可愛かったけどな)

円堂は、さつきからそれを何度も呟いている。  
後輩の特訓がうまくいくか心配なのだろう。

心配そうにつつむく円堂の頭を、ぼんぼんと叩いた。

円堂は、顔を上げて、いつものようににっこり笑うのだった。  
この笑顔が見られて幸せだなあ……………。

円堂の新必殺技は、ヘディング技らしい。

なんか。沖縄の時、ボールが頭に当たったとき、正義の鉄拳が頭から出たのだと。

「よし、円堂。タイヤをもってこい」

「へ？」

「いいからもってこい」

鬼道の提案した練習方とは、手を使わないよう、タイヤを体にか  
け、

頭に意識を集中させる練習だった。

なるほど、キーパーに慣れて手が出るあいつも、これで大丈夫だ  
な。

「ふうむ、これはこれでいけるんじゃないか？」

「鬼道、お前、そういう趣味が合ったのか…………… (軽蔑の目)」

「なっ！！ ち、違うぞ！！」

とりあえず、円堂の新しいリベロ技が出来るよう、  
俺は円堂目がけて、シュートを打ち込むのだった。





雷門へ帰ろう(後書き)

今日の格言

「(ちっ)ともかく、『したたたーん どばばばーん』って練習するんですね!

わかりました! 俺、がんばります!」

## お泊まりとか俺が許さない

夕日が濃さを増してきた頃、少し問題が出てきた。

東京以外でスカウトしたキャラバンメンバーの寝床だった。

雷門中の人は、近くに家があるため、帰宅できるが、

それ以外の人だけキャラバンで寝るなど、少し扱いが酷いのでは、ということだ。

「じゃあ、俺のウチにこいよ!!!」

そうきいて、嬉しそうに顔を輝かせるキャラバンメンバー。

……………つて、ちょっと待て。

「円堂、俺が許さん。」

俺以外の男を家に泊めるとは、何が起こるかわからんからな」

「し、失礼じゃないですか!!!（ハアハア、円堂さんちに泊まれる

……………）」

「下心が丸見えだ、立向居」

「大丈夫だつて〜。」

それなら、豪炎寺も一緒に泊まるか?」

「……………いいだろう」

「ちっ」

「あー、キャプテンといいこと出来るかと思っただのにー」

「心の小せえ男だぜ、まったく」

言ってる言ってる。

と、言うわけで、円堂の家には  
俺、塔子、リカ、吹雪、立向居、綱海が泊まる事になった。

~~~~~

「「「「「おじゃましますー!!」「「「「「

「あら、いらっしやい」

「ま、守さんのお、お母様ですねー!!」

「守さんは、俺が大事に、」

「立向居よ。」

いくら海に比べてちっぽけだって、許せない事はあるぜ」

「す、すいませえええん……………」

「守の母ちゃんかい？」

「優しそーな顔してんなあ。おおきに。ウチ、リカっていいますね

ん!

「お世話になりますわー!」

「あたしは塔子です。」

「守には、すっごくお世話になりました!

「なにか、お手伝いしましょうか?」

「あら、いいわよ。」

「さあ、守! 料理を振る舞いなさい!!」

「わかったよ、かあちゃん……………」

円堂は、台所の奥へ消えていった。

「豪炎寺君。守まもりの事、お願いね」
「はい、任せてください」

円堂のお母さんとは、ちゃんと関係も話してある。こつして話すのも久しぶりで、新鮮な感じがする。

しかし、円堂の手料理がまた食べられるとは。ゼウスのパーティー以来だな。ホントにおいしかったなあ……………。

「守の手料理って、うまいのか、豪炎寺？」

「ああ、最高だ」

「男勝りで女子スキルがあるとなるとなあ……………モテるのもむりないわなあ。」

でも、守には豪炎寺が適役とウチは思っわ」

「そ、そんなことないだろー!？」

塔子とりかは、円堂が女と言うことを知っているためか下の名前
で呼んでいる。

それは別にイヤではなかった。

むしろ、円堂に、安心して悩みを話せるような人が出来たことは、いいことと思う。

イヤではないのだが、塔子は円堂に特別な想いを抱いているよう
だった。

なんか、歯がゆい……………。

「キャプテンの手料理食べたら、多重人格治るかなあ……………」

「そう言ってる時点でお前、絶対治ってるだろ」

「円堂さんの手作り……………」

俺、残さず食べます!! 鍋をなめてでも!!」

「気持ち悪いからやめてくれ、立向居」

「なにつくるんだろーな」。

俺と結婚したら、沖縄料理一緒に作りてーなあ……、『さーたーあんだぎー』とか」

「いきなり結婚の話に持ち込むな」

とりあえず、一人一人の話につっこんだところで、円堂が大きなグラタン皿を持ってきた。

チーズのいい香りがする。

皿のなかは、ほんのり黄色のチーズが溶けて、いい焦げ目がついている。

見る限り、エビ、タマネギ、人参、ジャガイモ、スパゲティが下に敷かれている。

ホワイトソースは、ダマはなく、すごく綺麗だ。

その後、次々と運んで来る。

洋食と和食、どちらも対応出来るよう、肉じゃがも持ってきて、焼きたてのパンと、炊き込みご飯を持ってきた。

で、サラダは、シーフードサラダだ。

芸も細かい。

肉じゃがの人参は花の形だし、パンはサッカーボールのパンだ。

「すげえ……………円堂って、ホントに料理うまいんだな」

「円堂さん最高です!!」

「これは嫁にしたいです!!」

「キャプテンの愛情たっぷりの手料理だねえ」

「守って女の子らしいところあるんだな(どきん)」

「ギャップに惚れるヤツは多いっちゅーからなあ」

全員が、感心していると円堂が皿とジューズを持ってきてくれた。ほんのりピンクのエプロンが似合う。

俺は、皿を運ぶのを手伝った。

「ありがと、豪炎寺」

「まあ、これくらい当然だ」

「あ、あたしもなんか手伝うよ!!」

「じゃ、箸を取ってきてくれるか？」

「むこうのテーブルに置いてるから」

「わかった!!」

いつのまにか、ここは高級料理店の一角のようになっていた。俺たちは、円堂に感謝して、いただきます、と大声で言った。

「円堂、あーん」

「自分のご飯なんてしてもらっても意味ない……………」

「俺がするから意味があるんだ」

「ご、豪炎寺……………」

「ええええええええええんどー……さんがああああ!!……………」

「豪炎寺い、見せつけてくれるじゃん？」

「ふっ、俺たちはこういう関係だからな」

「守! あたしもあーん、していい!？」

「ええええっ!!」

いろいろ合ったが、まあ、楽しかったと思う。

お泊まりとか俺が許さない(後書き)

今日の格言

「キャプテンの手料理食べたら、多重人格治るかなあ……………」

さあ、クライマックスに走ろうか

あれから何日も練習を重ね、円堂はついに技『メガトンヘッド』と完成させた。

立向居はもう少しらしいが、まだ完璧とは言い難い。しかし、個人の實力は数段にアップしている。これなら、遅れは取らないだろう。

そんなときだった。

瞳子監督の事実。

「私は、ヒロト、ジエネシスのキャプテンの姉なの」

みんなの驚愕した顔は、俺の目に焼き付いている。

たぶん、俺も同じような顔だったと思うんだが。

でも、それは今までの信頼を裏切ったように、俺たちの心に深く斬りつけられた。

「次の日、富士山にあるというエイリア学園の基地に行くわ。

行きたい人だけ、明日の朝、ここに来なさい」

そういつて、監督どこかへ行ってしまった。

その後は、悲しいように、みんな、ちりぢりに散ってしまった。俺と円堂と鬼道だけが、残った。

「監督のこと、信じられるか？」

「俺は、瞳子監督は、いつもチームを思って指揮してたから……」

…

「今更疑いたくもないし、いくしかないだろう」

「その通りだな、他の奴らが来てくれればいいのだが」

「みんな、あんな暗い顔して……」

「大丈夫だ。みんな来るさ」

「もし来なくても、俺たちだけでも行こう」

「うん、うん………」

円堂には、疲れをとるよう、早く帰れと帰らせた。

俺は、鬼道と何となく歩いていて。

「お前、俺が居ない間、円堂に何かしたか」

「した」

「なにを？」

「告白したら、豪炎寺が好きって言われた」

「ふん、やっぱり俺のことは忘れてなかったか」

「いろいろ、悔しかったぞ」

「鬼道つて意外と子供っぽいんだな」

「黙れ」

適当にだらだら喋って、別れた。

聞いたとき、黒い感情がせりあがってくると同時に、嬉しさがこみあげた。

円堂は、自分の事を忘れてくれて居なかった。

心のどこかで不安は合った。

自分が離れていると、円堂が鬼道のもとへ行ってしまうのではないかと。

怖かった。

あの笑顔がこの手の中で消えてしまふのが怖かった。

でもそれは大丈夫だった。

消えたりしなかった。

むしろ、それは強くなってるよう。

「守……………、もうすぐで、すべてが終わるな」

そうしたら、また、デートにでも、どこにでも行こう。

自由に、二人で歩こう。

また、喫茶店でご飯でも食べて、町を歩いて、遊園地なんかもい
いな。

この戦いが終わったら、普通に帰れるだろうな。

~~~~~

次の日、全員集まり、ザ・ジェネシスの対戦は、全員で出来た。

始めの方は翻弄されていたが、吹雪も感覚を取り戻し、『ウルフ  
レジェンド』を完成。

ムゲン・ザ・ハンドもどんどんパワーアップして、点も取るこ  
が出来た。

ジ・アース。

あれは、俺たちの最高の技だったろう。

エイリア学園は崩壊した、俺たちは、本当に終わった。

そこで、終わったはずだったんだ。

さあ、クライマックスに走ろうか（後書き）

今日の格言

「守……………、もうすぐで、すべてが終わるな」

闇

雷門中に帰って来た俺たちを待って居たのは。

「久しぶりだな、円堂」

風丸たちだった。

染岡や半田、マックスと知り合いの顔ぶれがいる。

少し様子がおかしい。

なにかに、取り憑かれているような……………。

円堂は、真っ先に風丸に駆け寄った。

「お前、なんでこんなところに……………っ!!」

風丸は、円堂を抱き寄せて、力いっぱい抱きしめていた。

すると、人形を投げ捨てるように、荒々しく突き飛ばした。

俺は、円堂を抱き留めた。

風丸は、怒り狂ったように、俺を見ていた。

もう、その目には、怒りしかなかった。

「円堂は強い、俺は弱い。

だから、エイリア石に頼ったんだ」

そう言うと、風丸たちは、ネックレスのような物を取り出す。

紫に輝く、エイリア石。

その怪しい光が、暗いグラウンドを、不気味に照らす。

それを直すと、風丸は円堂に言った。

「円堂、サッカーやるうぜ」

「っ、風丸……………!!」

~~~~~

あいつら、ダークエンペラーズは、強かった。

俺たちよりも、遙かに実力は上で、チームメンバーはことごとく倒れる。

風丸が俺を横切ったとき、言った。

「このまま、お前が負ければ、円堂を闇に染める」

俺は、力の限り走って、カットを試みる。
が、速かった。

追いつけない。

その時、円堂がゴールキーパーに戻った。
あの大介さんの形見のグローブをはめて、いつものように構える。

俺たちは立てなかった。
円堂を見ているしかなかった。

「ゴットハンド……！」

円堂は、ゴットハンドしか、しなかった。

おそらく、あいつらに一番なじみのある技で、語りかけようとしたのだろう。

それは、利いているようだ。

風丸が、息を切らしている。

「くっ、ダーク・フェニックス……！」

これはまずい！

その時だった。

「ゴットハンド……！」

ゴットハンドが、虹色に輝いて、止めて見せたのだ。
あの手で、がっちりと。

「思いだせえええ……！」

円堂の声が聞こえる。

あいつらに語りかける声が。

エイリア石が、音を立てて壊れていった。

円堂の思いが、通じたのだ。

やっぱり、あいつはすごい。

円堂は倒れた。

みんな、駆け寄っていった。

~~~~~

ダークエンペラーズのやつらはもつすっかり目を覚まして、円堂に謝罪している。

あいつは、笑って、受け入れて、サッカーやろっぜ、と言って。

円堂はすごいと思う。

宇宙一のサッカーバカって、よく似合ってると思う。

それで。

あいつの彼氏である俺は、すごく幸せと思う。

「みんな！ サッカーやろっぜー！！！」

「「「「「「「「「「「「おおっ！！！！！！！！」」」」」

闇（後書き）

今日の格言

「みんな！ サッカーやろつぜー！…！」

## 最終回 君と一緒によかった

「いい加減、立向居も吹雪も綱海も帰ってくれ」

「キャプテンを白恋中に連れて帰るまでだめ」

「円堂さんと実らないと……………ブツブツ」

「そんなの、海に比べたらちっぽけじゃねえか!」

「早く帰ってくれ」

もうエイリア学園との戦いは終わったというのに、あの3人は一向に帰ろうとはしなかった。

それは、俺としても不愉快で、そのキャプテンに、風丸や鬼道と協力して

連絡を取ったのだが、キャプテンが来ても、帰らなかった。

で、円堂に「サッカーやろうぜ」といわれ、被害者は増える。

困ったやつらだ。

~~~~~

せっかく日常が帰って来たので、円堂と話したいと思い、鉄塔広

場へ来て貰った。

少し早めに着いて、待ちきれず、ベンチの前を言ったり来たりする。

そして夕日と景色を見る。

綺麗だ。

オレンジと黄色と赤が入り交じって、最高だ。
いいデートスポットだと思った。

「わりーわりー!!」

待たせたなー!!」

「まったく、お前はいつつも遅い」

「ゴメン！ 許してくれよ、なっ?」

くっ、そう頼まれると弱い。

とりあえず、ベンチに座る。

で、円堂の手の上に、俺の手を重ね、指を一本ずつ絡める。

顔が真っ赤になっていた。

「か、可愛い……………」

「う、うるせー!!」

「いや、ホントに可愛かったぞ、守。

もっとこっちに来い」

「む、ううう……………」

守の肩を持って、自分の方へ抱き寄せる。
柔らかい。

これでサッカーしてるなんて、全く思えない。

「ありがとうな。修也」

「? どうしたんだ」

「俺、修也が居なかったら、ここまで来てなかったと思うんだ。

あの時の、出会いが、俺たちをここまでつれてきてくれた。

お前のおかげだよ」

「俺も、守のおかげでサッカーをすることが出来た。

サッカーを手放さずに済んだ。

大切なものも、見つけられたし、な」

唇に軽くキスをする。

すごく、少しだが、気持ちよかった。

円堂は、恥ずかしがらず、もっと欲しい、とねだった。

何度も、何度も、それを繰り返した。

する内に、ディープな物へと変わったが、守は、それを受け入れてくれた。

幸せだ。

彼女を手に入れることが出来て、幸せだ。

こんなにいい女は、この世界中探しても、きっといない。

俺は、守に巡り会えて、本当に幸せだ。

いや、もうこの出会いは、言葉で表現出来るほど、簡単じゃない。

この先もずっと、一緒に居られるだろうか。

いや、いる。

何があっても、離れない。

俺が、そばに居るから。

「守……………」

「修也……………」

体が重なり

相手の鼓動が聞こえる

貴方の中にはどんな物がねむっているのだろう

たとえどんな醜いものがあったとしても

すべて受け入れる覚悟はあります

だってそれほどまでに

私は貴方が

「「大好き」」

最終回 君と一緒によかった（後書き）

最高傑作の格言

田堂「しない。

約束するよ、俺は、修也だけが好きだから」

豪炎寺編を描かせていただいて

まず、豪炎寺編を書くにあたり、某二次小説サイト様、ウィキペディア様、ゲーム「イナズマイレブン2 ファイア」、友人のお言葉、感想、そして、アクセス数などが、私をここまで書かせてくれました。感謝いたします。

興味本位で書いたのですが、とても楽しく、たくさんの人に見てもらえたので、大変嬉しいです。

豪炎寺編についてですが、テーマは「見えないけど強い絆」です。あの二人には、誰にも邪魔出来ないような、邪魔されても簡単には壊れないような、強いものがあると思っています。その絆を表現しようと、私は「愛」を使ってしてみたのですが、うまく表現できませんでした。悲しいです。

二人とも、すごく仲がいいですよ。羨ましく、こっちも幸せになれるような、そんな不思議な気持ちになれます。もし、二人がいつまでたっても、きつと今の関係は全く変わらないのでしょうか。大人の二人なんて、想像しただけでも、楽しくなりません？

豪炎寺は、円堂を信じ、逆に、円堂も豪炎寺を信じている。依存などとは違う、お互い、任せあって何でも出来てしまうような。普通とは違うとはいえばおかしいですが、普通の友情とはひと味違うのでしょうか。たぶん、サッカーを愛する気持ちが本当に通じ合っていて、似ているからこそ通じ合えたところがあると思います。そういう関係は、羨ましい限りです。

彼らの恋をまだまだ応援してください。

読者様、ここまでお読み頂、ありがとうございます。浅はかな文でしたが、少しでも楽しんでいただければうれしいです。これで豪炎寺編は終了いたします。来月から、鬼道編を連載しようと思えます。リクエスト、批判、感想等ございましたら、どうぞ、待ってま

ありがとうございます。

作

チャッピ

豪炎寺編を描かせていただいて（後書き）

豪炎寺編テーマソングとして

「25コ目の染色体」RADWIMPS
をあげさせていただきます。

聞いてみてください。

残った感情

画面の中から聞こえるその声を、もう何度繰り返しただろう。

「……まだ、終わってねーぞ……」

ノイズ混じりのその声が、俺の心に深く切り込む。
胸に無理矢理入ってきて、俺の心を蝕んでいく。

「うおおおおおっつっつ！！！！！！！！！！」

「ゴット・ハンド！！」

唇を噛む。

ここで、あいつ、円堂というらしいが、ボールを止められて居なければ、

今日を、普通に終えていただろう。

「俺は何故こんな事をして居るんだろうな……………」

軽く、自分をあざ笑う。

あの、今日の試合が終わった後、帝国の撮影者に頼んで、ビデオを貰った。

ただ、あのシーンが見たかった。

一度だけ見るつもりが、何度も何度も繰り返し、時計の短い針は、1を指している。

馬鹿馬鹿しい。

弱小チームに情けをかけてしまったことが、悔やまれる。

そのシーンを何度も何度も見て、胸に焼き付けられた。

俺は、円堂のあの顔が忘れられなかった。

「あきらめない、と立ち上がった、強い顔。

シュートを止めて見せた、と誇らしげな顔。

豪炎寺にボールを回したときの、喜びの感情をあふれさせた顔。

こんなに人間を意識したのは、久しぶりだった。

「なんなんだろうな、一体……………」

なんだか、胸の奥に、何かの残りカスのような物が溜まっていた。

ぎゅっと、胸のあたりを掴む。

それでも、解消はされない。

俺は、選手ファイルを見ることにした。

選手ファイルは、東京の中学サッカー部の選手のファイルで、全員分ある。

県外では、有名なサッカー部や、大会、準優勝チームなどの記録もある。

主に、身体能力や、ポジション、プレイの仕方など、結構役に立つ情報ばかりだ。

試合前は、帝国のサッカー部は読み込んでおくのだが、雷門との試合は、勝つ事を信じ切っていたため、全く見なかった。

学校の五十音で探す。

ら、ら、ら、ら………あつた。

雷門中、あいつはキャプテンだったな。

こうかかれていた。

『稲妻町 市立雷門中学校サッカー部

G K キャプテン 性別 2年 氏名 円堂えんどう まもる 守

概要

幾度か引つ越しを繰り返し、雷門中に入学。

円堂守は、過去のフットボールフロンティア優勝校の監督、円堂大介の孫と思われるため、

現在、実力は上がらないものの、のちのち上がってくる可能性が大。

要注意人物であるが、雷門中は、サッカー部自体は部員が足りていないため、

恐らく、注意の心配は無用。

身体能力

新体力テストでは、すべてAという結果である。

体育授業では、1ヶ月に一度は休むと聞く。
水泳授業の記録が全くないのが問題である。

備考

雷門中学生徒間で、女子の可能性が浮上。

引き続き、捜査は行われているものの、証拠はなしだが、

「円堂守」という姪で生まれた男子が発見されないので事実。
入学手続きを何度もやり直している事も発覚。
謎の多い人物である。』

???

円堂が、女？

「あり得ない」

俺の言葉に、なぜか疑問を感じてしまった。

残った感情（後書き）

鬼道編開始です!!

今日の格言

「なんなんだろうな、一体………」

円堂との接触

選手ファイルを見て、考えたあの夜から、円堂が頭から離れることはなかった。

ゴット・ハンドというキーパー技は初めてみた。

(実際、源田はあんな技を知らない)

あれを残しておくのはまずいのではないかと俺は思っていた。帝国のシュートを、あんな名の上がないサッカー部が使えるとは思えない。

考えられることは一つ。

円堂守は、俺たちの知らない未知の力を持っている。

それは恐らく、これから出てくるものと思われる。

帝国が練習試合を申し込まず、あのまま、部員の足りないサッカー部として居れば、

このような事は起きなかったかもしれない。

それに、推測だが、豪炎寺がサッカー部に加勢したということは、のちのち、雷門サッカー部に入部する。

ゴット・ハンドとファイアトルネード。

この技を持ち合わせていれば、一試合、5点は取れるだろう。

総帥は心配するなというし、チームメイトも意識していないようだが、

俺は、気になってしょうがなかった。

~~~~~

帝国と雷門中との練習試合から、数週間。

弱小チーム、雷門中は、一度も負けていないらしく、地区予選は、3回戦まで上がっている。

俺の予想通り、豪炎寺はサッカー部に入り、他の部員も活躍している。

念のため、土門と冬海さんがスパイでいつているが、どうも不安だ。

「田堂、守、か」

彼が女とは考えにくい。

しゃべり方や雰囲気だつて男だつた（と思う）

仮にもキャプテンだ、キャプテンが女、というのは言いづらいだろう。

それに、噂が立っているとすれば、そこそこ女と言いわたつている。

なんとも怪しいものだ。

俺は、気晴らし程度に、稲妻町をぶらぶら歩いていた。

フットボールフロンティアに優勝しないと、春奈は引き取れない、か。

すべてが俺の敵に見えていた。

そんなとき、河川敷に、問題のそいつがいた。

「あ！ 鬼道ッ！！！」

「え、円堂？」

円堂たちは、河川敷で練習をしていた。

円堂がこっちに来た時、部員から、冷たい視線が来る。気分のいい物ではなかった。

「だいぶ勝ち進んでいるようだな」

「ああ、帝国の試合から、俺たちはすっげー特訓したんだ！次は、絶対勝つからな！」

こいつと話すと、何故か頬がゆるんで、暖かい気持ちになる。

生まれて、両親が亡くなって、春奈と別れて、鬼道家に引き取られ、

総帥にサッカーを教えられてから、安らぎという物を感じなくなった。

でも、円堂を前にすると、幼いころに、春奈と普通にボールを蹴り合った、

あの、幼く、汚れない気持ちとそっくりになるのだ。

「お前は、なんでそんなに素直にサッカーが出来るんだ？」

総帥のサッカーは勝つ事だけが目標だった。

しかし、円堂に対しては、勝つだけではない。

もっと、根本的な何かが違って……………。

「え、うー、そんなこといわれてもなあ……………」  
「わからないか？」

俺は、お前と話して、何かが掴めそうな気がするんだ」

「サッカーをするなら…………、やっぱり楽しまなきゃな！！」

サッカーは楽しいものだろ？ 勝つとか負けるとか、  
そんなんじゃないなくて、目の前の相手に向かって、全力で戦って、  
最高のプレイをするんだ！

そうしたら、きつと鬼道も素直でまっすぐなプレイが出来るんじゃないかな」

満面の笑みで答える。

それを見た俺は、胸にズキン、と痛みを感じたのがわかった。  
痛いというか、なんだか普通の感情ではない。

彼女の顔を、美しいと、綺麗とか、思ってしまった。

これは、墓場まで持っていった方がいいかもしれないな。

「鬼道も一緒に練習しようぜ」

「ふっ、そうだな……………」

「円堂、早く戻れ」

「あ、豪炎寺、鬼道も練習に」

「いや、やっぱりいい、もう帰る」

「えー、帰るのか」

「ああ、じゃあな」

「また一緒にサッカーやろうなー！！」

手を振って、円堂に別れを告げる。

豪炎寺の目を見たとき、あいつは意図的に邪魔をしたとわかった。  
嫌悪感のあふれた目。

恐らく、俺が円堂に近づいたのが、気に入らなかつたのだろう。

円堂に会えたのは、俺に取ってよかつたと、後になって思った。

田堂との接触（後書き）

鬼道さんにかんばれと言いたい……………

今日の格言

「お前は、なんでそんなに素直にサッカーが出来るんだ？」



## 決勝戦

前に円堂にあった時から、たびたび接触があった。

土門は円堂の魅力に惹かれ、帝国のスパイ、ではなく、雷門中サッカー部、となった。

そのことを土門に聞くと、謝りながらも後悔はしてないという。

「円堂に会えば、鬼道さんもわかりますよ」

とも言っていたか。

ますます円堂の魅力は底知れない……………。

俺は、円堂のまつすぐなサッカーの気持ちを見て、

勝利だけを求める戦いに疑問を抱き始めた。

総帥へ、疑問を感じていた。

元々から感じていたことだ。

総帥に会ってから、帝国に入ってから、サッカーに勝ちばかり求めていた。

幼い頃のように、ただただボールを蹴る、と言う行為は、楽しかったのに。

勝つばかりでは、俺は満足したとは、言えず、齒がゆい思いをしていた。

今日の、雷門との決勝戦に勝たなければ、春奈を引き取る事は出来ない。

~~~~~

俺は、総帥の「勝つ」と言ったことに疑惑を感じた。
総帥は勝つことに執着、と言ったほどこだわっている。
なら、実力で勝ち上がってきた雷門へは、なにか罠を仕掛けてい
るはずだ。

罠……………。

俺が見つけてやる。

雷門中とは、正々堂々勝負したい。

邪魔させるわけには行かない……………！

~~~~~

しばらく、スタジアムを探したものの、罠らしき物を見つけない  
とは出来なかった。

雷門の控え室のロッカーを探してみる。  
なにもない、大丈夫そうだ。  
部屋を後にしようと、外に出ると、雷門中が来ていた。

「お前、どうしてここに……………」

「円堂。この部屋には何も無い」

「？ あ、待ってっ！」

円堂が呼んでいたが、気にしている暇はない。  
罨を早く見つけないと……………。

1時間ほど探したが、見つかる気配はない。

しかし、よいことを聞いた。

グラウンドの天井のボルトが緩められていた。

それで悟った。

総帥は、試合が始まったとき、雷門中側のボルトを緩め、上から  
落とすつもりなのだ。

試合開始の握手。

円堂と握手した後、耳打ちをこっそりした。

「総帥は、天井から鉄骨を落とすつもりだ。

部員に言え、ホイッスルが鳴ったら、全員後ろに下がれ、とな」

「！ わかった」

円堂は戸惑いながらも、了解してくれた。

あいつはいいヤツだから、きつと言ってくれる。

きつと、総帥は、鉄骨を落とす。

雷門を確実につぶすために。

俺は、拳を握りしめた。

## 決勝戦（後書き）

今日の格言

「円堂。この部屋には何も無い」

## 総帥のたくらみ

俺も、一応チームに言っておいた。

源田や佐久間たちは、驚きを隠しきれていなかった。

「鬼道。それは本当なのか」

「ああ、総帥のする事はだいたいわかっている」

「でも、いくらなんでも、総帥がそんなことしますか？」

鬼道さんが言うことは信じたいんですけど……………」

「佐久間、信じてくれ。」

みんなも信じてくれ、あと念のため前の奴らはホイッスルが鳴いたら後ろにさがれ」

不安の残ったまま、ポジションに移動する。

俺は、天井を見上げた。

このまま、落ちて来なければいいのだが……………。

ピーッ

ホイッスルがなった。

その時、雷門中側のグラウンドに、鉄骨が落ち、地響きが起こる。グラウンドが、激しく揺れた。

やっぱり、あの人は……………！！！！！！

円堂たちは、大丈夫だった。  
キャプテンの方が説得力は有ったのだろう。  
俺が言いに行けば、このまま潰れていたかもしれないのだから。

俺は、源田たちと円堂を連れて、総帥、いや影山のもとへ行つた。  
握りしめた手は、汗で濡れていた。

「まさか、影山がこんな卑劣だったなんて……」

円堂が呟いた言葉に、ただ頷くしか出来なかった。

「影山ああああ……!!!」

「……総帥とは呼ばないのかね、鬼道」

「俺は、貴方を信じてここまでやって来た。

しかし、このやり方は、卑劣で、卑怯すぎるっ!!!」

「雷門を手っ取り早くつぶすための手段だ」

「潰すだって!? ふざけんなっ!!!」

「円堂、守、いや、守、かな」

「っ!!!」

「守……だって?」

「円堂大介の孫、君は女だったね? 知っている、一度だけ、大介と話したことがある」

「やめてくれ……、その名前を口にするなっ!!!」

円堂が、女、だって?

「この事が知られば、君はマスコミの種になり、優勝は取り消されるだろう。」

女子の参加は確か認められないはず。

これがばらされたくなければ、君からここで言え、棄権を望むんだ」

「なん、だと……………?」

「円堂、お前の事はよくわからないが、影山の言うとおりにしてはだめだ」

「そうだ！ 影山、お前を逮捕する」

「お、鬼瓦さん！」

「円堂、待たせちまったな。もうこいつは連行するから、言うことを聞く必要はない」

鬼瓦、と呼ばれた男（刑事だろう）は、影山に手錠をかけ、連行していった。

しかし、これだけは聞いておきたかった。

「円堂、影山の言ったことは」

「女がサッカーするなんて、変な話だよな。」

こんな形ではらされたくはなかったんだけど……………くっ!」

円堂は、影山の使っていた机を、強く叩いた。

女、とばらされたことがよほど屈辱的だったらしい。

その目は、潤んでいた。

「円堂、悩んでる暇はない、お前は、キャプテンで、GKだ。早くグラウンドにたて」

「監督……………、今行きます」

そこから立ち直った円堂は、強い顔をしていた。

横にいた源田に話しかける。



「田堂は、女だったと、誰にも喋らないようにしなければいけないな」

「女なのに、俺よりGKの素質が有るなんて、羨ましいな」

総帥のたくらみ（後書き）

今日の格言

「女がサッカーするなんて、変な話だよな。」

「こんな形ではらされたくはなかったんだけど……くっ！」

## 敗北の喜びは

あの後、代理の監督を無理矢理立て、帝国と雷門の試合は続く事になった。

しかし、円堂は、調子が悪そうだった。

俺たちがシュートを決めても、前のような立ち上がりを見せてはくれなかった。

女と言われた事がショックだったのだろうか。

少し気を抜いた俺は、足首をひねってしまい、グラウンド外へ出た。

春奈が来て、腫れた足に、スプレーをかけてくれた。  
冷たいのに、暖かい。

「何をしているんだ」

「わからない、ただ、体が勝手に動いたの」

「……………」

大きく、なつたな。」

「！」

「昔の時とは大違いだ。強くなったみたいだな」

「お兄、ちゃん……………」

本当に、その顔は大人びていた。

包帯が巻かれた足を見る。

丁寧な巻き方だ。

雷門中で、マネージャーとしてがんばって居るみたいだ。前みたいに抱きしめてやりたかったが、その感情は抑える事にした。

力を入れて立つ。

春奈に背を向け、こういった。

「忘れてなんかない。ずっと、お前の事を思ってきた」

その時の春奈の顔を見ていないが、笑顔で有ればいいと思った。

俺は、帝国のゲームメイカーとして、勝たなければならない。

負ける訳にはいかない。

そのためには、全力でプレイを。

~~~~~

それから、円堂は調子を取り戻し、逆転負け。雷門の勝ちだった。

帝国が退場すると、後ろから春奈が追いかけてきた。

「私を引き取るために、勝ち続けてきたの？」

「春奈、俺は、お前を……………」

「私、音無の家でよかったよ。

音無の、おじちゃんとおばちゃん、よかったから」

「そうか、よかった……………」

「ありがとう！ お兄ちゃん！」

春奈は俺の胸に飛び込んできた。

その体を抱きしめるのは、すごく久しぶりで、懐かしかった。しばらく、このぬくもりを、手放したくなかった。

~~~~~

「えんどうませぬ 円堂守は女だったか……………」

「ばれちまったのが最悪だよ。知ってる人は少ないからなー」

試合が終わり、俺と円堂はグラウンドの真ん中で話していた。

こいつが女とは、世の中不思議な事もあるものだ。

これで、俺のもやもやの理由もわかった。

「じゃあ、フットボールフロンティアは帝国の分までがんばらなきゃいけないな！」

「知らないのか？」

「今年の優勝校は自動的に参加校に入るんだぞ」

「え？ そうなの？」

不思議そうに顔を傾ける。

その可愛らしい仕草に、思わず笑みを浮かべる。

「ちえー、バカにすんなよ」

「いや、すまない」

円堂は、手を出して、握手を求めてきた。

「俺がお前と握手する理由はないが」

「あるよ。」

「……楽しかった。また俺たち、サッカーやろうな」

「……………ああ」

手を握る。

そのぬくもりのある手を欲しいと、心の中で想ってしまった。

「それと円堂、女なら『俺』はやめた方がいいと思うのだがな」

「だって、それ以外になんもないじゃん」

「……………そうだな」

敗北したはずなのに、この喜びと爽快感は、きっと全力でプレイしたから、なのだろう。



敗北の喜びは（後書き）

今日の格言

「あるよ。」

……楽しかった。また俺たち、サッカーやるうな」



悔しい

フットボールフロンティア全国大会。

帝国の一回戦目の相手は、世宇子中というところだった。

資料はなかったので、新設校と思ったが、そこまで強い予想はしなかった。

俺は、雷門の時の足の捻挫で試合に出ることが出来なかった。

俺の目に映ったのは、チームメイトが、仲間が、倒れていく姿だけだった。

~~~~~

真っ白いシートの上に横になった源田と佐久間。
包帯が巻かれ、見るだけでもつらい。

「せめて、俺がもっと強かったら……………」

「源田、自分を責めないでくれ、俺がフィールドに立っていれば…」

…俺は「

「鬼道さんのせいじゃないです。
俺たちはもともと鬼道さんに頼りすぎていた。
鬼道さんが居なくなっただとたん、これですよ」

佐久間が苦しそうに笑うが、俺はつられて笑うことが出来なかった。

ただただ、目の前で倒れていく仲間の姿を見ることが出来ない自分に、腹が立つ。

「絶対、仇はとる」

俺は、病室を後にした。

噛んでいた唇の傷が染みて、それがひりひりと痛んだ。

~~~~~

足は治った。

今、帝国のグラウンドに立っている。

雷門中は未だ負けていないらしい。  
羨ましいような、妬んでいるような。  
複雑な気持ちに襲われていた。

「鬼道！！」

「えん、どっつ？」

何故か、円堂が帝国のグラウンドにいる。  
サッカーボールを持って。

時間帯と雷門のジャージを着ていると考えれば、  
わざわざ部活が終わって来てくれたようだ。  
恐らく、帝国が負けた噂を聞いて、駆けつけたのだろう。

「お前は、大丈夫なのか？」

「ああ、控えてな。ベンチに座っていたんだが……………」

あの光景を思い出すと腹が立つてくる。  
なにも出来ずに、ただ倒れて行くチームメイト。  
ぐつと、拳を握る。

その時、円堂がボールを投げてきた。

俺は、反射的に蹴り返す。

円堂は、しっかりと受け止めてくれた。

「鬼道、やっぱりお前はサッカーしなきゃダメだな！」

「！サッカー……………」

俺はこのとき、円堂に感謝せねばならないと思った。

「円堂、よかったら、家に来ないか」

悔しい(後書き)

今日の格言

「絶対、仇はとる」

## 自宅デート？

鬼道家は大きいため、円堂はとても喜んでいた。  
喜んでいる様子を見ると、なんとも微笑ましい光景だった。

「鬼道んちでかいんだな」

「慣れれば飽きるぞ」

「いいなあ〜いいなあ〜」

円堂は俺の部屋に入ると、部屋の物を隅々まで細かく見て回った。  
花瓶などを落としそうになったときは本気で焦ったが、  
それも含めて、なんだか元気の良い子を見守る親のような気持ち  
になったのだった。

「部屋って何でみんなこんなに綺麗なんだ？」

「みんなとは？」

「豪炎寺はきっちり整ってるし、風丸は物が多い割に散らかってないし〜」。

「で、鬼道はすげ〜」

「お前が汚いだけだろ」

「む〜……………」

他の男の家に上がった、というのはおもしろくなかった。

まあ、円堂なら普通に上がりそうだ。

そこに嫉妬すると、俺は延々と嫉妬しそうだな。

「適当にくつろいでくれ、と言つと、ベットに横になって、くろくろし始めた。」

なんだか、子犬や子猫を連想してしまった。

俺は、古びたサッカー雑誌を取り出した。

「……………その雑誌、結構前のだな」

「ああ、これ、父さんに貰ったんだ」

「？ 今の？」

「いや、孤児院に行く前。結構前だな。」

1、2歳の頃、これを貰ってずっと持っている」

それを、ぎゅっと抱きしめる。

有人、サッカーは好きか？

うん！ すきだよー！

そうか。じゃあ、これを読んで、サッカー出来るようになれよ。

ありがとう！ ははー！

幼き日のある日の出来事。  
それが、俺にとつての始まりだった。

「じゃあ、鬼道にとつて、サッカーはお父さんの思い出なんだな」  
「そうだな」

雑誌を握る俺の手に、円堂の手が重なる。

「っ！」  
「鬼道のきっかけが、この雑誌、なんだな」

顔が熱くなるのがよくわかる。

俺は、円堂に対して、ドキドキして居るんだ。  
鼓動がはつきり聞こえて、こんな事は、今までの中で初めてだ。

すると、携帯の着信があった。

円堂の携帯だった。  
電話のようだ。

「あ、わり。」

はいーもしもし？

……………あ、わかってるよ。大丈夫。

ん？ えーおこんなよー。うん……………うん。

はいーい、じゃーな。

わっ、恥ずかしいだろー……………はいはい、おやすみ」

ピッ

「誰からだ？」

「んー？ 豪炎寺からだっただけ」

その時、俺は胸の中で豪炎寺に対して、どす黒い感情が渦巻いた。円堂は、電話に出たとき、嬉しそうだった。それが、見ると胸が痛い。

「円堂、もう遅いぞ」

「え！ もうこんな時間かよ！？」

もうちよつとだけ居たいなー……………」

それは反則だ。

「じゃあ、親に連絡するから、今日は泊まるか？」

「いいの？」

「やったあ！ へへっ、じゃあ、お邪魔になります！」

少しだけ、彼女と居させてくれないだろうか。



自宅デート？（後書き）

今日の格言

「鬼道のきっかけが、この雑誌、なんだな」

## 妬む

円堂が泊まる事を言うと、父さんは喜んで、女物の下着や服を用意してくれた。

それは、花柄で円堂はイヤそうだったが、苦笑いで了解してくれた。

鬼道家の食事は、お金をかけて、質のいい食事を用意して貰っている。

今日は、シーザーサラダとステーキ、焼きたてのロールパンと、前菜、デザート。

円堂がものすごく喜んでくれたので、父さんも、俺も嬉しかった。

「鬼道は毎日あんなうまい飯食べてるのか？」

「まあな」

「いいなー！！」

「ふっ、それなら毎日来るか？」

「それじゃ申し訳ないな」。俺の家でもかあちゃんの飯食えよ」

「その時は世話になるな」

こうして言葉を交わせるのが、幸せというものなのだろうか。

円堂を先に風呂に入らせた。

円堂は、携帯を俺のベットに置きっぱなしだった。

俺は、少しの好奇心と、さっきの豪炎寺との電話で、携帯を、弄ってみたくなくなった。

少して触れる、というところで手を止める。

人の携帯を見るなんて、失礼にも程がある。

その時だった。

着信がなったのだ。

さつきとは違うメロディ、ということはメールか。

俺は、それが引き金となり、携帯を開いてしまった。

待ち受けは、サッカーボールとグローブと一緒に置いてある写真だった。

あいつらしい。

そう呟いて、メール画面を開く。

新着を見る、豪炎寺からだ。

『円堂。』

今、鬼道の家に住るなら早く帰れ。

鬼道は何を考えているかわからないぞ』

歯をガリ、と噛んだ音がした。

豪炎寺に対し、負の感情がわき起こる。

俺は、豪炎寺のメールを見た。

罪悪感は不思議となかった。

内容は、どうでもいい話も有れば、はげしい愛を語ったものも有った。

それで悟る。

こいつらは、恋仲なのだ。

「円堂と、豪炎寺……………」

階段を上がる音がした。

まずい、今の状況を見られたら……。俺は、せめてもの嫌がらせで、新着のメールを削除した。

「はあ〜！ 風呂も広がったな〜！」

円堂の風呂上がりは、なんというか、濡れた髪や体が色っぽくて、目のやりどころに困る。

それに、バンドナをはずして、幼く見えるし、女性らしい服装が似合っていて。

俺は、とりあえず髪を乾かすことを進めた。

「えーめんどいー!!」

「じゃあ、こっちに来い、乾かしてやる」

「ありがとー」

円堂は、俺の前に座った。

俺はドライヤーを用意し、円堂の髪をかき回しながら乾かした。

春奈の髪を乾かした経験がこんなところで生かされるとは思っていなかった。

いい香りがした。

髪の下に見えたうなじに、軽い欲望が起こり、それを押さえつける。

俺に押し倒されたとしても、お前は豪炎寺が好きだもんな。

なにかで、負けた気がする。

その後、俺も風呂に入り、適当に会話した。

学校がどうた、成績が上がらないとか、部活が楽しいとか、サッカーがなんだとか。

それは、素朴だが、俺にとっての安らげるものだった。

「じゃあ、もう寝るな」

「ベットを使え。俺はソファでいい」

「ああ、悪いな。」

「じゃあ、おやすみなさい」

「おやすみ」

眠りについて、俺は、ソファに顔を押しつけた。

豪炎寺のメールの事を思い出すと、憎たらしかった。

自分は、もう、失恋していた。

涙を流していたことに、長い時間気づかなかった。

妬む（後書き）

彼氏持ちで、まさかのお泊まりパターンだと……………

今日の格言

「じゃあ、こっちに来い、乾かしてやる」

## 転入と

彼女が泊まりに来てから次の日、俺は父さんに雷門中の転入を希望した。

始めは反対していたが、帝国サッカー部の今の状況、そして円堂の事を話すと、わかった、と言って書類を書いたり、電話をしていた。

俺は、源田と佐久間に転入の事を告げると、

「絶対世宇子を倒してくれよ」

「雷門でも、がんばってくださいね」

と、快く了解してくれた。

本当はイヤだろうと思ったが、仇を打つためには仕方がない。心の声に目を瞑ろうと思ったのだ。

それに、円堂が

「鬼道、やっぱりお前はサッカーしなきゃダメだな！」

そう言ってくれたのは、雷門への興味を注いだ。

他にもサッカーの強豪校はあるし、鬼道家の力を使えば、どの学校でも行けるだろう。

でも、俺は雷門中で、円堂とサッカーをしたかった。

それから、何日間か、帝国と雷門を行き来し、雷門の制服や道具

を揃えた。

帝国のサッカー部には、時折顔を見せる、と告げると、喜んでくれた。

明日から、雷門に行ける。

胸が躍っている。

~~~~~

鬼道家から雷門中はかなり長距離で、少し早めに出ないと時間間に合わない。

太陽がゴースル越しでも眩しい。

「……………んだな。ってやめろよ」

「いいだろう、誰も見ていない。

俺だって、いろいろ我慢しているんだ」

声が聞こえた。

聞き覚えのある声だった。

文脈から読みとれるのは、特別な仲らしい。

電柱に身を潜め、前を見る。

円堂と豪炎寺が、並んで登校していた。

その時だった。

俺は、その間に割り込んでやろうと、円堂の肩を叩いた。

豪炎寺はいらいらが顔に現れていたが、円堂は、俺の顔を見るとぱっと顔が明るくなった。

それが、嬉しかった。

「よお。久しぶりだな、円堂」

円堂は俺の全身を見て、嬉しそうに言う。

マントの裾をぎゅっと握った。

「お前、雷門に転入するのかあ！！！！！」

「ああ。サッカー部に入るぞ」

「すっげええ！ 鬼道をサッカーできんだなあ！

やったな、豪炎寺！！！」

「ん、あ、ああ……………」

邪魔には成功したらしい。

豪炎寺は、下を向いて、不快感を丸出しにしている。

こいつはポーカーフェイスと思ったのだが（好きな人のためなら熱くなるやつなのかもな）

俺は、その後、円堂と学校案内の約束を交わせた。

豪炎寺は相変わらず不満そうだった。

豪炎寺の目を見て、俺は笑った。

普通の人ならわからないだろうが、きっとお前にはわかる。
円堂の敵を見破れるお前なら、俺の嫌がらせにも気づいているだ
ろう。

「円堂、俺の前で男といちゃつくな」

豪炎寺は、円堂をいきなり抱きしめた。

眉間にしわが寄るのをぐっとこらえ、冷静を取り繕う。

心の中の汚らしい声を、綺麗事ですべて洗い流す。

そうしないと、俺の中で、すべてが爆発してしまいそうだった。

円堂が豪炎寺に何かを囁いた。

その声は、何故かはつきり聞こえた。

それは、俺をとことん打ちのめした。

転入と（後書き）

今日の格言

「田堂、俺の前で男といちやつくな」

お弁当

豪炎寺と、校舎裏に呼び出され、いろいろ問いただされた。

豪炎寺は本当に熱くなるやつらしく、カマのかけ方も下手だった。俺は、頭に血が上ったヤツなら、赤子の手を捻るものだった。

「そりゃ、好きだからだろうな。」

それ以外に、いい言い方が見つからない」

あいつに、なぜ円堂にこだわるんだ？ と聞かれ、そう答えた。

その時の豪炎寺の、唇をかみしめた顔は、いろんな意味で最高だった。

こいつを打ちのめした事は、俺にとって最高の喜びだった。

すると、円堂が来て、一緒に弁当を食べないか、と聞かれた。

俺は、豪炎寺が行く前に、円堂に近づいた。

「円堂、俺も一緒にいいか？ 転入したばかりで食べるヤツがない」

「あ、うん。いいよな！ 豪炎寺！」

「ああ」

俺たちは、3人で弁当を食べる事になった。

~~~~~

雷門中の屋上は、風通りもよく、景色もいい。  
絶好のお弁当スポットだろう。  
たくさん生徒が集まっている。

そいつらは、俺の顔を見てなにやら表情を曇らせる。  
帝国の鬼道を知っているのか、初めてみる顔だからなのか。  
くすくすと笑っているヤツもいた。

「おまえらー!!!」

新しく転入した鬼道だ!!

仲良くしてやってくれー!!!」

円堂がいきなり叫んで、そいつらはいきなり静かになって盛り上がった。

俺は気恥ずかしかったが、円堂が俺のためにしてくれたと思うと、  
なんだか嬉しかった。

雷門中の生徒になれたのだと思う。

「すまん」

「いって、せつかならみんなと仲良くならなくちゃな!」

「ここがあいているぞ」

豪炎寺が指定したところは、ベンチだった。

一つしかないため、3人で並ぶようだ。

「鬼道、お前は床だ」

「そりゃ失礼じゃないか」

「さあ〜！ 食べようぜ！」

円堂は、ベンチの真ん中に座った。

左右に空いた空白の席。

俺は右、豪炎寺は左に座った。

「豪炎寺は今日なに？」

「あー、サンドイッチだな」

「鬼道は、つてすげー！！」

「ふふ、弁当だろうがカツプラーメンだろうが、鬼道家は手を抜かない」

「すげーすげー！！ 俺とかおにぎりだぜ……………」

「じゃあ、俺のたこさんをやる」

「豪炎寺、さんきゅー！ つむ！？」

「な……………」

豪炎寺は、タコウィンナーをフォークに刺して、円堂の口に入れた。

世で言う『あーん』というヤツだ。（無理矢理だか）  
驚愕した。

こいつ、見かけに寄らず、見せつけて来るやつなんだな……………。

「プチトマトもやる」

「い、いらぬいらぬいららっ！！」

円堂は顔を真っ赤にしてぶんぶんと首を振る。

なんだか、俺だけが流れに取り残された気がした。

「円堂。俺は煮物をやる。味が染み込んでおいしいぞ」

「わーうまそう！ でも箸がないなあ……………」

「おにぎりだからか。」

「じゃあ、ちょうどフォークが有る」

「ほんつと鬼道つて用意いいな！」

隣で冷たい視線が俺に向けられる。

俺は、逆に見てやった。

あいつは目を離す。

にやり、と笑った。

円堂は、人参を口に入れた。

食べ方が可愛い。

こいつは本当にうまそうな食べ方をするのだ。

その後、円堂はぱくぱくとおにぎりをたいらげた。

柔らかそうな頬に、米粒が付いている。

ベタだ。

でも、これはチャンス。

俺は、円堂の頬の米粒を、手で取ってやった。

それでぺろり、と一粒の米を口にした。

僅かだが、甘い味がする。

「あ、へへっ、ありがとう」

にこつと笑う。

お前の笑顔は反則と思う。

お弁当（後書き）

お弁当シーンって好きです。

今日の格言

「ふふ、弁当だろうがカップラーメンだろうが、鬼道家は手を抜かない」



## 欲望の絡まり

「でな、ここがパソコン室だな。

技術の時間とかたまにつかうぞ」

「結構広いな」

「中はパソコンだらけだからな、んなことよりサッカーだな」

弁当を食べ終わり、昼休み、円堂の案内で学校を回っている。

雷門中は広く、内装は綺麗なので、見てて飽きる事はなかった。

それに、円堂は案内するのがそんなに好きなのか、俺の手首を掴んで、

いろんなところにつれ回してくれるのだった。

手の温もりは、手首からでも十分伝わっている。

「あ、ここここー！一年の教室、春奈がいるぞ」

「そうか」

「あ、おにーちゃん！キャプテン！」

春奈は、ぴよこぴよこと飛び跳ね、こっちに向けて手を振っていた。

近づくなり、質問責めだ。

「お兄ちゃん転入したの？ また一緒だね！

で、キャプテンとデート??」

お兄ちゃんをよろしくお願いしますね！」

「は、春奈……………っ」

「ああ、鬼道は俺が面倒見てやる！」（サッカー的な意味で）

「キャプテン男前ですっ！！」

円堂は、胸をどんと叩き、誇らしげに笑う。  
春奈の『面倒』と、円堂の『面倒』は違っただろうな。  
少し悲しくなる。

それからも、円堂は様々なところを（手を握りながら）連れ回した。

廊下を歩いているとき、近くの奴らがくすくすと笑った。

それは、屋上の時とは違った、男女の関係を垣間見た時の反応。

手を公共の場で握っているのは、他の奴らの目から見ればおかしいだろう。

俺は、恥ずかしいような、嬉しいような気持ちで。

軽い足取りで歩いていた。

~~~~~

「ここが図書室だ」

「お前は本を読んでいるイメージはないな」

「どーゆーいみだよ？」

「別に」

「なんだよお……………」

しかし、図書室には、人はおらず、がらりとしていた。
誰もいない部屋。

なんだか、何かのドラマで見たことある気がする。
図書室から恋愛がスタートするような。

俺の場合は、もうスタートも出来なかったな。

円堂は、本は嫌いではないらしく、そこら辺の本を適当に取って
読んでいた。

俺に背を向けて本を読む。

その背に、また欲望が渦巻く。

俺は誰もいないことを確認して、少しずつ円堂に近づいた。

円堂の距離、約5センチ。

そこで、円堂は気づいて俺の方を見た。

ここまで来れば押さえられず、円堂を抱きしめていた。

「きつ、鬼道……………?」

「俺は、俺は、っ……………」

この体をいつまでここに留めておけるだろう。

無理だろうな。

俺に、こいつを手に入れる事は出来ない。

それなのに、未練がましい。

何度も何度も望むんだ。

お前が、自分の隣にいてくれるようになって。

その瞳が、好きなんだ。

その微笑みが好きなんだ。

その体が、好きなんだ。

その、お前が……………

誰も見ていない。

俺は、円堂の唇に、俺の唇を押しつけた。

「ん、んっ!」

苦しそつに呻き、俺から離れようとする。
その体を、離さなかった。

「鬼道っ……………早く、離して……………」

「あと、少しだけ、な……………」

何度もキスをした。

少し、もう少し、って。

俺は、禁忌を犯したようなものだった。

そのキスの味は、しなかった。

円堂を離すと、ぺたんと座り込んで泣いていた。
俺は、円堂の涙を、親指で拭った。

「すまない」

俺は、図書室に田堂を置いて出ていった。

教室に行き、豪炎寺に田堂が図書室に居る、と教えた。

欲望の絡まり（後書き）

望んではいけない恋。

今日の格言

「ああ、鬼道は俺が面倒見てやる！」（サッカー的な意味で）

壊れていく

「鬼道。円堂に何をした」

嫌悪感の溢れた目で豪炎寺は俺を睨んだ。

その瞳に恐怖を感じたが、俺はあの行為を認めて謝罪などしたくなかった。

謝罪すれば、円堂と豪炎寺の関係を認めることになる。

あの行為が、円堂との最後の思い出、という形にはしたくない。

「なにもしてはいない」

そうして、罪を増やしていくのだろうか。

「嘘を吐くな、お前が何で図書室に円堂が居るのを知って居るんだ」

「たまたま見たんだ。それで、俺にはどうしようもなかったからお前を呼んだ」

どうしようもなかったのは本当だった。

きっと俺があの時謝っても、円堂が許してくれるとは思えなかった。

「嘘だ！ お前は絶対何か知っている！」

「知らないと言っているだろう！！」

「貴様っ……………！！」

豪炎寺の怒りは度を越えたのか、俺の胸ぐらを掴んできた。

廊下で話していたので、通りかかる生徒がじろじろと見てくる。そんなことは関係なかった。

俺は抵抗せず、豪炎寺の目を見ていた。

いつものつり目が、怒っているせいかもっとつり上がっている。目だけで、殺されても可笑しくない位に、怖かった。

「早く吐け。円堂に何をしたのか吐け」

「ぐ、っ」

「ああ、喋りたくない事をしたのか。尚更だな」

すると、豪炎寺の後ろからつつすら見えた影。

そいつが、豪炎寺の襟首を掴んで後ろに引っ張った。

豪炎寺はいきなりの事でバランスを崩し、倒れた。

俺もうまく着地出来ず、尻餅を付いた。

そいつは、たしか風丸とかいうヤツだった。

風丸は、豪炎寺に負けず劣らずの怒った顔で、後ろを指さした。

「お前ら、円堂の事を少しは考えろっ！！」

自分の事で揉めているって知って、本人がどう思うか考えてるのか！！」

はっ、とした。

風丸が指をさすところに、円堂が居た。

泣いているのだ。

声を殺して、泣いていた。

「お前ら、見てないで早く教室に入れ、常識はないのか」

風丸は、廊下で見えていた生徒をにらみつけ、教室へ帰らせた。
そして、俺たちに向き直った。

「早く円堂に謝るんだな、二人とも」

「……………すまなかった」

「俺にじゃない！ 円堂に、だ」

風丸は、円堂に何か囁いてクラスへ帰ってしまった。

ドアを蹴っていたので、相当あいつもイライラしていたのだろう。

俺は、円堂の顔を見た。

俺と目が合った。

でも、円堂は目をそらさず、まっすぐ俺を見て、笑ってくれた。

それは、いつもの笑顔ではなく、母親が子に向けるような、包容力のある笑み。

あんな事をした俺を、許してくれるのだろうか。

あり得ない。

「まったく、二人とも、みんなの前で喧嘩すんなよ。」

ほら、大丈夫か？」

「円堂、すまなかった」

「謝んなよ、鬼道。別に気にしてないから」

豪炎寺との喧嘩を気にしていないのか。

それとも、俺のあの行為を気にしていないのか。

それを聞くことは出来なかった。

「俺も悪かった」

「お前、怒ったら襟首持つんだな、もうそんなことするなよ」

円堂は、豪炎寺の額をこつんと拳をぶつけた。

それで和んだのか、豪炎寺は笑顔を浮かべて、円堂を抱きしめた。

「ちよっ……………」

「悪かったな、心配かけて」

他の生徒はクラスに帰って、廊下には誰もいなかった。

だから、その光景を見ていたのは俺だけだった。

「すまない、俺は先にクラスへ戻る」

二人は何もいわなかったが、俺は自分のクラスへ戻った。

教室に入ると、クラスの奴らが見てきたが、目を合わせるとすぐ目をそらした。

二人が抱き合う姿をじつと見ているわけにはいかなかった。

あれを見ていると、俺自身がまた壊れてしまいそうだった。

円堂にあれをした時点、いや、円堂に会った時点で、俺は壊れていたのかもしれない。

壊れていく(後書き)

今日の格言

「謝んなよ、鬼道。別に気にしてないから」

イヤな謝罪

俺が豪炎寺と揉めた日、6時間目から雨が降り始めた。英語の時間、先生が文の作りを説明している時だった。大きな稲妻が、山の方に落ちて雨が降り始めた。

雨は、俺の心を代わりに語ってくれたようで、不思議と落ち着いた。

頬杖を付いて、円堂の事を考えた。

あいつは、俺のことを嫌いになっただろうか。そうだ。

元々あいつと豪炎寺は付き合っているのだから、他の男との接触を避けるべきなのだ。

でも、円堂は誰へでも人懐っこい笑みを浮かべ、サッカーをしよと笑うのだ。

そして、人の心を勝手に蝕み、飲み込んで、気づけばあいつに誰かが惹かれていく。

考えれば恐ろしいヤツだ。

人間とは不便なものだ。

好きな人の隣に居れる人は1人しか居ないなんて。しかもそれが自分ではないなんて。

もう少し、アプローチしたら円堂は俺の隣に居たのだろうか。
それとも、サッカーがもっとうまかったら、あいつの目線を独り
占め出来るだろうか。

授業は、全く耳に入らなかった。

~~~~~

雨が降ったため、部活は中止。

中で練習といっても、他の部活が占領しているため、サッカー部  
はいつも会議だとか。

重い足取りで円堂に教えて貰った部室へ行こうと、廊下を歩く。

「あ、鬼道!!」

円堂が、俺に向けて手を振っていた。

俺は、目を疑った。

「お前、豪炎寺といかないのか？」

「あ、そうなんだけど豪炎寺には先に行って貰ってるから」

円堂はにこっと笑って俺の方を向く。  
胸が痛い。  
聞いてみることにした。

「円堂は、俺が、その、キスしたことは……………」

「言っただろ？ 許してやるって？」

「だからもうチャラ！ そのかわり、今日雷雷軒奢ってくれよ」

「あのラーメン屋か」

「そうそう！ あつこのラーメンはおいしいんだ！」

「わかったわかった。奢るよ」

「やったー！」

円堂はさっきのことなど忘れて、ラーメンのおいしさについて語り始めた。

嬉しそうだった。

何でそんなに、苦しいのに笑えるのだろう。

俺が苦しさを与えたのに、その男に向けて、どうしてそんな優しさを振りまけるのだろう。

こいつは、どんな強さを持っているのだろう。

知れば知るほど、「円堂守」という人間に堕ちていく。

その深い心の中を、少しだけでも、覗いてみたい。

それが出来れば、円堂の事をもっとしれるだろうか。

「本当に、許してくれているのか」

「？ それって」

「愛しい人がいるお前に、いきなり知らない男が押し掛けて……………」

「……………憎くない、と言えば嘘になるな」

「……………」

「でも、俺はいつまでも文句を言いたくないし、引きずりたくない。こういうことには案外慣れてるし。」

鬼道の事は好きだけど、やっぱり豪炎寺が俺は好きだから。

「ごめん」

これで、失恋した、か。

そのあと、俺は円堂の話にずっと付き合っていた。

俺は、きつとこんな汚い心だったから、円堂に愛してもらえなかったんだろつな。

彼氏が居るのに、女に手を出して。

逆に、円堂に言われて吹っ切れた気がした。

~~~~~

その帰り、円堂の言ったとおり、豪炎寺も連れて雷雷軒へラーメンを食べに言った。

「響監督ー！」

「おお、円堂。今日は大盛りか？」

「うん！ あ、こっちは鬼道。帝国から転入だぜ」

「鬼道か。やっと影山から解放されたようだな」

「はい、おかげさまで」

「うんうん。餃子サービスしてやるからな」

「わーありがとー監督ー！！」

カウンターに座り、ラーメンを食べた。

おいしかった。

きつとそれは、円堂たちと一緒に食べたからだと思う。

「ここのラーメンはおいしいな」

「ああ！ 最高だろ？」

「豪炎寺も前からきてたのか」

「お前みたいに連れて来られたんだ、しかも奢り」

「いいじゃんか！ 今度俺が奢るぜ！」

「楽しみにしてるぞ」

ラーメンは、胃にじんわりと染みる温かさ。

それは、俺の傷をいやしてくれるようだった。

イヤな謝罪（後書き）

今日の格言

「愛しい人がいるお前に、いきなり知らない男が押し掛けて……」

フィールドの魔術師？

円堂は、俺への態度を変えることはなかった。

それは、嬉しかったのか悲しかったのか、俺はむずむずした物が、心にひっかかった。

豪炎寺とは、やはり意気投合は出来なかった。

目を合わせれば、あの時とは少し違うが嫌悪感の溢れた目でこちらを見るのだ。

フィールドでは息を合わせようとはがんばっているが、どうもうまくいかない。

表面だけの関係、と言えばわかりやすいと思う。

しかし、その豪炎寺と意気投合出来る出来事が起こった。

ある日、俺たちはいつも通りの練習だった。

「マックス！ パスだ！」

「あいよっ」

「染岡！ 上げれ！」

「おう！！」

そんな俺たちを、男が眺めていた。

見たことがあった、サッカー関係で、たしか……………。

半田のミスキックで飛んだボールをそいつは、軽々と胸でトラップしたのだ。

そして、マジックのように華麗なボールさばきで、俺たちの中に

切り込んでいった。

「いかせないっ！」

俺は、その男に向かって行って、ボールを取ろうと必死になった。もう少し、のところで抜かれてしまった。

あのボール裁き、足の使い方、早いドリブル……………。

「よし！ こい！！」

円堂が、手をぐつと構える。

男は、シュートを放つ。

あの技、間違いない。

フィールドの魔術師……………。

「スピニングシュート！！！！」

「ゴットハンド！！！！」

円堂はがっちり止めた。

有名な選手にも遅れは取らない、か。

その後、名を名乗って貰った。

一之瀬和哉。

アメリカから幼なじみに会いに来たらしい。
サッカーをしていて、俺たちの練習に興味を持った、とか。

しかし、そいつは（いろんな意味で）問題だった。

「円堂は、女の子なんだねえ！！ うんうん。かわいいよ！！」

一之瀬が円堂に抱きついた……………。

その時、染岡と豪炎寺と協力して、この男を引き剥がした。
結構抱きしめていたのか、なかなか離そうとしなかった。

まったく、初対面から女と見破るとは。
強敵だ。

アメリカ育ちだからってスキンシップが過激すぎる。
ちょっとやめて欲しいな、こいつは。

「俺は女じゃないぞ！！ ちゃんと男だ！！」

「いんや、俺はわかる。」

円堂から香るそのふんわりした匂い、体つき、顔、その他もろも、
ぶっ！！

豪炎寺が、いいところで一之瀬の顔に拳をめり込ませていた。

豪炎寺がこつちを見ている。

俺は反射的に、にやりと笑った。

あいつも、笑みを浮かべた。

一之瀬は、円堂に彼氏がなんだ、かわいいだなんだと話していた。

また豪炎寺がこつちを向いた。

「なあ、鬼道」

「一之瀬殺すか」

「だよな」

その時、初めてこいつと意気投合出来たと思う。

~~~~~

その後、2日かけ、『トライペガサス』を完成させた。

やっと、終わったと思ったのだが、終わらなかった。

「あれ！一之瀬！？」

「帰りの飛行機には乗らないよ！」

やっぱり、君とサッカーしたいなああっておもって！！！！」

邪魔者が増えたな。

数日間、一之瀬と円堂に関して、何度も部活でもめたのだった。



フィールドの魔術師？（後書き）

今日の格言

「円堂は、女の子なんだねえ！！ うんうん。かわいいよ！！！」



## 優勝の残り香

俺たちは無事に世宇子を倒し、日本一となった。

優勝した次の日、円堂と一緒に佐久間と源田のところに報告した。二人とも、優勝を知っていたようで、顔を出すと笑顔になった。

「おー久しぶり！ 元気にしてたか？」

「円堂か、珍しい来客だな」

「まあ、だいぶケガは良くなったよ」

「そっか。よかったな！」（にこっ）

「（どきん）」

円堂の被害者は増えていくばかりらしい。まったく。

「もうそろそろ退院できるな」

「早く退院して鬼道さんとサッカーしたいです」

「焦るな。ちゃんとケガを治せ」

「あ、円堂も一緒にしてくれ。GKの知り合いはあまりいないんだ。今度一緒に練習してくれ」

「俺もGK同士で練習はやったことないなあ。楽しみにしてるぞ」

「お、俺のシュート練も付き合ってくれ」

「おう！ 皇帝ペンギン2号、見せてくれよ」

「最高のシュートをぶつけてやるぞ」

佐久間と源田は、円堂を気に入ったらしく話し込んでいた。

俺はそれを、親のような気持ちで眺めていた。

優勝して、帝国の仇はとったんだな。

こいつらにあって、それをものすごく実感出来た。

「そつだ！ 帝国にも顔だそつぜ、鬼道」

「そつだな」

「じゃーな！ 源田！ 佐久間！」

「見舞い、たまに来てくれよ」

「おつ！」

別れを告げて、病室を出た。

出ようとした瞬間、佐久間から耳打ちをされた。

また円堂と来てくれ、と。

~~~~~

帝国に顔を出すと、みんな喜んで円堂に飛びついていった。

話を聞くと、みんなあの時から気になっていたのだと。

円堂はうれしがって、グラウンドで全員のシュートを受け止めていた。

そつして、あの笑顔でみんなに笑いかけていたのだ。

つくづく思うのだが、円堂の笑顔は何か、心を救う効果があると思う。

なんというか、暗い気持ちでも、見るとスカッとする。暗雲も追い返してしまうような不思議なパワーがあった。

帝国を出たときは、もう夜の9時を過ぎていた。

さすがに帝国まで来たせいか、円堂の家は遠い。

俺の家は近いが……………。

「円堂、どうする」

「あー、大丈夫。遠いけど何とかなるよ」

「いや、心配だ。送る」

「大丈夫だよ、鬼道のとうちゃん心配するだろ？」

こいつは、こういうところで上手に気を使うのだ。本当は寂しいだろうに。

「心配だ。仮にも女だろ」

「まあ、仮とか言っなよ！」

頬を膨らませて反論する。

その顔が、あまりにも可愛くて口元が緩む。

円堂は、俺がバカにしたと思ったのか、ぷいっとそっぽを向いてしまった。

こういうところは本当に可愛いよな……………。

「俺たち、優勝したんだな」

「ああ！ みんなのおかげだな！」

「お前のおかげは50%くらいだな」

「？ そんなことないよ。」

鬼道が居てくれなかったらきつとここまで来れなかったよ」

「そうか。そういつてもらえると嬉しいな」
「うん。」

鬼道のゲームメイクは本当に最高だ。

それで勝って来られたも同然だもんな！

……………ありがとう、鬼道」

「俺も礼を言う。」

ありがとう、円堂」

円堂は嬉しそうに笑って、こっちを向く。

綺麗だった。

俺は、この笑顔に何度救われただろう。

この笑顔をそばに置ければ、どんなに幸せだろう。

豪炎寺の顔を思い出して、軽い嫉妬がわき起こる。

息を吐いて、夜空を見上げる。

月が、俺たちを優しく照らしていた。

優勝の残り香（後書き）

佐久間×円堂、源田×円堂もありですね。

鬼道さんの大人っぽさにはいつも驚かされています。

今日の格言

「そっか。よかったな！」（にこっ）

宇宙のサッカー

今日は、久しぶりの練習で河川敷に集まっていた。

円堂との関わりは、ああ、デートを邪魔したヤツだな。

あれは結構おもしろかった（むかついた）

途中で帰ったのは、これ以上邪魔したらかわいそうかと思っただか
らだった。

円堂は、集合時間と少し遅れてきた。

「ゴメンゴメン！」

「円堂、おっせー！」

「はあ〜っ、ま、サッカーやろうぜ！」

「お前はいつもそれだな」

「まあ、やるか」

その時だった。

空から、黒い何かが落ちてきた。

それは途中から早くなり、雷門中の方へ落ちていって、激しい音がして地面が揺れた。

全員で雷門中へ向かった。

そこは予想通り、めちゃくちゃに荒らされていた。

校舎はぼろぼろに崩れ、がれきと化して、そこに合った。

放心状態でそれを眺めていた俺たちの前に、謎の男が現れた。

「人間どもよく聞け。我らは遠き星『エイリア』から来た星の使徒である。」

私たちはこの地球のある秩序に従って、貴様ら人間を支配しに来た。

その秩序とは、『サッカー』
サッカーをする物に伝えよ。

私たちを倒さなければ、この地球は人が住めなくなる、とな」
「まてっ！」

円堂の呼びかけに対応せず、その男たちは、消えた。
その場から、ふっと消えたのだ。

わけがわからない。

春奈が、パソコンを開いてテレビを写す。
どのテレビ局も、同じで、

あいつらは様々な中学校のサッカー部に試合を申し込んでいるらしい。

「次の襲撃予告は、傘見野中ですっ！」

「隣町か！」

「よし、行こう！ あいつらは俺たちが倒す！」

俺たちは、隣町へ走った。

~~~~~

傘見野中は、ちょうどあいつらの襲撃前だったらしく、あの男と部長が交渉をしているようだった。

「だから、俺たち、試合はしません！」

「ふふ……………」

「試合を望まないのは、敗北の証。破壊を開始するっ！」

「え、え、」

「まてっ！俺たちが相手だ！」

円堂が男へ叫ぶ。

男はこちらを向いて、不敵な笑みを見せた。

俺たちは、傘見野中の代わりに対戦する事になった。

豪炎寺は居ないが、大丈夫だろう。

あいつを待つしかない。

「お前の名前は」

「この地球の次元であえて言うならば、レーゼ。」

我らのチームはジェミニストーム！ さあ、始めようか」

「雷門イレブンのキャプテン、円堂守だ」

いつものあの笑顔はない。

嫌悪の溢れた円堂の言葉は、なんだか円堂らしくなかった。

しかし、あいつらは予想以上の実力で、俺たちは次々にやられて



いった。

途中で豪炎寺は来たが、あのファイアトルネードさえ止められた。

俺も、倒れ、意識が途切れる少し前、円堂の姿が見えた。

あいつも、倒れていた。

いつも起きあがって、何度も何度もあきらめない、と言った円堂は、立ち上がらなかった。

~~~~~

俺は、自分の家のベッドで寝ていたらしい。

なぜここにいるのか。

その疑問のあと、昨日の光景を思い出した。

きっと円堂の事だ。

部室に行っているに違いない。

俺は、何となく学校へ足を運ぶことにした。

宇宙のサッカー（後書き）

今日の格言

「よし、行こう！ あいつらは俺たちが倒す！」

もどかしさ

俺は、部室に来てみた。

足は痛いし、体の箇所が痛むが、円堂の事が心配だった。

あんな早いボールを何十回も受けたのだ、まともな痛みじゃない。

もうすぐで部室へ着く。

そこで、部室の前で、人影が見えた。

円堂と豪炎寺だった。

豪炎寺が、円堂を抱きしめていたのだ。

嗚咽が聞こえた。

俺には絶対に見せない、豪炎寺だけに見せられる顔だろうと思っ
た。

それが、酷く悔しかった。

俺が、円堂を抱きしめてやれる立場だったら、そう考えてしまっ

木の陰に隠れて、二人が離れるまで、頭を抱えて俺は泣いた。

~~~~~

全員が来た。

そこで、響監督がきて、今から俺たちが何をするのか説明した。

俺たちは、あの宇宙人を倒すために、イナズマキャラバンに乗り、日本全国を回って選手を集め、最強のチームになる、との事らしい。

新監督として、瞳子監督という女性監督が就任した。

俺たちはもうでていかなければならぬらしい。

荷物をまとめ、あとで集合、となってしまうた。

~~~~~

机の上にある雑誌。

本当の父から貰った物だ。

これを眺めると、あの時の円堂の手の温かさを思い出す。

置いていこう。

これは、持って行かなくても大丈夫だ。

円堂に未練はない。

そう言わないと、俺は壊れてしまいそうだった。

父に別れの挨拶をして家を出る。

いつここに戻れるかな。

その時、円堂をまた家に泊められたら、と考えてしまった。

~~~~~

イナズマキャラバンは、俺たちを乗せて出発した。

宇宙人たちは、財前総理を誘拐したらしい。

その現場の奈良シカ公園へ行って、手がかりを探すとの事だ。

そこでSPフィクサーズというチームと対戦となった。

大人だったが、さすが全国で優勝と言えばいいのか、勝てたのだ  
った。

そのキャプテン、財前塔子が、イレブンに入る事になった。

「円堂！ よろしくな！」

「おう！ よろしく、塔子！」

女子の加入は初めてだが、こいつのプレイは男に遅れを取らない。  
円堂は逆に仲間が出来て嬉しいと思う。

その後、公園のテレビ画面にジェミニストームの襲撃予告が行われた。

奈良テレビに行き、また戦闘となった。

しかし、豪炎寺のファイアトルネードが決まらなかった。

最初から、豪炎寺はどこかを見ていて、おかしいと思っていた。だがシュートが打てないとは思わなかった。

その日は、勝つことは出来なかった。

~~~~~

その日、シカ公園で俺たちは話して、休んでいた。

すると、監督がある提案をした。

「豪炎寺君には、チームをはずれて貰います」

衝撃的すぎて、全員が言葉を失った。

さすがに、シュートが決まらないからはずす。それだけの理由では納得が出来なかった。

豪炎寺は立ち上がって、荷物を持った。

あいつは出ていくつもりなのだろう。

「待てよ豪炎寺!!」

それを円堂が追いかけた。

俺たちは待っていたのだが、しばらくしても円堂は帰ってこなかった。

「円堂、帰るの遅いな」

「何かあったのかもしれない」

「……俺が見てくる」

「おい鬼道!!」

俺は、円堂が追いかけた方向へ走った。

イヤな予感がしたのだ。

もどかしさ(後書き)

今日の格言

「……俺が見てくる」

偽物の「想い人」

円堂は、俺の胸で泣いている。

追いかけて見たのは、円堂が声を殺して泣いていた姿だった。

豪炎寺は、居なかった。

その姿を見た俺は、我慢できなくなって抱きしめた。

円堂は拒むこともなく、おとなしく俺に身を預けていた。

「っ、ううっ……………ああ……………」

「円堂……………」

その体を抱きしめる。

すると、円堂に深く触れられた気がした。

小さくて、細い。

もっと力を入れれば、ぽっきり折れてしまうのでは。

そう思うくらい儂い。

腕に力が入る。

こんなに綺麗で純粋なお前を。

汚れた俺が手に入れる事など許されないだろう。

男が居るのに。

しかし、俺は俺を押さえられなかった。

その体を、心を、瞳を、「えんどうしちまもり円堂守」を欲しいと思ってしまった。

許されない、恋。

それが俺にはきつと丁度いい。

偽りでも、少しだけお前に愛して欲しかった。

「円堂、俺が、豪炎寺の替わりになる」

「……え……？」

「あいつが帰るまで、俺がお前のそばに居てやる。

愛してやるし、抱きしめてやるし、キスだってする。

だから、もう泣かないでくれっ……」

「き、鬼道……？ お前……その……」

円堂の言いたいことはわかっている。
俺が豪炎寺の替わりなんてなれるはずがない。
こいつにとつて豪炎寺は豪炎寺だし、俺は俺だ。
俺が豪炎寺にはなれない。

でも、円堂は深い傷がある。
その傷に、俺はつけこんだんだ。

最低だな、俺は。

円堂は、頷いた。
寂しさのあまり、替わりを求めて居たのだろう。

その頷きは、嬉しくて苦しくて、たまらなかった。

「ごめん、俺、お前に頼っちゃった……………」
「いい、豪炎寺が帰ってくるまで、俺がお前を可愛がってやる」

「……………ゴメンな……………」

その謝罪は、俺へなのか、去った円堂の愛しい人へなのか、それとも自分自身なのか。

わからないが、俺を受け入れてくれて事は、すごく嬉しい。なのに、何でこんなに苦しいんだろう。

俺は、豪炎寺に対し、どす黒い、汚らわしい感情を抱いた。円堂が俺を認めたとき、俺は、豪炎寺に勝った、と思った。そんなわけではない。

円堂の愛しい人は、今でも豪炎寺なのだ。

愛しい人の名前を口にする。

「まもじ守……………」

心は痛む。

でも、無視する。

俺は、傷つき抜いた。

泥をかぶってもいいと思えるほど、目の前のこいつが好きだ。

その心だけは、偽りじゃない。

「……………俺は、鬼道のこと、名前で呼べないし、好きとも言えない」

「構わない。俺は、お前がここに居てくれるだけで。」

それ以上は、何も望まない」

軽く、唇を円堂の頬にあてる。
僅かに嫌がったが、すぐ笑顔になった。
胸はもやもやしたまま。

ゴーグル越しのその瞳は、綺麗だった。

偽物の「想い人」(後書き)

やっぱりこういうのはいけないですかね(泣)
暗めです。

今日の格言

「あいつが帰るまで、俺がお前のそばに居てやる。
愛してやるし、抱きしめてやるし、キスだってする。
だから、もう泣かないでくれっ……………」

秘密の共有（前書き）

「」

一つ目のこのマークの下の話には暴力表現がございます。

この話は読まなくても問題はございませんので、

暴力表現に嫌悪感のある方は飛ばして次のお話をお読みください。

秘密の共有

仲間がいるところに戻って、豪炎寺の事を話した。

染岡はシヨックだったのか、円堂の胸ぐらを掴んだが、

円堂が悲しげな顔をしたためか、悔しそうに手を離して地面を蹴った。

「なんで、豪炎寺がっ……………」

「……………染岡。」

あいつは絶対帰ってくる。そう、俺は信じてる」

「円堂……………」

「だから、俺たちは今より強くなって、豪炎寺を待ってようぜ！」

その時、俺はふと思った。

これ以上、円堂は強くなれるのだろうか。

愛しい人が消えて行くのを見て、傷ついた円堂に強さを求めても良いのだろうか。

自分で自分を追い込んで居るのだろうか。

なんで、そんなに希望に満ちているのだろうか。

その夜は、シカ公園の隣にバスを止め、休む事になった。

~~~~~

真夜中、どうしても眠れず、俺はキャラバンを出た。

公園を歩いていると、あの銅像に着いた。

ここで、豪炎寺は別れを告げ、円堂を泣かせた。

何故か込み上げる怒りをどうしようも出来ず、そこに落ちていた石を蹴った。

「だれか、居るのか？」

「円堂？」

円堂は、銅像の裏から出てきた。

目が赤い。

泣いていたのだろう。

そこには触れないでおう。

「眠れないのか」

「うん。」

どうしてもあいつの事、考えちゃって

その一言で、またさっきの怒りが芽生え始める。

いきなり、曲が流れる。

円堂の携帯だった。

ディスプレイを開く。

暗い中で、携帯の光が眩しい。

「……………豪炎寺からだ」

「！」

俺は、円堂から携帯を取り上げた。

「なにするっ……………！」

「豪炎寺とは連絡をするな」

「えっ？」

「俺があいつの替わりなんだっ……！」

円堂はぼかんとして、俺を見つめた。

俺は、豪炎寺のメールを消した。

すると、円堂が携帯を取り戻そうとつかみかかる。

俺は、円堂を、殴った。

あの柔らかい頬を、この手で。

「鬼、道？」

「俺は、俺はっ……！」

「返せよ……………返せよっ……！」

「ダメだ！ 豪炎寺とはもう関わるな！」

「やっぱり違う！ 豪炎寺じゃないとっ！！  
きっ、鬼道はっ、鬼道は……！！！！！」

ぎり、と歯ぎしりがはつきり聞こえた。

俺は怒りを抑えられなかった。

何度も、円堂を殴った。

愛しい人を、殴った。

取り返しが、つかなくなってしまった。

円堂は何度も何度も、謝罪を口にした。

俺は、収まらなかった。

自分の愚かさに気づいて、手を止めた。

円堂はぼろぼろになって、苦しそうに息をした。

「っ、はぁ、はぁ、っ……………」

「すまない、円堂……………」

「っ、うう……………」

「だが、これだけは覚えて居てくれ。」

お前に、そうやって苦しみや愛を与えてやれるのは、俺だ。

豪炎寺は、そばに居ないし、今、こうして温かさを与えてやることも出来ないんだ」

「！」

俺は、円堂の顎を持ち上げ、キスをした。

自分に暴力をふるった相手だというのに、拒みもせず、おとなしく俺を受け入れた。

受け入れるしかない、と思われたかもしれない。

自分の報われないもどかさの八つ当たりをしてしまった。

もう、訳が分からない。

俺は、円堂を傷つけたいわげじゃないのに。

「すまない、すまない、痛いか？」

これじゃあ、練習も出来ないな……………」

「だ、大丈夫だよ」

「とりあえず、キャラバンまで行くか。乗れ」

「う、ごめん」

円堂は俺の背中に乗って、俺におんぶされる体勢になった。

俺はその後、歩きながらずっと謝罪を繰り返し繰り返し、発した。



秘密の共有（後書き）

ごめんなさい、鬼道さん。

今日の格言

「だが、これだけは覚えて居てくれ。

お前に、そうやって苦しみや愛を与えてやれるのは、俺だ。

豪炎寺は、そばに居ないし、今、こつして温かさを与えてやることも出来ないんだ」

## ほんの少しの触れ合い

「痛いかな？」

「はは、もう大丈夫」

「すまないな。本当に」

「もう気にしてないよ……………」

悲しそうに俯く。

俺は、円堂を、自分が報われない怒りをぶつけるため、殴った。傷が酷いので、俺は救急箱を出して、円堂の傷を手当した。

様々なところを殴ったためか、背中にも傷があった。

さすがに見るのはまずいかと思っただが、傷を放置するのモイヤだったんで、

円堂がジャージを脱いで、ブラをつけた状態でした。

普通なら欲情してもおかしくないが、先ほどの出来事で、俺も相当参った。

ガーゼに消毒液を浸し、傷を消毒する。

つけるたびに苦しそうに声を上げる。

「っ……………」

「監督には、林に転んで突っ込んだ、とでも言おう。

明日の練習は休め、いや、休んでくれ」

「うん、わかった……………、んっ」



石などで身を切ったのだろう。  
かすり傷がたくさんあった。

俺は、罪悪感でいっぱい押しつぶされそうだ。

「俺のこと、恨んでいるだろう」

「……………いや、不思議と、憎くもないし、イヤでもない」  
「そんなこと……………」

「鬼道のこと、もしかしたら俺、好きになるかもしれない」  
「？」

混乱した。

豪炎寺が好きなはずの円堂がそんなことを言うなんて、  
幸運のはずなのに、俺は首を振ってしまった。

「言っただろう。俺は『替わり』なんだ。」

豪炎寺が帰ってくれば、俺は普通のチームメイトになるんだ」  
「……………そう、だよな。」

「ごめん、気にしないでくれ。」

鬼道が、『愛を与えてやれるのは俺だけ』って言ったのが、  
そうしても忘れられないんだ」

傷の手当が終わって、ジャージを羽織った。

円堂は、俺に抱きついてきた。

びっくりして、そのまま、腕の中に閉じこめた。  
すると、泣き出してしまった。

「……………ごめん、ちょっとだけ、このままで……………」  
「わかった」

胸に顔を押しつけ、声を殺して泣いていた。  
俺は優しく、円堂の頭をなでた。  
ふわふわとした髪。  
どうしようもなく愛おしい。  
強く抱きしめると、円堂も力を入れた。

俺たちは、なんなのだろう。

傷つけたあとにこんな事をして。

俺が歪んでいるのだろうか。

殴られて、円堂は歪んでしまったのだろうか。

わからない、わからない。

「俺、サッカー出来なかったんだ」

「何故？」

「女だから、可笑しいって言われたから」

「でも今は」

「男になってるから。」

可笑しいって言われたいし、サッカーも取り上げられない」

「そう、なのか。苦労したようだな」

「いろいろ、幸せなんだ、俺……………」

彼女には、俺の知らない闇がある。  
そう思った。

ほんの少しの触れ合い（後書き）

円堂と鬼道が少しだけ触れ合えた瞬間。

今日の格言

「言っただろう。俺は『替わり』なんだ。

豪炎寺が帰ってくれば、俺は普通のチームメイトになるんだ」

## 寒さの中

北海道で、豪炎寺に匹敵する『クマ殺しの吹雪』を見つけ、俺たちは北海道で特訓をする事になった。

スノーボードは、鬼道家の後継ぎのための必要事項に含まれていて、何度かしたことはある。

吹雪は、相当なれているようで雪玉を軽々とかわして見せた。

円堂がすごいすごいと駆け寄ると、吹雪は嬉しそうに笑う。

その視線は妙に熱っぽくて、円堂に何かしら想いを抱いているのは見て取れた。

~~~~~

全員が眠るキャラバンの中、ことん、と音がした。

その音で目が覚め、ゆっくり起きあがる。

円堂がキャラバンから出ていこうとしていた。

俺も急いで後を追った。

キャラバンは、横に梯子が有って上に上れるようになっていた。そこを上って円堂に話しかける。

「風をひくぞ」

「鬼道、あはは、腹減っちゃってさ。眠れないんだ」

「全く。噛むということ覚える」

瞳子監督の指示で、夕飯は少量となり、

消化機能を働かせるためによく噛んで食べる、と言われた。

俺はその通り噛んだのだが、円堂はすぐむしゃむしゃと食べ終わっていたのだ。

細い体に、俺のマントをかけてやる。

円堂は少し苦笑いして、俺のマントの裾を掴んだ。

「えへへ、暖かいなあ……………くしゅんっ」

「ちゃんと体調管理をしろ。じゃないとサッカーさせないからな」

「ちえー」

くしゃみが可愛かった、と言うのは黙っておこう。

円堂の視線が暗くなった。

暗闇の中でも、見て取れるくらいだった。

「吹雪、どう思う？」

「別に嫌いじゃない。それに、ストライカーとしても一流だからな」
「だよなー！ あいつのシュートすげーんだ！」

「お前は、豪炎寺のシュートを止めたいんだろっ？」

「……………鬼道には隠し事は無理なのかな」

「わかりやすいだけだ」

ため息が白い息となって、円堂の口から漏れ出す。
そして、手を何度も握ったり開いたりを繰り返していた。
円堂がキーパーとして悩んでいる時の癖だ。

たまに手のひらをじっと見つめて寂しそうな顔をする。
これを見ている時は、いい気持ちではなかった。

開かれた手の平に、俺の手を乗せる。

円堂の手は、生きているのかどうかも不安なくらいの冷たさ。
なんとかしようと、俺の両手で、円堂の右手を包んだ。

「鬼道の手、あったかいな」

「お前の手が冷たいだけだ」

「ずっと、こうして居れたらなー」

「それは俺も思うぞ」

優しい笑みを浮かべ、こちらを向く。
月の光が優しく照らした円堂の顔。

俺は、円堂を自分に引き寄せ、抱きしめていた。

「好きだ、守」

「……………うん」

俺も、とは言わない。
それがルールだ。

愛の言葉を述べられるのは俺だけ。

それが、俺と田堂との間に刻まれた、暗黙のルールだった。

寒さの中（後書き）

今日の格言

「えへへ、暖かいなあ……………くしゅんっ」

まだ終わらない

吹雪がチームに入ってから、だんだんチームのまとまりが見えて、ゲームメイクがしやすくなったのを俺は感じた。

そして、ジエミニストーム戦。

スピード、パワー、テクニク。

すべてにおいて俺たちはあいつらに遅れを取らなかった。

そして勝った。

これで地球は守られる、と思ったのに。

「バカめ……………我々などまだセカンドランクにすぎない。本当に強いチームはまだまだいる……………」

宇宙人は、まだたくさんいる、というのか？

まさか、と思ったが、その時だった。

激しい揺れとともに現れたのは、また謎の奴ら。

そいつらは、ジエミニストームにあの黒いボールをぶつけた。

すると、その場から跡形もなく消えたのだった。

俺たちは、理解出来ない今の事に、ただただ啞然としていた。

~~~~~

その後、チーム強化のため、京都の漫遊寺中へ行くことになった。

バスの中のひととき。

みんなが寝静まっても、俺と円堂は何故か眠れなかった。

「ジェミニよりも、強いチームが居るなんて……………」

「俺も、あいつらだけで終わるなんて、どうもおかしかった」

「くっ、まだまだ、力が……………」

「円堂？」

隣に座った円堂は、悔しそうに顔を歪め、拳を握りしめていた。力を入れすぎているのか、手が真っ赤だ。

その手に俺の手を重ねると、円堂はゆっくり、手の力を抜いていた。

「焦るな。お前らしくないじゃないか」

「……………俺だって、泣きたいさ」

「？」

「い、いや！ なんでもないっ！」

さっきの一言は、よく聞こえなかった。

なんだか、無理をしているように見えて、悲しかった。  
俺にくらい、弱みを見せてもいいのに。

円堂守という人間は、基本的に明るくて、前向きでいつも希望に溢れている。

逆にいうと、暗い思考やマイナスな思いを表に出さないのだ。  
相手に心配をかけない、というのがこいつの思いなのだろう。  
しかし、それを知っていると、なんだか俺が信頼されていないように思えてならない。

俺に、出来ることといえば。

円堂の肩を持って、こちらへ引き寄せる。  
びくり、と肩が揺れたのがわかった。

顔を俺の胸の前に持ってきて、無理矢理押しつけた。

「ここで泣いても、誰もわからない」

「っ！」

「今日だけでも、泣いたらどうだ？」

お前はきつと、明るい顔ばかりの自分に、疲れていたのだろう」

「き、どう……………」

「我慢なんてしなくていい」

「うあああっ……………あああっ……………」

俺の胸に顔を押し当て、円堂は泣いた。

胸に溜まったものをすべて吐き出していくように。

思う存分泣いてくれ。

苦しみを、ため込まないでくれ。

ゆっくり、栗色の髪をなでる。

柔らかい。

彼女が抱えているものを、俺がすべて抱えられればいいのに。

~~~~~

泣き疲れて眠ったらしく、俺の肩に顔をあえて、可愛い寝息を立てた。

まだ涙が溜まっている。

親指でそれを拭って、体を倒す。

そんな彼女を見ると、我慢できなくなり。

「愛してる」

寝ている彼女の唇に、俺はキスを落とす。

まだ終わらない(後書き)

今日の格言

「……………俺だって、泣きたいさ」

妹に似ている

漫遊寺中について、新しい宇宙人のチームが来る事を話すと、
なんの反応も示さず、

「私たちは精神を鍛えるためだけにサッカーをしています。
宇宙人さんの要求はお断りして、お引き取り頂きます」

そう言って、すぐどこかへ行ってしまふのだった。

俺たちは頭を悩ませた。

この漫遊寺中に襲撃予告が有ったのだ。
絶対にあいつらは来て、この学校を破壊するだろう。

悩みながらキャラバンに戻ろうとすると、前を歩いている塔子が
消えた。

……………いや、落ちたのだ、落とし穴に。

「大丈夫か塔子!?!」

「いってて……………ああ、守、大丈夫だよ」

「ウシシシッ! 引っかかってやんの〜!」

いかにもずる賢そうな笑い声が聞こえる。

振り向いた先には、青い髪の(年下?)子が笑って居た。

「コラア!!! 木暮え!!!! んんっ!?!」

「ウシシッ!」

漫遊寺中のサッカー部のキャプテンが、木暮と呼ばれる子を追いかけると、

彼も落とし穴に引っかかった。

そして、木暮は、逃げていった。

キャプテンの話を聞くと、彼もサッカー部（補欠）らしい。

昔、親に捨てられ、人を信じる事が出来なくなった。

精神を鍛えるために雑用をさせているのだが、

それは自分に押しつけられているものと思いきみ、いたずらをするようになっただけらしい。

『親に捨てられた』

この言葉を聞いたとき、昔のあの光景を思い出した。

父と母が死んだことを、幼い春奈は理解出来ず、何度も聞いて、何度も俺は嘘を吐いた。

ある日、理解してもらえないことを承知で、事実を告げたのだ。

「おにーちゃん、おかーさんとおとーさんかえってこないよ」

「春奈、おとうさんとおかあさんは、かえってこないんだ」

「だって！ おにーちゃん、かえってくるっていったじゃん！！」

「あのかな……………わかってくれ。兄ちゃんだって……………」

「うそつき！ うそつき！！」

「春奈……………」

幼い春奈は泣きじゃくって、俺を拳で叩く事でしか怒りを表す事が出来なかったと思う。

小さい拳を何度も俺にぶつけ、うそだうそだ、と泣き叫んだ。

どうしていいかわからず、春奈を抱きしめた。

背中を叩かれる。

その時の痛さは、力はないはずなのに、すごく痛かった。今でも思い出せる。

春奈は、何かしら木暮に共通しているものを持っている。

それが悲しい過去であれ。

きっとあいつは、何か木暮にするだろう。

俺が意見することはないがな。

妹に似ている(後書き)

今日の格言

「春奈、おとうさんとおかあさんは、かえってこないんだ」

お姉ちゃん？

最近夜が眠れない。

今日も円堂と適当にふらついていた。
そこで、意外な人に会ったのだ。

……………春奈だ。

「お前も眠れないのか？」

「あ、おにーちゃん！ キャプテン！ デートですか？」

とんでもない事を聞く。

「いや、眠れないだけだ」

「最近一緒に夜、歩いたり話してるよな」

「わあ！ 夜まで交流してるなんて本当にカップルみたいですっ」

偽りの、カップルなんだがな。

妹が喜んでくれるのは嬉しいのだが、やはり素直に喜べない。

カップル。

その言葉を聞くと、どうしても円堂と豪炎寺が並んでいるのを想像してしまう。

「春奈はどうしたんだ？」

「いや、私も眠れなくて……………」

「ははっ、兄と妹でそっくりだな！」

「そ、そうか？」

「そうですか？」

「うん。頑固なところとかさ」

「「が、頑固じゃ、」」

「ほらハモってる〜!!」

「うっ……………」

春奈と顔を見合わせる。

自然と頬が緩んで、笑顔になったのが自分でもわかった。

円堂は、不思議な力がある。

話す相手に、温かさをくれる、力が。

「キャプテンがお姉ちゃんになったらいいのに」

「な、なっ……………!!」

その発言は……………っ!!

俺は顔が熱くなって春奈をちらちらとみる。

すぐく、その顔はにやにやしていた。

「そっだな〜、俺も春奈みたいな妹ほしいなあ……………」

「……………え？」

「俺一人っ子だから憧れるな〜、いいなあ」

やばい、こいつ、意味がわかっていない……………。

春奈の渾身の一言が、こんな感じに終わるのだから、おもしろくはないだろう。

俺にとっては助け船だが。

「そつだ！ 今度から俺のこと『お姉ちゃん』って呼んでいいぞ？」
「えつつつつつ！……！！！」

「名前がいいなら『まもじ守お姉ちゃん』でもいいけど？」

春奈がものすごい声を上げて驚く。

もちろん俺も驚いた。

俺の妹が……女子にときめいているなんて……。

「ま、まままま守姉ちゃんっ……！」

「ははは、可愛い可愛い……！」

「わぁ………」

円堂に頭をぐしゃぐしゃと撫でられ、春奈は下を向いてぽーっとしていた。

まさか、まさかまさか……。

こんなところにもライバルは存在していたなんて。

「ありがとうございますっ！ 守お姉ちゃん！」

「敬語じゃなくてもいいぞ？」

「そそそれはいいですっ！」

もともと男と思っているヤツもいるんだ。

女が惚れて可笑しい事はない。

ただ、妹が挑戦的な目を向けてきたのは、見間違えと言いたい。

お姉ちゃん？（後書き）

まさかの鬼 円 春

このコンビは可愛いと思う！

ナチュラルにGLです。

今日の格言

「そつだ！ 今度から俺のこと『お姉ちゃん』って呼んでいいぞ？」

次の苦しみ

木暮と春奈に進展が有ったらしく、何故か宇宙人の試合に木暮を出すことになった。

あいつらはイプシロンというらしい。
キャプテンのデザームはG K。

俺たちのシュートを、片手で止めて見せた。
ジェミニストームとは比べ物にならないくらいだ。

チームの能力はすべてにおいて俺たちを上回り、すぐに決着が付いた。

だがひとつ、おもしろい物が見られた。

木暮が、イプシロンのシュートを止めたのだ。

正直、実力を認めては居なかったが、その時、こいつは使えると思っただ。

そして、木暮はイナズマキャラバンに乗ることになった。

~~~~~

キャラバンが東京へ向かう最中、瞳子監督の携帯にメールが入った。

「みんなよく聞いて。」

影山が、真帝国学園をつくって、愛媛に居るとの事よ」

影、山？

……………真帝国学園？

「影山は確か捕まったはずじゃ？」

円堂が呟く。

その通りだ、あの時に鬼瓦刑事が連行した……。

「わからないわ。」

でも、そういう連絡がある以上、愛媛に行くしかないわ、古株さん

「あいよっ」

バスは進路を反対へ向けた。

その時、ポケットに入れた携帯が鳴る。  
心の中に不安が広がる。

『き、鬼道か？』

「辺見か。久しぶりだな」

『久しぶり、ってそれどころじゃないんだ！

それが、源田と佐久間が居ないんだ！！』

「！」

『数週間前から行方がわからない。』

鬼道には連絡しようと思ったんだが忙しそうだったからしなかつたんだ。

でも、あれがない……………それで』

「あれ？」

『……………「皇帝ペンギン1号」だ』

「ま、まさか？」

『そう、あの技の秘伝書が盗まれている』

「……………わかった、ありがとう辺見」

『ああ、居場所が分かったら教える、じゃあな』

「じゃあ」

携帯を切った。

どうということなんだ。

影山の逃亡。

源田と佐久間の失踪。

真帝国学園。

そして、皇帝ペンギン一号。

不安が渦巻いて、恐怖を覚え、体の震えが止まらなかつた。

次の苦しみ（後書き）

真帝国学園キター！

今日の格言

『……………』皇帝ペンギン1号「だ」

## 裏切りの

愛媛についた。

それまでのバスの中の空気は酷く重かった。

影山の悪事をするものなら当然だ。

バスを降りて、監督の言われた場所へ行く。

そこには、モヒカンと言えればいいのか、

不思議な髪をした男がサッカーボールをリフティングをしていた。円堂が話しかけた。

すると、男は膝に乗せたボールを上手にあげて蹴った。

いきなりのことにも関わらず、円堂はボールを止めて見せた。

俺は、彼女が手荒い扱いをされているのに苛立って、男に怒鳴りつけた。

「おい、いきなりとは失礼だろう？」

今の行為を撤回して謝れ」

「おやおや？ ラブラブみたいだねえ？ 見せつけてくれるじゃん」

「なんだと？」

「鬼道……………いいよ、気にしてないから」

「彼氏と違って彼女は優しいみたいだねえ。ん〜よく見たらかわい  
い」

「俺は男だぞっ！！」

「総帥から聞いてるぜ〜、まもり守ちゃん？」

「っ！」

「総帥、だって？」

男は、わざとらしく頭を下げ、嫌みな笑いを浮かべた。

こいつ、影山の息のかかったヤツか……………！

「初めましてつと。俺は不動明王、真帝国学園のキャプテンです」

「真、帝国学園……………？」

「そう！ お前が捨てた帝国だよ！！」

不動は、俺に指を突き付け、大笑いした。

「違う！ 鬼道は、帝国を捨ててない！！」

「ふーん。彼氏をあくまでかばうわけだ。

まあいいや。ついてこいよ」

行く当てもなく、俺たちは不動についていった。

~~~~~

港の前に俺たちは連れてこられた。

海しか見えないため、何が有るのかはよくわからない。

ぼかんとしていると、海から何かが出てきた。

大きな、潜水艦だった。

そして、陸にくっつかけると階段が降りてくる。

これに入れ、ということか。

俺は夢中で走った。

俺のイヤな想像がはずれてくれ……………。

中には、帝国と似たグラウンドがあった。

思い出す。

あいつらと、ボールを蹴っていた時代を……………。

「さあ鬼道ちゃん、感動のご対面と行こうか？」

「はあ、はあっ、鬼道っ！」

「え、円堂？」

「心配でついてきちゃった……………」

「お前……………」

「いちやつくのはふたりっきりの時にしてくれよー。」

じゃあ、ウチのサッカー部のフォワードとゴールキーパーを紹介しようー！」「

不動が指を立ててクイツと曲げる。「

入ってこいという合図らしい。」

そこで入ってきたのは、見知った顔だった。

「源田……………佐久間……………！！！」

裏切りの（後書き）

不動×円堂はうますぎるね

今日の格言

「初めましてっと。俺は不動明王、真帝国学園のキャプテンです」

求めるもの

「源田……………佐久間……………!!」

「……………久しぶりだな、鬼道」

佐久間が言う。

二人とも、前と比べ雰囲気が違う。
わかる、強くなっている。

「感動のご対面ってやつか？　これが」

不動が嫌らしい笑みで拍手をする。
拍手、というか手を叩いているだけだが。

「おい、お前ら、真帝国学園にはいったのか？
影山に従っているのか？」

「……………勝ちを求めたのだ」

「俺たちはお前が優勝したとき、どんな気持ちでベットで横になっ
ていたかわからないだろう。」

お前には勝利の喜びがあったが、俺たちは敗北の屈辱しかなかっ
たんだ

「！」

「お前が憎かった。羨ましかった」

「お前らの、望んだ結果が、……………影山に従う事なのか？」

「そつだ。勝ちにしか意味がない。」

勝ちを求め勝つこと、それが最高の喜びだ

「違う!!」

声が強くなつて、手の震えが止まらない。

「勝ちだけを求めたサッカーの結果はしっているだろう？」

それがどれだけの人を、自分を傷つけるかは雷門中の試合で、わかつたじゃないか」

佐久間と源田は、冷たい目で俺をじつと見ていた。

冷や汗が顎を流れ、胸に落ちて、ユニフォームの中に滑り込む。ぬるい感触が、不安を掻き乱す。

「……………お前だつて、勝ちを求めて」

「雷門へ行った。俺たちを置いて!!」

「っ違う! 鬼道は、お前たちを置いていったんじゃない!!」

「円、堂」

「鬼道は、鬼道は、」

円堂を制止する。

こいつを巻き込みたくはなかった。

俺は、佐久間と源田に頭を下げた。

目をぐつと瞑る。

殴られてもよい覚悟だった。

あの影山に、二人が染まってしまうのが、どうしても許せない。

「すまなかつた。お前たちが、俺をどう憎もつと構わない。

ただ、影山だけには従わないでくれ。頼む」

「あはははははは!! あの鬼道がチームメイトに頭下げてるよ

!! ケツサクだぜ!!」

「……………」
「今更謝って、どうするつもりだっ！！！」

佐久間が、サッカーボールを蹴って俺の腹に当てる。
その痛みは、体だけではなく心もえぐった。

何度もぶつけられた。

俺はそれを拒まなかった。

これを受け続ければ、もしかして二人の気が変わるかもしれない。
あり得ない期待に、浸ってしまった。

円堂が、ボールを止めた。

「くっ……………」

さすがに二人とも、円堂には手を出さないみたいだ。

二人は、不敵に笑い、俺たちを置いてグラウンドから出た。

不動から、試合を楽しみにしている、そう言われ腸が煮えくり返るようだった。

円堂から肩を叩かれる。

その手は、いつもと比べ、冷たかった。

「鬼道。」

俺、サッカーは勝ち負け関係ないものだと思ってた。

あくまで、勝敗はその結果なんだって。

でも、今回は違う。

源田と佐久間に、お前らのサッカーが違っつてわかるように勝たないといけない」

「円堂……………」

「大丈夫だ！ 勝とうぜ」

優しい笑みを浮かべる。

円堂が、震える手を、ゆっくり握ってくれた。

……………お前を支えるつもりだったのに、いつの間にお前に支えられてるんだろっな。

「ああ、円堂。勝とう！」

求めるもの（後書き）

実は、佐久間と源田は、鬼道と円堂の仲が羨ましかったりして。その憎しみが有ったらおもしろいかもしれません。

今日の格言

「俺たちはお前が優勝したとき、どんな気持ちでベットで横になっていたかわからないだろう。」

お前には勝利の喜びがあったが、俺たちは敗北の屈辱しかなかったんだ」

禁断の技

試合が始まった。

真帝国学園はやっぱり強い。

ボールを取られると、佐久間にわたった。

「鬼道見てろ！！　これが、俺の最強のシュートだ！！」

最強のシュート……………。

『そう、あの技の秘伝書が盗まれている』

佐久間、まさか……………。

「皇帝ペンギン一号……………！」

「やめろおおおおお……………！」

佐久間の足に、赤いペンギンが付く。
そして、シュートされる。

円堂、かわしてくれっ……………。
それだけは、ダメだ……………！

「マジンザハンド！！ ぐあっ！」

円堂が強い勢いではねとばされ、ボールと一緒にゴールへ飛び込んだ。
んだ。

急いで円堂のもとへ駆け寄る。
腹を強く打つたらしい。

「いっててて……………」

「大丈夫か？」

「ああ、次は止めて、」

「いや、止めるな。あの技を止めると、お前がサッカー出来なくなる」

「え？」

「みんな聞いてくれ！」

俺は雷門イレブンを集めた。

みんな、皇帝ペンギン一号を見て、ただ事ではないことをわかっているようだった。

「あの技は、封印された禁断の技なんだ」

「禁断？」

問いかけた一之瀬に向かって頷く。

「あの技を使うと、本当に強いシュートが打てる。

だが、その代償として、体の筋肉や細胞部分をどんどん破壊していく。

試合なら、3本打てば、あいつの体は、サッカーが出来なくなる」「サッカーが、出来ない……………」

「円堂。お前もまともに受けたら体を壊すんだ。

みんな！ なるべく佐久間にボールを回すな！」

それから、特定の人物にボールを回さないという設定で試合は続いた。

厳しく、ボールはなかなかゴール前へ回らず、不動が強行突破してきた。

ジャツジスルー2だった。

強引にボールを取られ、佐久間にわたる。

「皇帝ペンギン一号！！！！！」

「くそおおおお！！！！！」

「染岡っ！？」

染岡がシュートを止めようと、シュートを蹴り返したのだ。

それは不発に終わったが、威力が多少弱まったため、円堂はシュートを止められた。

染岡は痛そうに呻き、芝生の上で足を押さえて横になった。

「染岡っ！ 大丈夫か！！」

「え、円堂……………平気だぜ、こんくら、っ」

「もうベンチに戻れ。染岡、ごめん」

「……………すまねえな、バカなことやっちまって」

染岡は円堂に肩を借りてベンチへ戻った。

佐久間は苦しそうに息をして、ふらついた。

「なにやってんだよ！」

「すまん、今度はちゃんと決める……………」

「もうやめる！ 佐久間、源田！ 目を覚ますんだ！！」

「ふふふ、勝つため、ならこれくらい……………」

どろしよつもないこの怒りを、どこにぶつけねばよいのだろう。

禁断の技（後書き）

今日の格言

「もうベンチに戻れ。染岡、ごめんな」

過ちの先

その後、佐久間にボールがわたり、シュートを打たせてしまった。

その後の光景が、目に焼き付いていて、離れない。

体の節々に痛みが走って、動けないで立ちすくみ、曇った空を見て汗を流すあいつの顔。

その顔には絶望が満ちていて、すごく怖かった。

源田が駆け寄って、佐久間を介抱する。

俺は、どうしようもなかった。

グラウンドが揺れた。

この会場は海の上だ。

もしかして、船になにかが……………。

爆発音。

影山はこの船を沈めるつもりなんだ！
とりあえず、みんなを外に出す。

「円堂！ お前も、」

「俺は鬼道を待ってるよ！ 影山のどこにいくんだろ！？」

「……………ああ！」

俺と円堂は走った。

影山の居る、塔の一番上へ階段を駆け上った。

そこに、帝国の時と似た部屋があつて、いつものように平然と座つていた。

影山は、こちらを向いてにやりと笑った。

変わつてない、何もかも！

「鬼道、守さん、楽しんでいただけただろうか」

「ふざけるな！！！」

「体を壊すサッカーなんて、そんなのサッカーじゃない！！！」

「君たちにはわかつてもらえないようだな」

「……………」

サングラスの下の、瞳の色が見えない。

こいつの意志が、理解出来ない。

「一つだけ、いいことを教えてやるっ」

「いいこと？」

「この世で私の作り上げた最高傑作の作品は

「

~~~~~

船から脱出して、俺たちは港で救急車を待った。  
佐久間と源田、染岡を乗せてもらうために。

連れて行かれる前、佐久間が目を覚まして、少しだけ、話すことが出来た。

「すまないなあ……、久しぶりだったのに握手も出来ないなんて……」

「いい。今は体だけをいたわれ」

「そうだな……」

「佐久間っ！！」

「え、んどう……お前も悪かったな……」

「もう喋るな。あと、約束守ってくれよ？」

「約束……」

「シュート練、出来るようになってくれよ」

「！」

優勝した次の日に行った時の事を円堂は覚えていたみたいだ。

「あ、円堂も一緒にしてくれ。GKの知り合いはあまりいないんだ。」

「今度一緒に練習してくれ」

「俺もGK同士で練習はやったことないなあ。楽しみに」

してるぞー！」

「お、俺のシュート練も付き合ってくれ」

「おう！ 皇帝ペンギン2号、見せてくれよ」

佐久間は、泣き出した。

泣いて、目を瞑った。

そして、真っ白な救急車に運ばれて行った。

最後には、あいつは救われたみたいだ。

~~~~~

キャラバンの中で、染岡をチームからはずすと決まったことを告げられた。

みんな、あの瞬間を思い出して、泣きそうになっていた。

「みんな！ 泣いてたら、染岡にも、豪炎寺にも悪いぞー！」

俺たちはもっと強くなって、あいつらが帰ってきてもいいように

しないとな！」

円堂が言う。

みんなは納得したみたいだが、俺は納得出来なかった。

円堂を横から見た俺はわかった。

目に、涙が溜まっていたのだ。

涙の後ろが僅かに光っていた。

過ちの先（後書き）

今日の格言

「シユート練、出来るようになってくれよ」

ライバル消失？

傷が癒えないまま、俺たちはエイリア学園の本拠地と思われる大阪へ向かった。

テレビで見たような町の賑やかさが、少しだけ明るさをくれる。

基地は、ナニワランドという大阪のテーマパークにあるらしい。俺たちはナニワランドで、個人個人で搜索を始めた。

………本拠地をこんな目立つところに作るなんて、相当分
かり難いところだ。

何せテーマパークだ。

人目につかないところなんて少ない。

物陰なんかに入り口があったりして………。

「おい！ 鬼道！！」

俺の思考が、円堂の声で妨げられる。

ななななんと、円堂と春奈が腕を組んでいたのだ。

俺は、まま真っ赤になって、わわわ思考が………。

「おおおおお前らなにしているんだつつつ！……！！！」

「あーお兄ちゃんが焦ってるー」

「春奈がどうしても腕組みしたいって言ってさあ。

？ 鬼道もしたいか？」

「やっやややめろ！！」

円堂は空いている方の手を俺に、ほれほれと寄せてくる。
妹に一発やられた。

こいつ、強敵すぎる……………！！

とりあえず引き離す事に成功した。

「もーキャプテンとの邪魔しないでよお」

「春奈！ 俺も兄だからつてすべて優しい訳じゃないぞ！」

「ふふーん？ 羨ましかった？」

キャプテンは男に見えるからあ、お兄ちゃんとは手は繋げないからねえ」

「うっうっうつるさい！！！」

「二人ともどうした？」

「「なんでもない（ですっ）！！！！」」

兄弟喧嘩は、円堂の柔らかな声で終止符を打たれた。

ふう、俺も少し取り乱してしまった。

まったく、目を離すとすぐ円堂は誰かとひつついて居るんだから……………。

「さっき風丸と一緒にじゃなかったか」

「なんか一之瀬に引っ張られて、次吹雪が来て、塔子にめっちゃく

「ちゃ腕引つ張られた！」

「それからいろいろあって、なんかここにいるんだけど」

「災難だな」

「ま、鬼道と一緒になら楽しいかな」

「にっこり笑って言うその顔は、絶対反則だ。」

「本当はテーマパークなのだから遊園地デートでもしたい。でも、俺たちは地球の運命を背負っているんだ。まだ、安らぎはもらえないだろう。」

「そんなとき、一つの報告が来た。」

「ただ、大変でやんすキャプテン!!」

「どうしたんだ栗松？」

「一之瀬さんが………誘拐されたでやんす!!」

「なんだって!？」

「それは、俺たちにとってものすごい幸運だと思う。」

ライバル消失？（後書き）

春奈ちゃんのちよっかいは楽しいです。

今日の格言

「あーお兄ちゃんが焦ってるー」

女子が円堂だけではないのを忘れていた

一之瀬が誘拐されたという報告を聞いて（行きたくないのだが）俺たちは、誘拐犯のこもっているお好み焼き屋に来ていた。

円堂が、息を飲んでドアに手をかける。

このまま放っておくのはダメなのだろうか……………。

がらっ

「え、円堂！ 違うんだ、これはある事故で何故かここに連れてこられて！

決して君に飽きたわけじゃないんだ！

神に誓う！ これは浮気でもなんでも、むぐ」

「ああん、もうダーリン 照れてもって」

「た、助けてえ……………」

一之瀬が、肌の焼けた女子にお好み焼きを食べさせられていた。

その光景を意味するのはただ一つ！

『浮気！！』

「一之瀬。

ライバル脱退だな……………（にやり）」

「お前は強敵だったが、安心しろ。

新しい彼女と新しい道を歩めばいいさ」

「いやいや！！ 話を聞いてよ！！

俺はなんかわからないけどここに連れてこられてこうなってたん

だ!！」

「始めからお前と円堂は釣り合わなかったんだ」

「一之瀬さんおめでとうツス!」

「壁山まで乗るな!！」

一之瀬は全力否定をし続ける。

何らかの事情でこうなったのはわかるし、一之瀬が浮気することがないのも

よく理解している。

でも、これはライバルをたたき落とす絶好のチャンス。

この場で一之瀬を蹴落とせば、ライバルが減る。

すまないが利用させて貰う。(黒笑)

「一之瀬? もう行こうぜ」

「あああ? あんたダーリンのなんかっちゅーねん?」

「俺は雷門イレブンのキャプテン。一之瀬はイレブンの仲間なんだ」

「円堂……………」

一之瀬が、円堂に神を崇めるようなキラキラした視線を向ける。してはいけなのはわかっているが、舌打ちをしてしまう。

よし、鈍感さを利用してやるか。

円堂の耳に囁く。

「円堂。一之瀬は昔からお好み焼き屋に憧れていたそうだ」
「え？ てことは、ここに居るのは、夢を叶えるため？」
「その通りだ。だから、一之瀬とはここで別れよう。」
本場の店で働けるのは職人にとって幸せだからな」
「へえ〜……わかった！」

円堂はいつもの笑顔で頷く。
そして、一之瀬に別れを告げる。

くくく……………作戦通り。

「いや！ 俺はお好み焼き屋なんかたりたくないし！！」
「じゃあな一之瀬！ おいしいお好み焼き、作って俺に食わせてくれよー！！」
「違……………う……………！！！！！！」

その二人を見て、何か考えたのか、女の子が口を開く。

「なんや。ダーリンはあいつに未練があるっちゅーんか？
……………よし！
あんたら！ ダーリンをかけてサッカーで勝負や！！」

サッカーと言う単語に反応して円堂は挑戦を受けた。

もう少しだったのになあ……………。

女子が円堂だけではないのを忘れていた（後書き）

今日の格言

「え、円堂！ 違うんだ、これはある事故で何故かここに連れてこられて！」

決して君に飽きたわけじゃないんだ！

神に誓う！ これは浮気でもなんでも、むぐ」

素直になれない

ほんとうに一之瀬をかけた試合が始まった。

正直、みんなやる気はなかったのだが、

相手の女子、リカのチームが予想以上に強かったため、俺たちがムキになった。

で、勝って一之瀬はキャラバンに戻ってきてしまった。

残念なことこの上ない。

リカがそのあと案内してくれたのは、ナニワの地下修練場だった。そこは、地下には整備が行き届いており、ここがエイリア学園の本拠地とわかった。

最近はここに来ていないらしいので、俺たちは修練場で特訓を始めた。

エイリア学園の使ったここで特訓すれば、きっとイプシロンに追いつく。

そう信じて、身も心もぼろぼろになって、みんな修練場を後にした。



夜中にふと目を覚ました。

また眠れないみたいだ。

俺は、起きあがってキャラバンを出る。

円堂とまた会えるような気がしたのだった。

そして、予想は的中した。

円堂は、キャラバンの上に乗ってボールを持って考えている様子だった。

「考え事が」

「きつ鬼道!!」

「? そんなに驚かなくても……」

「なななんでもないからな!! 鬼道のことなんて考えてないからな!!」

可愛い台詞だとつくづく思う。

俺は、円堂の隣に腰を下ろす。

円堂が、少し辛そうに口を開いた。

「俺、最近わからなくなっただんだ」

「なにがだ」

「豪炎寺が好きなのかどうか……」

「それは」

「鬼道がずっと俺の隣に居てくれてさ。俺、豪炎寺より鬼道に隣に

居て欲しいって願ってる。

なんでだろうな。豪炎寺の事が好きだったはずなのに、いつの間にか穴が空いたみたいに心が空っぽなんだ」

「お前、自分の気持ちを理解出来ないのか？」

「うん」

悲しそうに俯いて、唇をぎゅっと噛む彼女を見る。

俺は、嬉しいんじゃないのか。

話がうまくいきすぎているからだろうか。

初めての時は、円堂は豪炎寺じゃないといけない、そう言った。今でも、頭にこびり付いている、あの叫び声。

しかし、今日の前の円堂は、あの時と矛盾している。

「俺は、卑怯者だな」……………、豪炎寺にも鬼道にも甘えて

……………お前は、すごく傷ついている。

「少しくらい、悪くなったって、誰も責めない」

「……………うん。」

「やっぱり俺、鬼道が好きみたい、だな」

「えん、いや、守」

「……………有人」

「……」

円堂が、名前で呼んでくれた。

愛する人に、自分の存在を受け入れて貰った。

嬉しかった。

伝わるはずがないと思った思いが、伝わった。

嬉しくて嬉しくて。

この瞬間を目に焼き付けたくて。

俺は、ゴーグルに手をかけた。
大切なこの瞬間を、自分の目で見たかった。

暗闇に目が慣れず、少しまぶしさを感じる。

だが、ゴーグル越しに見るよりも、円堂は綺麗に見えた。

「……………すごく、かっこいいよ」

「ありがとう」

「その目が、好き……………」

「っ、守……………」

円堂を抱きしめた。

力いっぱい抱きしめた。

いつもの何倍もの力で、細い体を抱きしめた。

その体は抵抗することもなく、静かに俺を受け入れた。

素直になれない(後書き)

二人の心が通い合った瞬間ですよ。
さあ、幸せになれるでしょうか？

今日の格言

「……………有人」

決断

ナニワ修練場の特訓から数日。
イプシロンとの試合があった。

人数が足りないためリカをフォワードにいれた。

特訓の効果か、イプシロンに遅れを取らなかった。
そして、勝てた。

しかしその夜。

栗松が襲撃され、入院。

イナズマキャラバンを去ることになった。

~~~~~

「俺の好きなサッカーは。

俺の好きな仲間を奪って行くんだな」

肩が震える。

円堂は、涙をこらえている。

「俺、サッカーが好きなのはすなわち。」

好きなサッカーは、俺からどんどん遠ざかっていく」

「円堂……………」

「どうしたらいいんだ？」

円堂は、俺に体を預けてきた。

俺は、その体を抱きしめて、受け入れる。

ただただ、優しく。

「円堂。」

俺は、どこにも行かないから……………」

「鬼道……………」

「だから、これ以上泣かないでくれ」

「うん……………うん……………」

細い体を抱きしめながら、俺は深い喜びと、円堂という存在に墮ちていく。

ああ、俺は彼女を愛する事に喜びを感じて生きているんだと実感する。

円堂は、疲れて寝てしまった。

星空の下、キャラバンの天井の上で彼女を横にする。

後ろで物音がした。

振り向くと風丸が立っていた。

「見ていたのか」

「まあな。豪炎寺から乗り換えたようだな」

風丸は俺の隣りに腰を下ろす。

そして大きいため息を吐いた。

円堂の寝顔をちらりと見る。

可愛らしい寝息がたつと、風丸はまた一つ大きいため息を吐いた。

俺は悟った。

「お前は、円堂の事好きだったか」

「小さい頃から円堂の事はずっと見てたさ。

なのに、豪炎寺と鬼道に取られちゃったな……………」。

幼なじみっていうポジションは、少し脱却しにくいみたいだ」

苦笑いを浮かべる。

その顔を見ると、風丸が円堂に対して苦労してきたことが伺える。

また、円堂への切ない思いも読みとる事が出来た。

「鬼道。早く豪炎寺に渡すかお前が取るか決めた方がいい」

「！」

「今のままじゃ、円堂はいつか必ず傷つくんだ」

「わかっているつもりだ。

でも、どうすればいいかわからないんだ。

もしあいつが帰ってきたら？

豪炎寺が帰ってくれば、円堂は俺との関係を忘れてあいつのもと

へ向かうかもしれない。

それが怖い。

だからといって、円堂が俺と一緒にいるのが正しいとも限らない  
じゃないか……………」

円堂と豪炎寺の仲を妬ましく思っていたはずなのに。

今になって、その関係を俺が壊してしまうのを恐れている。

でも、豪炎寺と円堂がまたあの関係に戻ってしまうのは、辛い。

俺は豪炎寺の『替わり』になっただけなのに。  
円堂に誰よりも執着してしまっている。  
我が俣だ。

怖い。

円堂が、自分のもとから離れてしまっるのが、怖い。

「鬼道は自分の思ったとおりにすればいいさ」

「……………」

「円堂はな、『鬼道は優しいんだ』って喜んでいていたぞ」

「！」

「じゃーな」

風丸は立ち上がって、星空を見上げて大きくのびをした。  
そして円堂の方を見つめ、おやすみ、と囁いた。

一人つきりになって考えた。

俺は、最後まで円堂のそばにいよう。

あいつが帰ってきたとき、ここを譲れるように。

もし、円堂が豪炎寺を望むなら、笑顔で彼女と別れよう。

逆に、円堂が俺を望むなら、彼女を離さない。

閉じられた瞳から一筋の涙。

俺は、それを拭って、円堂の隣りに横になった。

## 決断（後書き）

風丸さんと鬼道さんは絶対意気投合出来る。  
特にシリアス話で。

### 今日の格言

「鬼道。早く豪炎寺に渡すかお前が取るか決めた方がいい」

ちょっと違う

イプシロンを倒した後、福岡にある陽花戸よかど中学校に行く事になった。

なぜかというと、円堂の祖父の残したノートがそこにあるらしいのだ。

祖父の事になると目を輝かせる円堂はそれを聞くと、すごく喜んだ。

長い道のりを通して、俺たちは福岡へ着いた。

~~~~~

円堂の祖父のノートを貰ったあと、せっかくなので陽花戸中との交流があった。

そこで円堂のファンだという一年がいたのだ。

キャプテンの戸田の後ろに隠れて顔をひよこりと出して円堂を見つめている。

何故か俺はこいつに対し、不思議な嫌悪感を覚えてしまった。

「ええええ田堂さん!!」
おおおおお俺、陽花戸中一年立向居勇気といますっ!!!!!!
えええええっとなっ……………」
「おいおい、あこがれの田堂に会って緊張しまくりじゃないか。ほらほら」

戸田や他のチームメイトが立向居を後押しする。

その後も田堂との会話は片言のときれときれの会話が続いた。見てるとこっちまでもどかしくなるような会話だった。

しかし、あれは驚いた。

立向居がまさか「ゴット・ハンド」を覚えているとは思わなかった。

自力で覚えたと言うのなら、立向居の熱さは尋常じゃない。

だが、嫌悪感が拭える事はなかった。

~~~~~

その夜、立向居が俺のもとへ訪ねてきた。  
すこしびっくりしたが、話を聞こうと外へ出た。

「鬼道さん、ですよね」

「ああ」

「貴方のプレイは知っています。ミットフィルダーとして最高のゲームメイクをする、

雷門イレブンの最強の司令塔。

「……………そんなの、俺にとってはどうでもいいことですけど」

「田堂のことか」

「こくり、と頷いた。

なぜだろう。

田堂がらみの事に関して、俺は鋭くなったみたいだ。

「田堂さんは、女性なんですね？」

「……………いや、違う」

「嘔吐しないでくださいよ。俺の目は誤魔化せないのでから」

立向居の目が一瞬、ギラリと光った気がした。

この嫌悪感。

わかった。

会った時からわかっていたんだ。

……………田堂に好意を向けているやつだと。

ふう、と息を付いて、立向居がこちらを見る。  
目をあわせづらい。

「テレビ越しからずっと円堂さんを見てました。  
とても綺麗でかつこよくて、俺はあの人を欲しいと思ってしまっ  
た。

ずっつと同じ映像を見て、ずっつと円堂さんの事を考えていた。  
今日、わかつたんです。

貴方が円堂さんの想い人ということを

「!?!」

さすがに焦った。

そこまで初対面で見破るヤツなどいるのだろうか。

よく見ると、立向居はイヤらしい笑みを浮かべて俺を見ている。  
背筋に寒気が走った。

こいつは、敵だ。

頭の中で警報がガンガンと鳴り響いているような気がしている。  
だが、こいつに対して否定し続けるのは、認めているようなもの  
だ。

「俺、円堂さんを絶対自分のモノにしてみますから」

「……………円堂は、俺のものだ」

「……………失礼します」

礼儀正しいのも、逆に怖い。



ちよつと違つ(後書き)

ちよつとヤンデレ気味かな？立向居君。

今日の格言

「嘘吐かないでくださいよ。俺の目は誤魔化せないのでから」

## 太陽が燃え尽きる

陽花戸中で、次のエイリアのチーム「ガイア」が対戦に来て、試合をした。

風丸は、総攻撃に合い、重傷を負った。

吹雪は、多重人格であることをチームに知れ渡った。

ガイアの対戦のあと、風丸は離脱、吹雪は寝込んだ。

みんな辛そうだった。

俺だって、辛い。

司令塔の俺がチームメイトの状態を知らず、吹雪にたくさんのお金を求めていた。

それが、結果として吹雪を苦しめていた。

不覚、いや、言葉に出来ないくらい、傷が深い。

円堂は、俺たちの倍、傷ついた。

風丸が離脱してから、円堂は屋上でずっと俯いていた。

木野がサッカーボールを見せても、いつものように受け取らなか

った。

そして、「ゴメン」と言って、屋上に籠もった。

ご飯も食べない。

顔も出さない。

俺たちと、サッカーをしない。

「みんなやる気ないな」

「ほら！ ノリ悪いで！」

一之瀬がつぶやき、リカがチームを盛り上げようとする。

その言葉もむなしく、みんな練習に身が入らない。

そして、陽花戸中の屋上を眺める。

いきなり塔子が泣き出した。

「塔子、大丈夫か？」

「……………あたし、耐えきれないよ……………」

「お前が泣いてどうする」

「あっ、あたし、円堂が泣かなかったから耐えられっ、っでも！

え、円堂が落ち込むなんて、つく、イヤだよ……………」

塔子の言葉が、雷門イレブンに深く突き刺さる。

みんな、苦しんでいる。

風丸や吹雪の事ももちろんあるが、一番の理由はあいつだ。  
円堂が落ち込んでしまったこと。

「まるで、太陽が燃え尽きてしまったようだな……………」

俺は呟いた。

どう表情を作ればいいかわからない。

ポーカーフェイスには自信があったはずなのに、今日だけはわからない。

ただ、目を瞑って、あいつの笑顔を考えて。

~~~~~

夕食時間。

みんなでおにぎりを握った。

円堂も、お腹がすいているだろう。

いつも夕食の時間になったら食堂に飛んでいくからな、うん。

だからきつと食べてくれるだろう。

皿の上に、不器用な三角のおにぎりが並ぶ。

みんな、食べて欲しいと願って作ったものだ。

頑張った感が滲み出ている。

しかし、木野がおにぎりを届けたが、食べてくれなかった。

そのとき、俺は。

本当の絶望を知った。

太陽が燃え尽きる（後書き）

円堂ちゃん落ち込み話。

このとき、みんな辛かったと思います。

今日の格言

「まるで、太陽が燃え尽きてしまったようだな……………」

太陽が燃え出す前

「円堂、体を労れ。もう少しで雨が降る」

「鬼、ど……………」

空には黒い雲がかかり、今にも雨が溢れてしまいそうな空だった。

円堂が、笑わない。

空が、晴れない。

「風邪をひくぞ、このままじゃ」

「……………吹雪は、もっと酷いじゃないか……………」

「お前が風邪をひいてどうするんだ」

「だからって!?!」

俺は、円堂を胸の中に閉じこめた。

もう、なにも言わなくて良かった。

喋って欲しくなかった。

言葉は、いらなかった。

「喋らなくていい。」

強がらなくて、いいから……………」

「鬼道……………嫌だよう……………」
風丸が、吹雪が、栗松が、染岡が、佐久間が、源田が。
マックスが半田が宍戸が松林が影野が他の学校のみんなが
……………豪炎寺が、消えていくよ……………」

「大丈夫だ、大丈夫、大丈夫だから、大丈夫だから……………」
「嫌だよう、誰も消えないでえ……………鬼道も消えないでよう……………」
……………」

怖いんだ。

円堂は、誰かが消えていくことにおびえているんだ。

何故が俺は、円堂のそばにすることに優越感を感じていた。

汚らしい心をすぐに消し去る。

「俺は、ずっとお前のそばにいるから……………だから……………」
「鬼道、鬼道、鬼道鬼道鬼道……………」

少し彼女は壊れたのかもしれない。

俺の名を言い続ける円堂をまたぎゅっと抱きしめる。

一つになることで、こいつは誰かと一緒にいられる安心感が出来るだろう。

ずっと苦しかったはずだ。

だから、俺が、悲しみを流す雨になる。

ザアアアアア

雨が降る。

自分自身が濡れる事など気にしない。

ただ、円堂と一つになっているこの瞬間を離したくなかった。

雨で冷たいはずなのに、どこかに温もりを感じている。

「あつたけえ……………」

「なんでだろうな」

「鬼道が居てくれるからだな……………」

「俺も、円堂がいてくれるからだ」

雷の落ちる雨の中。

二人の体は一つになり、互いに身を寄せ合い。

また、深くお互いに堕ちていく。

~~~~~

円堂は、雨が止んでもまだ屋上に残っている。  
無理に引き込んで仕方ない。  
俺は彼女が自分で出てくるまで待つことにした。

「鬼道」

「……………塔子か」

廊下で会ったのは、塔子だった。  
手に、タオルとジャージが握られている。  
それと、苦しそうに笑っていた。

「円堂は、屋上にいるんだな」

「ああ、まだ座っているよ」

「……………鬼道が、羨ましい」  
「なぜだ」

「あんなになつた円堂を直視出来るのが、羨ましい。  
円堂の仲が、円堂を抱きしめてやれるのが羨ましいよ」  
「……………」

塔子は、それ以上何も言わず、階段を上がっていった。



太陽が燃え出す前（後書き）

塔 円ですの。

二人ともいいカップルと思うよ。

てか、鬼道編でG Lフラグ立ちすぎやわ W W W

今日の格言

「喋らなくていい。

強がらなくて、いいから……………」



## 太陽が燃える瞬間

まだ、円堂は立ち上がらない。

監督が、円堂をチームからはずす事を告げた。だが、みんな否定した。

キャプテンは円堂しか出来ない。

あいつしか無理だ。

「みんな、円堂を待とう」

俺は、みんなにそう呼びかけた。

どうすれば円堂が立ち上がるのだろうか。  
そんなときだった。

「鬼道君。立向居君の練習に付き合っ

てあげて  
木野が提案した。

その時、一つの考えが思いついた。

~~~~~

立向居がキーパーで、全員で取り囲み、シュートを打つ。

立向居自体は苦手だが、キーパーのセンスは抜群だ。

それに、こいつの努力する姿は、円堂のマジン・ザ・ハンドを練習した時に似ている。

いくらダメでも、何度も立ち上がる姿。

初めて出会ったときのあの言葉。

『……まだ、終わってねーぞ……』

「まだ、終わってません………!」

立向居の姿を、円堂に見せられれば、きっとあいつはまた、燃える。

そして、また、俺たちを照らしてくれる。

きつと。

「マジーン・ザ・ハンドッ！……！」

「これで君が、燃えられるだろう。」

~~~~~

「みんな、監督、すいませんでした」

円堂が頭を下げる。

みんな、笑う。

帰ってきた、俺たちの太陽。

これで、雷門イレブンはもどに戻る。  
そう思っていた。

「円堂さあん！俺もついていっていいですか！」

「立向居！？」

「マジン・ザ・ハンドが完成したら言おうと思ってたんです！」

「わぁ！よろしくな！立向居！！」

「はい！」

余計な虫が一匹ついてきた……………。

太陽が燃える瞬間（後書き）

今日の格言

「まだ、終わってません……………!!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3106v/>

---

円堂女体化計画。

2011年9月29日20時33分発行